
ホッとスイーとタイム

夏のラジオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホツとスイーとタイム

【Nコード】

N9849J

【作者名】

夏のラジオ

【あらすじ】

秋実は地元ローカルFMラジオで、「ホツとスイーとタイム」という番組のパーソナリティを務めていた。しかし、土曜深夜の激戦区といえる時間帯なのもあって、いまいち人気が上がらない。

そこで、スポンサーさまが番組のテコ入れを打診してきた。今までピュアなキャラクターを貫いてきた秋実に、自身の恋愛体験を赤裸々に語れというのだ。

それは一向にかまわないのだが、秋実は困惑した。彼女は十一年にも渡る、拓人との平凡な恋愛体験しか持ち合わせていなかったの

である。

第一章 グッドタイミング (1)

【ON AIR】

ありゃ？ ありゃりゃ？ 資料どこいった？ あ、どうもどうも失礼いたしました。

はい！ ただ今流れておりますのは、みなさんももちろんご存知ですよね。1942年、ピンク……ビング・クロスビーが歌って大ヒットした名曲 ホワイト・クリスマス です。もう、クリスマスの定番中の定番って感じですよー。へー、こんな古い曲だったんだねー。1942年って戦前じゃない？ 違う？ おお、まさに戦時中にリリースされたのだそうです。

この曲は、知ってました？ 史上二番目にヒットした曲なんだそうですね。一番はなんだと思います？ えーっと……1997年にリリースされた、エルトン・ジョンの キャンドル・イン・ザ・ウインド って曲です。うーん、エルトン・ジョンは知ってるけど、ちょっとぴんとこないなー。

あ、ダイアナ妃の追悼曲として発表されたんだって！ なるほど、なるほど。ダイアナ妃が亡くなったとき、私はまだ小学生だったと思うけど、すごく悲しかったなー。パパラッチ！ パパラッチって問題になったよねー。

おっと、話がそれてました。(ホワイト・クリスマス)です。

私、幼稚園の頃にこの曲を合唱した覚えがあるなー。当時はなんか覚えにくくてあんまり好きじゃなかったけど、今聴くと、とって

もメロディが綺麗な曲だつて分かりますよねー。

今夜はクリスマス直前スペシャルと題して、昨今のクリスマスソングをかけまくってきましたが、まさに大トリに相應しいというか、なんていうか、ムーディな曲です。ああ、全然まとまってないや、あはは。

さあ、もうすぐクリスマス。みんなはどう過ごすのかな。家族と？ 友達と？ 恋人と？ 私はまたバイトなんだろうけど、慣れっこだから気にしないもん。

とにかく、誰と過ごすにしても、みんなにとって楽しいクリスマスにしてほしいな、うん。そんなでもって次回、2009年ラストの放送で、クリスマスの反省会をしましょう。

反省会って！ 反省会になっちゃ駄目じゃんって感じなんですけど、あはは。

うわ、残り時間がやばいよ！ ちょっと喋り過ぎちゃったね。

それじゃあみんな、来週またお会いしましょう。 お相手はわたくし、アッキーでした。ばいばーい。よいクリスマスをー。

第一章 グッドタイミング (2)

【OFF】

「ホツとスイーとタイム って、なんでスイートの ト まで平仮名なんやろうね」アシスタントディレクター「ADで、タイムキーパーでもある真鍋まなべさんが、こんにやくをもぐもぐと噛みしめながら、こんな話題をきりだした。

「だってな、安心するホツとと、温かいつていうホツトをかけとるわけやる？ スイーとは甘いつてだけで、なんにもかかってへんもん」

私より二つ上で、眼鏡をかけた、見かけは才女風の女性である。

美人なのにもいつも安物のトレーナーを着ており、関西弁と相まってワイルドな印象をかもしている。そんな業界人らしくないところが、とても業界人らしい。

5

「あんまりばたばたしないで、スイーと楽にやりなさいという意味では？」

「えー。なんかそれ、無理やりやん。納得いかへんなー」

私は反対隣に座る、ディレクターの野波のなみさんに抗議の視線を送った。ホツとスイーとタイム という番組名を考えたのはあなたなのだから、この話題に口を挟まずに何をぼつつとしていいのかしらと。

「ん？ 何い？」

野波さんはトマトを食べるのに夢中だった。

「うわあ、ありえない、ありえない。おでんのトマトは絶対に認めない。」

「ホツとスイーとタイムのスイーとのとは何で平仮名かだそうです」

「考えてみりゃ分かるでしょうよ」人を小馬鹿にした口調で、野波さんは言った。

「片仮名でスイートって書きちゃったら、見た目がなんかお堅いじゃん。そこは可愛く恭しく、スイーとってしまったほうが、なんとなくイメージも明るくなるかなって思わない？」

父と同じぐらいの年であろうお腹の出た男性で、頭は見事につるつるだ。脂ぎった額と業界人っぽい喋り方が、少し苦手である。

「まあ確かに、言われてみればそうですねー」

「でも、ラジオなんやから、平仮名も片仮名も関係あらへんと思うねんけど」

再び真鍋さんが割って入る。

「イツミちゃんは厳しいなあ。そんなつんけんしてるから、二十七にもなつて誰からも見初めてもらえないんだよお」

へらへらと笑う野波さんを、真鍋さんが睨みつけた。私を挟んでの喧嘩は勘弁してほしいと思った。

今年の春から、なんの因果か私はFMラジオ番組のパーソナリティという変わった仕事を務めていた。その番組がすなわちホツトスイーとタイムであり、毎週土曜日の深夜零時より、一時間の生

放送で楽しくお伝えしている。

番組の内容は、タイトルどおり極めて緩い。往年の名曲を流したり、リスナーに電話をかけたたり、地方ローカルラジオならではの、元の優良店舗情報を配信したりする。

ほんの二、三ヶ月に一度ぐらいの割合だが、東京で活躍する有名人がゲストにきたりもするのだ。よくよく考えてみるとたいしたことないなあというような人でも、地方では大スターに変貌してしまうのだから、不思議である。

なんの因果かとは述べたものの、一応そこにいきつくまでには過程らしきものもあった。長くなるかもしれないけど、眠らずに聞いてほしい。

大学時代にバイトを転々としていた私は、あるときラジオ番組のADのバイトに出会った。その番組というのが ホットスイーとタイム の前身番組である。

一、二年ほどは普通にADを務めていたのだが、当時からディレクターだった野波さんに、「アシスタントとして出演してみない？」と打診され、面白そうなので承諾した。ADからアシスタントへ異例の昇格である。

そして今年の春、前身番組でパーソナリティを担当していた方が突如、「これからは活動拠点を東京に移す」などと言い始めたのでアシスタントからパーソナリティへ更なる異例の昇格を果たしたわけである。

ああ、けっこう短い話だった。

おでんを次々と口へ運びながら、私たちは他愛のない話を続けていた。

「はむはむ。ねえ、あきちゃん。俺と一緒に初詣いこうよお」

「えー？ かまいませんけど。はむはむ。すっごく混んでるんですよ？」

「いや、駄目やろ！ 一緒にいったら駄目やろ！ 野波さん？ あきちゃん、彼氏おるんですからね。あきらめてください。はむはむ」
「彼、人ごみ苦手だしなー。そうだ！ 真鍋さんも一緒にいきましよう。それならモーマンタイ！」

「やーよー。うちも人ごみ苦手やもん」

12月26日。クリスマスはつい昨日のことなのに、その名残はもう街のどこにも見かけられない。本日は深夜より、平成21年最後の生放送を控えていた。その打ち上げを、打ち上げという言葉と矛盾してしまうが、先にやっていた。

もともとは私たちも番組終了後に打ち上げを行っていたが、帰りが遅くなり過ぎてしまったため、誰かの提案で先に打ち上げを行うという方式に改められた。生放送を控えているのでお酒は飲めない。よって、ただ一緒に夕食をとる会となってしまうのは残念でならないが。

場所は屋台のおでん屋さんである。野波さんたちと待ち合わせしていた某家電量販店の玄関前から、魅惑たっぷりの赤提灯がちらちらと覗いているのを見つけたのだ。家電量販店の客引きさんの話だと、移動式の屋台だそうで、明日にはもう余所の町へ旅立ってしまったとのことである。

そう聞いては、いてもたってもいられない。当初のお好み焼きの予定を変更し、私たち三人は慌てて屋台の暖簾をくぐったのであった。

それにしても、屋台というものはなんて素敵なのだろう。明らかに外なのに、思いつき外なのに、ちよつと暖簾をくぐっただけこんなにも暖かいとは。ああ、何もかもを放りだしてこのまま屋台で朽ち果てたい。

「聞いてや、あきちゃん」真鍋さんの愚痴が始まる。

「こないだの合コンさー。一人の男にすごく気に入られてもつて。

その人、年収一千万超の青年実業家なんやー」

「いいじゃないですかー。やりましたねー」

「でもな。三十なのに、どう見ても頭がヅラやねん。先行き不安やつて思わへん？」

「ヅラってけっこうお金かかるんでしょ？ 年収一千万超の証ですなー」

「いや、そうゆう問題ちゃうくてさー」グラスを傾けながら、真鍋さんは悩ましげに首を振る。そのグラスの中の液体は水のはずだが、彼女はでき上がってしまっているようだ。

「やっぱ、ハゲって子供にも遺伝するやん？ 顔は悪くないんよ、顔は。やけど、ハゲは致命的やんか。将来生まれてくる子供がハゲ確定やなんて、うち、耐えきれへんわ」

ハゲ を連発し、明らかに野波さんを煽っている。私は心配になつて、しきりに野波さんを観察していた。私たちの会話に耳を傾けつつも、おでんを食らい続け、必死で聞こえないふりをしているさまがひどく痛々しい。

やがて彼は私の視線に気がつき、我に返ったふりをする。

「あれえ？ あきちゃん、ちくわも食べなきゃあ。おやじ！ ちくわ！」

「あいよ！」

「あ、どうも」

私は大口を開けて、ちくわにかぶりついた。このちくわ、なかなかの大物である。

「いいくわえつぷりだ。ねえ、彼氏のとどっちが大きい？」

「え？」

私はちくわをくわえたまま目を丸めた。野波さんの言葉の意味を理解するにつれ、顔を赤くしていき、やがてちくわを皿に落っこしてしまった。

な、なんと！　なんと！　なんと！　お下劣な！

これはあれだ。野波さんと初めて出会った日に、彼が「ADっていうのはア　ル童貞の略なんだ」などとぶちまけた際、「下ネタ、NO！」と、しっかりつきつけてやらねばならなかったのだ。「もー、野波さんってばー」と、愛想笑いを振りまいてしまったこの私、きつと悪い。野波さんの中ではもう、一生私はエロエロ女と見なされ続けるのだ。

「野波さん、あきちゃんに訴えられますよ」

「いいじゃんねえ。あきちゃん、けっこ好きなんだよねえ」

「好きじゃないですよ、もう!」

また愛想笑いを浮かべてしまう私。どうしようもなく進歩がない。よい子のみんなは私みたいになっては駄目だぞ。

第一章 グッドタイミング (3)

「ところで、その彼氏なんだけどさあ」

「はい？」

まだ何かあるのか、と野波さんに顔を向ける。

「そろそろ、ラジオでカミングアウトしちゃってもいいかなって思ってるんだよねえ」

「カミングアウト？」

なんのこっちゃ分からないが、仕事の話だというのは分かった。

野波さんはいつも、まさかというタイミングで仕事の話へ移転する。

「スポンサーさまからのご進言よお」皮肉たつぷりに野波さんは言う。

「まあ、ホツとスイーとタイムの反響がいまいちよろしくないってという話は前からしてるよねえ。聴取率も毎回さっぱりだし」

「す、すみません」

私はしゅんと肩を落とした。なんとも耳が痛い。

「あきちゃんが悪いんちゃうよ」真鍋さんがすかさずフォローしてくれる。

「土曜の深夜は激戦区なんやから。AMなんてどこも東京の番組ネットしとるし。うちかてホツとスイーとタイム以外はほとんどそうやん」

しかし、ありがたいそのフォローも、私の耳を通り過ぎて星空の彼方まで飛んでいってしまった。

はあ。

そうなのだ。前番組のパーソナリティだった方は、東京でもそれなりに知名度があり、もちろん話力もあった。だから激戦区でもなんとか生き残ってこられたのだが、私のような半分素人みたいな人間ではいかんせん荷が重い。アシスタント時代は素直で天然気味だというキャラクターが受けていた私だが、それはあの方がいじり回してくれていたおかげなのである。

番組開始当初はそのことに、私どころか野波さんたちスタッフ、更には上層部の方も気づけなかったようだ。激戦区の時間帯に素人同然の私が一時間も生放送をするというのがどれほどの暴挙か、わずかばかりの分析で簡単に導きだせるだろうに。

そんなわけで ホツとスイーとタイム が窮地に立たされているということ、今ではみんなが理解している。

ローカルラジオというものにはそれなりの需要があって、ホツとスイーとタイム にも多くのコアなファンがついてくれている。彼らの励ましのおかげで私やスタッフもくじけずに頑張っただけなのに、スポンサーさまはやはり黙ってはいはくれないのだ。

ああ、頭が痛い。これは比喩表現などではなく、実際の生理現象である。私は悩みに胸をしめつけられると、頭痛をもよおしてしまう体質なのだ。それなのに悩みやすい性格でもあるとは、なんて不公平な世の中だ。

「打ち合わせのときにも話すつもりだったんだけどねえ。番組にちよっとしたテコを入れるのを、先方は望んでるみたいなんだあ」

「テコ入れですか」

「そう」神妙な顔つきで頷く野波さん。一分前まで下ネタを炸裂させていた男だ。

「要はあれだねえ。もちろん、純心ピュアガールなあきちゃんも魅力つちやあ魅力なんだが、深夜番組にはお色気が足りなさ過ぎると、そう思わないかい」

「お色気……？」

ビキニを着てマイクに向かう自分を想像する。いや、それじゃあ解決になっていないような。

「なあ、あきちゃん」とそこでグラスに一度口をつけ、間を置いてから野波さんは続けた。

「恋多き女つてのは、魅力的だと思わない？」

「恋多き女ですか……」私は野波さんの言わんとすることを想像しながら、ちくわにかぶりついた。

「はむはむ。まあ、魅力的ですよー。毎年のようにワイドショーを賑わわせている芸能人とかって、だらしないけど、ちよつとかっこいいです」

「なるほど！ それ、ええかもしれませんね！」どうやら、真鍋さんは悟ってしまったらしい。

「あきちゃんつてめっちゃ可愛いし、男にもけっこうもてるやん？ その証拠に、うち、あきちゃんと知り合ってから彼氏がおらへんの見たことないもん」

「は、はむはむ！？」

私は驚いて真鍋さんに顔を向けた。だが、話の途中でつい丸ごと

口に入れてしまった卵がなかなか飲み込めず、反論ができない。

「そうそう！」野波さんも同調する。

「さっすが、イツミちゃあん。まさにビンゴよお。今まではピュアなあきちゃんの魅力を最大限に生かすために、基本的に恋愛の話はなしにしてきたけど、これからはもっと赤裸々に恋の体験を語ってもらおうかってねえ。リスナーは中高生が多いから、そのほうがきつと受けるはずさ」

「あきちゃんが選ぶ、私の熱い夜ベスト5とか？」

「おお！ その企画いいねえ！ さっそく、いただいとこう」

「はむはむー！」

先ほどまで、あれだけいがみ合っていた二人が、息ぴったりに私を攻め立てる。

「そういえば野波さん。あきちゃん本人に聞いた話ですけど、高校るときつき合っていた彼氏に自分から裸になって求めたことがあるらしいですよ」

「いいねえ、いいねえ！」

「は、はむ……ぐほ！」

私はげほげほと咳き込んだ。さつと真鍋さんに差いだされた水を一気に飲みして、なんとか持ちこたえる。目に溜まった涙を拭きとると、期待に瞳を輝かせた二人の顔が左右にあった。

「どっつ？ いいと思わない？」

野波さんを見やる。

「うちも、あきちゃんのお愛体験聞きたいな」

それから、真鍋さんも。

そんな二人の表情を見てみると、反論しようにもしくなくなってしまう。私はうーんと胸のうちで唸り声を上げた。

まあスポンサーさまのお怒りを静めるためならば、恋愛体験を赤裸々に語るのも別段問題はないだろうと思う。ただし、そういえば言ってなかったっけか。私の恋愛体験というものは、拓人たくととの盛り上がり欠ける十一年に終始するということを。

なかなか言いだせずに目をうろつろつと動かす私を、二人は不思議そうに見つめていた。やがて、どちらからともなく首を傾げ合う。

むむ、なかなか上手ではないか。

私には幼い頃、この首を傾げるといふ動作に憧れ、今か今かと繰りだす瞬間を見計らっていた時期があった。それをふと思いださせられてしまった。

第一章 グッドタイミング (4)

【アッキーの恋の軌跡】

小学校低学年だった当時、私は最強だった。

女子が男子にいじめられているという話を聞きつけては、一目散に現場へ駆けつけた。相手が気心の知れた同じクラスの子であろうが、名前も知らない余所のクラスの子であろうが、片っ端から宣戦布告してやった。

私の必殺技は、おそらくアントニオ猪木あたりに影響を受けたジヤンプキックである。スカートがめくれようと気にしない。十メートルほどの助走をつけ、男子の側頭部に不意打ちで決める。上履きをはいたままだと可哀想なので、あらかじめ脱いでおくのが礼儀である。

こんな大技を使いこなす女子は私以外におらず、大抵の男子はそれで泣きだしてしまうのだが、ごく稀に耐える者や避ける者が現れる。そんな奴らには、第二の必殺技である脅迫だ。

「やめてくださいーい。先生に言いつけますよー」

「何もやってませーん。こいつが勝手に泣き始めたんですー」

喧嘩のときは敬語を使いなさいと、先生に言い聞かされていたのだ。

あまりに聞き分けがない相手の場合、奥の手を使う。喉を枯らさなばかりに叫ぶのだ。

「せんせえー！ 女子がいじめられてますー！ きてくださいー！」
確かにそう言っているのだが、周りの者にとっては甲高いノイズにしか聞こえていなかっただろう。これを使えばもう無敵で、男子はその場を逃げだす他ない。ふと気がついたときは、いじめっ子の男子は姿を消しており、いじめられていた涙目の女子が私に駆け寄ってきている。

「あきちゃん。ありがとう」

「うん」にこつと微笑み、私は決め台詞を口にする。

「何かあったら、いつでも私を呼んでね」

私にとって、男子は絶対悪であり、女子とは盃を酌み交わした兄弟だった。私たちのクラスに平和な女子の楽園を築くべく、いつも私は目をぎらぎらさせ臨戦態勢を崩さずにいた。

そんな私の最大の宿敵ともいえる相手が、長山くんながやまである。転校してしまつたので顔はよく覚えていないが、後に聞いた話だと相当かっこよかつたらしい。しかし私の中では、やはり悪でしかない。

長山くんは何かにつけて私に戦いを挑んできた。休み時間に隙を見て忍び寄り、いつも、私の艶々な黒髪ロングを、手でぐしゃぐしゃにして逃げていった。

もちろん、私は追いかける。長山くんの逃げ足はかなりのものだったが、それでも運動会でハヤブサと戦われた私の脚力には敵うはずもまい。

徐々に差がつまり、あと少しで捕まえられそうになったとき、決

まって長山くんは男子トイレへ逃げ込むのだ。卑怯なり、長山！

他の女子は躊躇してしまうだろうが、私を舐めてもらっては困る。私は一切の迷いも見せずに、男子トイレの中まで追いかける。

「うわ！ こいつ、男子トイレの中に入ってきたぞ！ 変態だ、変態だ！」

「うるさい！ 死ね！」

喧嘩のときは敬語 という掟を守らぬ者には、私も相応の態度で臨む。

だが、自慢のジャンプキックはトイレでは使えない。助走するには距離が足りないし、上履きを脱げない。よって、アジャコングあたりに影響を受けたチョップを軸に戦線を組み立てるのだが、長山くんはそのチョップの雨からするりと抜けだし、逃亡を再開するのだ。

そんなこんなで休み時間の終了を告げるチャイムが鳴り響き、一時休戦となる。その繰り返しだった。

最強の女子だった私だが、長山くんにはどうにも負け続きであった。足は私のほうが速かったが、水泳のクロールでは、長山くんが一步リードしていた。なぜか勉強もできる奴で、テストの点数でもいつも負けていた。

小学校四年に上がる頃には、男子と女子の抗争はややなりを潜め、私と長山くんの個人抗争ばかりが過熱していった。

私のそばにいつもついていてくれたのが、小波なみちゃんである。その頃の彼女は気の弱いおとなしい女の子で、むしろ私が子犬のよう

な彼女を放つてはおけなかった。

ある日、小波ちゃんは言った。

「あきちゃんって、宮沢りえに似てるよね」

「え？ そうかな」

実はお母さんにも、同じことをよく言われていた。宮沢りえが一世を風靡したアイドルだということを、大人になった今ではもちろん知っている。だが当時の私には、貴花田との結婚を発表して結局は婚約解消した人という認識しか残っていなかった。よって、どんな顔をしているのかもぴんとこず、あまり褒め言葉だとは受けとっていなかった。

何が言いたいのかというと、要するに少女時代の私は絶世の美少女だったということだ。ははは。

しかしながらそんな自分の美貌に気づくはずもない私は、相変わらずの日々を過ごしていた。長山くんとの抗争の日々である。

ある日、ちょっとした事件が起きた。図工の時間、私と小波ちゃんが協力して作り上げた厚紙タワーを、長山くんが引っくり返したのだ。

しくしくと泣きじゃくる小波ちゃんを残し、逃亡する長山くんを追いかけてようとしたり、担任の若い女の先生が声を上げた。

「あんたたち、いい加減にきなさい！」

「だって、長山くんが……」

私の主張は聞き入れてもらえず、私と長山くんは揃って説教され

るはめとなった。しかもクラス全員の前に立たされてである。

「あのねえ」先生は両手を腰に当て、ぐっと前屈みになった。

「長山くんは男の子でしょう？ 女の子をいじめるっていうのは、男の子として最低の行為なんだよ」

ぶすつした顔の長山くんは、私は挑発的な笑みを見せつけてやった。

「あきちゃんも！」先生が私に顔を向ける。

「女の子はもつと女の子らしくしなくちゃ駄目でしょう？ 女の子は暴力なんて振るっちゃダメ！」

私もぶすつとし、今度は逆に長山くんがにやりと笑う。

そのときだ。説教を見守る男子の一人が、突拍子もないことを口にしたのだ。

「先生！ こいつら、つき合ってるんですよ！」

「な！？」大げさに反応したのは長山くんだ。

「お前、何言ってるんだよ！ ふざけんなよ！ 誰がこんな女と！」

逃げだす男子を追う長山くん。彼らの背中を更に追う先生。三人は教室を出ていき、騒ぎ声だけが廊下から届いていた。その騒ぎ声に耳を傾けながら、私はきよんととして、その場で立ち尽くしていた。

まったくもって意味不明である。なぜ私と長山くんが恋人同士などという発想が生まれてしまうのか。私は正義であって、長山くんは悪なのだ。そんな二人が恋人同士なんて、あるわけがないではな

いか。

あまりに突飛な言葉過ぎて、私は怒るのも忘れていたのだ。

思えばこのときもチャンスだった。なんのチャンスかというところ、首を傾げるチャンスなのだが、まだまだ情報量が足りていなかったのだろう。

まあ深くは気にせず、これからも長山くんとは幾多なる交戦の歴史を刻むのであるうなと私は考えていたのだが、それ以来長山くんはあまり私にちょっかいをかけてこなくなった。

私と長山くんが争うことにより、なぜか私たちがつき合っているなどと誤解する輩が出てくるということが判明したため、一応は理解できた。そんな誤解を受けるぐらいなら、私とて争うのをよしとはしない。ならば、もう正式に抗争を終えようではないか。

ただ、少しばかり寂しかったのは確かである。

第一章 グッドタイミング (5)

それからは比較的平和な日々が続き、私たちは五年生に進級した。小波ちゃんとは引き続き同じクラスになったが、長山くんとは別々のクラスとなった。

この頃あたりから、女子のあいだでは恋愛話が持ちきりとなる。その存在ぐらいいしか知らない私でも多少は興味を覚え、クラスのかっこいい男子についてのひそひそ話を、小波ちゃんと一緒に胸をどきどきさせながら聞いていた。

一人の活発な女の子が、好きな男子を暴露した。女子たちは騒然となり、その騒ぎに一応私も参加する。なんだか不思議な感覚であるが、その女子が好きだといった男子だけ、私は敵と見なさないことにした。

そんなとき、私たちとは別の女子グループが面白い企画を始めた。題して クラスの男子全員に聞きました。あなたの好きな女子はだあれ？ ミス五年三組コンテスト である。実態を説明するまでもなかるう。その名のとおりである。

実をいうと、その男子バージョンが先立って行われていた。こちらの企画者も同じ女子グループである。無記名投票なので私も一応参加したが、好きな男子などいるはずもなく、適当に目立たない男子を選んで票を投じておいた。

優勝候補筆頭の男子が半数以上の票を集めるといって、面白味のないう結果に終わった。その男子とも私は過去に何度かいさかいを起こしているので、「もし私が彼に票を入れたなどと勘違いされたらた

いへんな名誉毀損だな」という感想ぐらいしか抱かなかつた。

で、満を持しての女子バージョンである。男子のときとは比べものにならないほど私も興味津々だったが、一方で「有効票など一票も入らないのではないか」と本気で危ぶんでもいた。男子は散々女子に迫害を加え続けてきたのだ。無論、彼らも女子を敵と見なしているからこそ、そんな凶行に及ぶわけで、ましてや好きな女子などがいるはずもなからう。

かくして、開票のときが訪れた。

代表の女子が一票、また一票と用紙に書かれた名前を読み上げていくたびに、クラスのみんなは歓声を上げ、それとは裏腹に私は顔を青ざめさせていくのだった。

この驚愕たるや、どんな言葉で表現すればよいのか。黒板に書かれた私の名前、その下の 正 の数が最終的には三つにも上っていた。

陰謀だと私は思った。これは新手の嫌がらせなのだ。憎き男子どもが手を組み、私を陥れようとしている。

だが、彼らの作戦は見事にはまった。陰謀を陰謀と信じきれない私は、とにかくにも喜びを隠さずにはいられなかった。その日の放課後、お母さんに、生まれて初めて美容院という場所へ連れて行ってもらったのであった。

その頃あたりから、ひよっとして私はすぐくもてる女なのでは？と自覚し始めた。お母さんに宮沢りえの活躍も聞かされ、自信は更に高まった。完全に男子どもの手のうちである。

そうなる、必然的に私に票を投じた男子が誰なのが気になる。一五票も入ったのだから、ほとんどの男子が私に投票しているわけである。

「ねえ、小波ちゃん」と親友に訊ねてみる。

「うちのクラスの男子で、私のことが好きそうなのって誰かなー!」

小波ちゃんは誰だと思っ?

「うーん……」

胸もとのえりを指でつまみ、ぱたぱたと扇ぐように前後へ動かす。何かを考えているときの、小波ちゃんのくせだ。

先の総選挙で一票も入らなかった彼女に言わせてみれば、これほどうつつとしい友達はいないだろう。しかし、そんなことにすら気がつかないほど浮かれていたのだから、仕方がない。

小波ちゃんは優しい子なので、特に気分を害したようすも見せず
に答えてくれた。

「長山くんかな。やっぱり」

「な、長山くんって……」

うちのクラスではないじゃないか!

しかも、あの長山くんをチヨイスするとは

小波ちゃんの意外な一面を発見である。なんと彼女は面白い子だったのだ。お笑い芸人の真似をして私がツッコミを繰り返すとうすと、

「だって私、知ってるんだ」と小波ちゃんは続けた。
「ときどき長山くんが、廊下からこっさりとおきちゃんを見てるの。すぐく寂しそうな目で」

至って真面目な顔つきである。

ひよっとして、冗談でもなんでもないのであるか。

確かに、思い当たる節がないわけでもない。男子が好きな女子に對してちよっかいをかけたがるという理不尽なメカニズムが存在するということについては、すでに認め始めている。かの図工の時間の事件を発端とした長山くんの態度の変移も、すべてはそのメカニズムに基づいた自分の気持ち悟られたくないがためだったのでないか。

そうだ。そうなのだ。長山くんは私のことが好きだったのだ。

私は有頂天になった。もう、楽しくて仕方がない。「あの長山くんが私のことを」とそう考えるだけで、うひよひよな気持ちになる。さあ、どうやって長山くんをからかってやろうか。

その日の昼休みに、私は早速長山くんのクラスを赴いた。机で数人の男子と語り合っている長山くんを見つけ、ずかずかと教室の中に足を踏み入れていった。

「長山くん!」

満面の笑みを浮かべる私に気づいた長山くんは、一瞬だけぎよつとした顔を見せ、それからすぐに不快そうに眉をひそめた。

「勝手に入ってくんなよ、ぶす」

おっと、いきなりの先制攻撃である。うふふ、可愛い、可愛い。彼の気持ちを知っている私にしてみれば、すべての罵詈雑言は暖簾に腕押しなのだ。

長山くんが私を無視しようとしたため、私は笑みを絶やさぬまま、彼の背中へ回り込んだ。かつてのいがみ合いのせいで警戒を解くわけにはいかず、長山くんはきよるきよると私を目で追う。

「ねえ」私は背中から長山くんの顔を覗き込んだ。

「長山くんって、私のこと好きなんでしょ？」

「はあ!？」長山くんは身体ごと後ろを振り向いた。

「ふざけんなよ！ お前、殺されてえのか！ なんて俺がお前みたいな不細工、好きになんなきゃなんねえんだよ！ ぼけ！」

暖簾に爪が引っかかる。少々むかついてしまった。

「誤魔化したって無駄ですー！」私は唇を尖らせて言った。

「長山くんがいつも私のこと寂しそうな目で見てるって、友達が教えてくれたんですー！」

「知らねえよ！ 勝手に決めんなよ！ さっさと自分のクラスに帰れ！ くそあまー！」

困ってしまった。返す文句が思いつかない。

しかしまあ、男子という生きものは、なんでこつも素直じゃないのだろう。何杯カツ丼をご馳走してあげれば、本音を吐いてくれるというのだ。

気がつくと、周りの子どもたちの注目を浴びていた。男子も女子も、みな一様に好奇心に満ちた目をしている。私は恥ずかしくなって、逃げるように退散したのであった。

第一章 グッドタイミング (6)

昼休みのことを小波ちゃんに話すと、彼女は呆れたように溜息をつくのだった。

「それは駄目だよ。あきちゃん」

「なんで？」

「男の子が女の子に告白するのって、すごく勇気があるんだから、そんなに人がたくさんいる場所で詰め寄ったって、本当のこと言うわけないじゃん」

なるほど。言われてみればそうだ。私はまた一つ、大人になった。

ところが、放課後に予想だにしない出来事が起きた。今度は長山くんが私のクラスを訪ねてきたのである。

私は席についていた。帰る準備の整った状態で、小波ちゃんと二人で連続ドラマの話に花を咲かせていた。

「は？　なんか用？」

そんな悪態をつきながらも、私の心臓はばくばくと高鳴っていた。

長山くんは周囲を見渡した。やはり、生徒のほとんどがこちらに目を向けている。

それから長山くんは、大きく深呼吸をし、真っ直ぐに私を見下ろしたのだった。

「好きです」

「はい？」

まるで心臓で何かが爆発して、その衝撃が全身に広がっていくような感覚。おそらく、肌という肌が粟立っていたことだろう。長山くんの気持ちをとうの昔に察しており、おまけに今その台詞を告げられる予感もわずかながらあった。なのに、どうしてこんなにうるたえてしまうのだろうか。

しばらくして、私は我に返った。すると、どうだ。教室中、大騒ぎではないか。頭の弱い男子どもが、「ひゅうひゅう！」や「熱いね、お二人さん！」など、決まりきった文句をはいている。

私はまた少し腹が立った。こんな恥をかいてしまったのも、全部長山くんのせいである。昼休みの仕返しもしてやらねばならない。

さあ、この世というこの世の黒い部分を全部詰め込んだような、そんな言葉で長山くんを拒絶してやるのだ。

ところが。

「お前は俺のこと、どう思ってる？」

「え？ 長山くんのこと？ え？ え？」

またしても、私は固まってしまふ。なぜだ。「あんたのことなんか、好きなわけじゃないじゃん、くそばか！」と言ってやればいいのに。ぱくぱくと金魚のように、口を開閉するばかりだ。

私はうつむいてしまった。顔が真っ赤になっているような気がしたからである。

「き、嫌いってわけじゃないけど……」

「好きなのか？」

もう一度顔を上げて、長山くんを見る。なんとという男らしさだろ
う。まさか、彼にこのような一面があったとは。

私は彼にすべてを委ねるように、そっと目をつむった。

「好き、です」

そして、両手で顔を覆った。

ああ、もう誰にも見られたくない。長山くんにも、小波ちゃんに
も、クラスのみんなにも。私の顔はきつともう、完熟トマトのよう
な塩梅になっていることだろう。

「おい、目を開ける」

言われるがままに、私は手をどけて目を開けた。そこに、優しく
微笑む長山くんの顔があり、私も不器用ながら微笑んでみせた。

すると次の瞬間、長山くんの笑顔がどんどん卑屈な、気持ちの悪
い笑顔に変わっていくのだった。

「お前に言ったんじゃねえよ。ばーか！」

「へ？」

ざわめきの中、長山くんは身を翻し数歩移動した。そこに、いつ
の間にか私のそばから離れていたらしい、小波ちゃんが立っていた。

「俺、きのした木下が好きなんだ」

「き、木下……小波ちゃん？」

私は目をまん丸にして呟いた。

「ええ！」もとから少し赤い小波ちゃんの頬が、絵の具を塗ったよ

うに真っ赤になった。

「わ、私？ どういうこと？ だって、あきちゃんは……？」

「昼休みのお返しだよ、ぼけ！」小波ちゃんの問いなのに、長山くんは私に向かつて答えた。

「お前みたいなくそ生意気な女、誰が好きになるかっての。お前のせいで、まだ木下に告白する気はなかったのに、告白しなきゃいけなくなっちゃまったじゃねえか。殺すぞ、あほ」

長山くんは小波ちゃんを見つめた。

「木下。お前のことが好きなんだ。つき合ってくれ」

「で、でも……」

小波ちゃんはちらちらと私の表情を窺う。

私の宮沢りえ似の美しい顔も、そのときばかりは、極悪同盟のダンプ松本みたいになってしまっていたことだろう。そんな凄まじい形相で、私は長山くんを睨みつけていた。

お、おのれえ！ なんとる屈辱！ この怒りと憎しみを一滴残さず右足に込めて、お前に叩き込んでやるからな！

いつしかざわめきは、長山くん小波ちゃんへの冷やかしの声に変わっていた。その声を脳裏の隅で聞きながら、私はこっそりと上履きを脱いでいった。

長山くんは小波ちゃんにも色々ひどいことをしてきたのだ。小波ちゃんはずっと交際を断ってくれるはず。それで意気消沈する長山くんの側頭部に、追い討ちをかけるようにジャンプキックを見舞ってやるのだ。

しばらくして、ついに小波ちゃんが口を開いた。

「私も、長山くんが好き」

「え？」

私は手に持っていた上履きを、ぽてんと床に落とした。

「だから」小波ちゃんは、身体をもじもじさせながら続けた。

「友達からなら、つき合っただけでもいいよ」

「ほ、本当!？」

冷やかしが一層、ヒートアップする。最初より明らかに人の数が増え、いつの間にか他のクラスからの野次馬も混ざっていた。まんざらでもないような顔をしながら、長山くんはそんな彼らに弁明の言葉を投げた。

一方で、とり残された私はその場に立ち尽くしたまま、身動き一つできない状況にあった。思考回路が完全に遮断され、目の前の光景がテレビドラマか何かのような、まるで実態のない世界に見えていた。

首を傾げようかなと、私は思った。

今考えれば、タイミングとしては正しい。これ以上ない、グッドタイミングといえる。しかしそのタイミングを逃し続けてきた私にとって、自然に首を傾げるというのは至難の技であった。

実行に移した途端、ごきつと鈍い音がして私はうずくまった。その日の夜、母に連れられて整体医院の門戸を叩くはめになってしま

ったのだった。

第一章 グッドタイミング (7)

【OFF】

「まあ、結果として私はその男の子に失恋して、その女の子に恋で敗れたっていうふうな扱いを受けるんですけどー、正直な話をしちゃうと、本当にその男の子のことが好きだったのかどうか、よく分かんないんですねー」

ヘッドフォン越しに、CMまで十秒前という告知を受ける。

「でも、好きだって言われた瞬間にときめいてしまったのは確かなので、初恋の相手は？ って質問を受けたとき、一応その男の子だっていうふうに答えていますよー、ふふふ」

五秒前から、カウントダウンが始まる。真鍋さんの声である。私は焦りを覚え、ものすごい早口でまくし立てた。

「えーっと、以上が、私が恋というものを始めて意識した瞬間でございます。新コーナー、アッキーの恋の軌跡。記念すべき第一回目はこれにて……CMですー！」

心地よいカフェミュージックをバックに「アッキーの真心伝えます。ホッとスイーとタイム！」と元氣一杯に私が叫ぶ。そんなジングルに少しかぶってしまったが、なんとか間に合った。私はふうと一息つき、テーブルの上に置かれた紅茶を啜った。ちなみに紹介が遅れてしまったが、アッキーとは私のことだ。笑いたきや笑えばいい。

さて、私の恋愛体験を赤裸々に語れというスポンサーさまのリクエストにお応えし、とりあえずは小学生時代の初恋の話を経々と語って見たわけだが、スポンサーさまには満足いただけただろうか。

「けっこうよかつたつすよ」

「あ、本当ですか。どうもです」

嬉しい言葉をくれたのは、私以外で唯一放送ブースに入り、喋りはしないがアシスタント的な作業をやってくれている構成作家さんである。スポンサーさまではもちろんないが、なんとなく私は自信をつけた。

「初恋の話はよかったけど、もうちょいスムーズにCMに入れるようにしてほしいな」

リスナーから届いたメールの束を持って、真鍋さんがブースの中に入ってきた。

「ちゃんと、全部言えたからセーフですよ」

「言えてへん、言えてへん」

今夜のアッキーの恋の軌跡は、ここまでだ。番組の枠は一時間あるのだが、そのほとんどはレギュラーコーナーで埋まっており、私のことばかりに時間は割けない。

「そっぴやさ」と真鍋さんは私の顔を見た。

「さっきの話に彼氏って出てきたん？ 小学校も一緒やったんやろ？」

「ああ、拓人ですか」

勇気をだして、私は本当のことを真鍋さんたちに話していた。

私がまだ一人の男としかつき合ったことがないという事実を知ると、野波さんも真鍋さんも心底困ったような顔をしていた。本当に私のめくるめく恋の半生を当てにしていたらしい。

しかし、その拓人とは中学二年の頃からずっとおつき合いしている仲なのだという話をすると、二人の顔色は見る見るうちに変わっていった。がばつと身を乗りだすようにして食いついてきた。

「それって、ロマンチックやない？」

「うんうん。そっちはそっちでありな気がするなあ」

ふむふむ。盛り上がり欠ける恋とはいえ、中学時代から十一年もつき合っているというだけで、充分にドラマになるのだそうだ。

というわけで、私は赤裸々に、拓人との恋を語ることにしたのだ。それがもしつまらなかつたら、野波さんが責任をとるとまで言ってくれた。言ったのは真鍋さんだが。

拓人との恋を語るのだから、初回の初恋の話にも、一応拓人が登場していなければならない。

しかし、大丈夫。名前はだしてないが、ちゃんと登場させてあげるのだ。

今年最後の生放送が終了し、午前3時15分を少し過ぎたところで帰路についた。いつもはスタッフ数人と一緒に帰るのだが、番組

にとつては仕事納めだからか、今夜はみんな残業していくらしい。元スタッフの私も手伝おうとしたが、「邪魔になるから」と優しい言葉をかけてくれたので、一人で帰ることにする。

あらかじめタクシーを呼んであった。タクシーは駐車場まで入ってこられないので、十階建ての局の正面玄関の前に堂々と停まっていた。私が大スターだったなら、もう少し丁寧な待遇となるのかもしれない。

覚悟を決めた私は、正面玄関を飛び出た。すると、十二月の突き刺すような冷気に続いて、数人の男性が私に駆け寄ってきた。

「アッキー！ 応援してるからね！」

「よいお年を！」

えっへん。ここらじゃ、それなりに顔が知られているのだ。本日の出待ちは、にい、しい、ろお、はあ……五人のようである。中には、あどけない顔をした中学生のような子もいる。三時だぞ、三時！ 親は何してるんだ。

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

そそくさとタクシーに乗り込み、私は運転手に行き先を告げた。

窓の外に向けて手を振りながら、ふうと溜息をつく。

ああ、頭が痛い。

仕事はもちろん楽しいのだが、それはそれとしてやっぱり疲れる。特にラジオパーソナリティというのは、リスナーにもそうだしポンスナーにもそう、局の上層部の人や気心知れたスタッフたちにさえ

も、何かと気をつかわねばならない。

それなのに、結局は報われずじまいだ。割れものに触るようにして臨んでいる ホットスイーとタイム も、いよいよテコ入れせねばならないほど危うい立場になってしまったというじゃないか。そして、そのテコ入れによって事態が好転するのかどうか正直いって怪しい。

恋愛体験を赤裸々にか

そういえば、自分たちのことをラジオで話す件について、まだ拓人に許可をえていないということを思いだした。あんな男だから別に反対などはしないだろうが、一応は訊いてみなければなるまい。

もう真夜中だし、それに急ぎではない。朝起きてから、一番に電話することしよう。まあ明日は休みだから、どうせ会うことになるのだろうが。

第一章 グッドタイミング (8)

自宅マンションの目の前の、細い路地で、タクシーは停車した。料金を支払い、私はタクシーを降りてそそくさとエントランスホールへ駆け込んだ。自宅でファンに待ち伏せられた経験は今のところないが、それでも気がかりは気かりである。私の場合タレント事務所などに所属しているわけでもないの、自分の身は自分で守らねばならない。

エレベーターで四階まで上がる。実はこのときが一番緊張する瞬間である。大した防犯設備もないマンションなのだから、もし私の家の住所を知っているのなら、賊はすでに四階まで上がっているはず。四階でドアが開いた瞬間に襲われてしまったらどうしよう。

やがて、四階につく。薄明かりの灯った回廊は本日も例外なくひっそりとしており、私は安堵の息を吐いた。「ローカルラジオのパーソナリティ無勢が大物を気どるな」と罵られてしまいそうだが、怖いものは仕方がない。

いつものように、なんだか申し訳ない気持ちになりながら、私は玄関の鍵を開錠しようとした。すると。

「あれ？」

鍵がすでに開いている。もしやと思いながら、私はノブをひねった。案の定、玄関先に見慣れたスニーカーが脱ぎ捨てられている。

「はあ？」と私は眉間にしわを寄せた。

「鍵を閉めるって、いつも言ってるのに。あいつはなんでこう、だらしがなくて……」

ぶつぶつと文句を言いながら、浮き足立っている自分にも気づく。まさか、ラジオ終わりに拓人と会えるなどは、考えてもいなかったからである。

拓人は彼の家の近所の服飾通販事業所で、週六日毎日十時間ほどがつつり働いている。彼にとって休日前の土曜の夜こそ最も心が昂るひとときなのだろうが、あいにく土曜の夜は私が仕事なので、毎週職場の仲間と飲み歩いているらしい。酒が好きなくせに酒に弱い彼は、愛する恋人がパーソナリティをしているラジオのことも忘れ、この時間は自宅でもいつも酔いつぶれているのだ。

だから、土曜の夜に私の家を訪ねてくるということとは、ないわけでもないが非常に珍しい。そんなものの存在すら知らなかった自動販売機の当たりくじに当たって、もう一本サービスしてもらったときのような気持ちである。

頭痛もすっかり治まってしまった。リビングのソファに着ていたコートをかぶせ、私はつきつき気分です寝室へ飛び込んだ。

寝室は暗かったが、ベッドに男が横たわっているというのはいきなり見てとれた。どうやら、うつ伏せのようである。シングルベッドを我がもの顔で占領するその男の腰付近に、私はストンピングを見舞ってやった。

「う、うーん」

ベッドから不快そうな呻き声が上がったところで、私は寝室の明かりを点けた。

「ああ、お帰り」身体を反転させ、私の顔を認めたところで、拓人

は言った。

「寒かったでしょ。まあ、入りなさい、入りなさい。暖めておいたから」

トレードマークともいえる細い目を更に細め、自らを覆っている布団を指し示す。

「私のベッドだし」

ぶしつけに言いつつも、私は拓人の隣に潜り込んだ。

ああ、暖かい。冷えきっていた身体が瞬時に温まっていく。緊張していた心が解きほぐされていく。それらの快感を身に沁み込ませるように、私はあくびと背伸びを同時にした。

「あのさあ」身体を拓人のほうへ向ける。

「私の留守中に部屋にきたときは、鍵を閉めておいてくれないかな。何度も、何度も、何度も言ってることだけど」

「ああ、すっかり忘れてた」

拓人は無邪気に微笑んだ。その台詞も、何度も聞いている。

「あと、うちにくるときはあらかじめメールとかしてほしいな。特に私が留守の場合。急に人がいたらびびっちゃうでしょ?」

「それにしても、長山くん懐かしいなあ」拓人は私の言葉を完全無視した。

「すっかり覚えてるよ。あのときみんな笑ってたけど、俺はこっそり秋実が可哀想だなんて思ってたんだよ。本当だよ」

「そりゃあ、どうも」私は頬を膨らませた。

「珍しいじゃん。ラジオ聞いてたんだ」

私が長山くんに仕返しをされたときのことをラジオで話しているのを聞いて、その話を蒸し返したに違いなかった。

「うん、聞いた。愛しのアッキーがお仕事頑張ってたのに、俺だけ眠るなんて、とてもじゃないけどできないよ」

「そりゃあ、どうも」

とまた気のない返事をしたとき、拓人ははく息がまるで酒臭くないのに気がついた。まあ彼はここまでバイクに乗ってくるのでそれは至って健全であるが、土曜の夜だというのにどうしたのだろう。

「ああ。酒やめたの、俺」

私の心を見透かしたかのように、拓人は答えを明かした。

「へえ、なんでまた急に」

「いや、節制よ。節制」拓人が私の頭に腕を回した。彼は上半身裸であった。

「俺さ、酒も煙草もやるじゃん。健康に気を使わなきゃってのもあるけど、いかんせん金が足りないんだよ。ぼちぼち貯金とかも考えたほうがいいでしょ？ 秋実と旅行とかいきたいしね。国内がいい？ 海外がいい？」

丸坊主の頭をぼりぼりとかきながら、拓人は饒舌に話した。

「旅行？ そんなのいったこともないじゃん」

鼻先に、拓人のやや色の濃い肌が当たる。汗の匂いに混じり、風

呂に入ったばかりなのだろうか、薄らとボディソープの甘い香りが残っている。その香りと自分の吐息を交わらせながら、私はぼんやりと考えていた。

いったい、何ごとだろう。拓人は稼ぎが多いとはいえないが、実家暮らしなのだから、それなりに余裕はあるはずだ。お酒をやめて貯金だなんて、まとまったお金が早急に必要なのだろうか。

ひよっとして、結婚費用だったりして。

なくはない話だろう。むしろ、あつて当然の話だ。私と拓人はもう十一年も交際しているのだから、ぼちぼち結婚の二文字が脳裏にかすめだすのは定石である。

しかし、拓人からそんな話を持ちだしてくるなど、まったく想像がつかない。

この男は本当に恋愛沙汰に奥手な奴で、思えば交際を始めたときも、初キッスのときも、なんて言葉を濁そうか初の無制限一本勝負のときも、全部全部私が先導してきたのである。「せめて結婚の話ぐらいは、彼の口から聞きたいな」という願望はあるも、彼が相手ではあきらめもついてしまうのだから、また悲しい。

だから、期待しないで、もうしばらく待ってみようと思う。まだ二十五なのだし、焦る時期でもないはずだ。

「小学生のときの秋実は本当に可愛かったな。お人形さんのように可愛いつて言い方、あのときの秋実のためにあるようなもんだよ」「やたらと小学生のときを強調するね」

拓人は私に覆いかぶさるようにしてベッドの枕もとに置いたライトスタンドに手を伸ばした。かと思いきや、その付近に置かれた煙草の箱を手にとったのであった。

「煙草、やめたんじゃないの？」

「酒だけ。煙草優先でしょ」

大人のつき合いには欠かせない酒を優先させたほうがいいのではと思う。喫煙者ではない私には、理解不能なだけかもしれない。

「いや、本当に可愛かったんだよ。俺のおふくろも、よく言ったな。あの子、将来美人になるわよって」

煙草に火を点けながら、拓人は話を戻した。

「なのに、私に投票しなかったんだね」

「ん？ 投票？」一瞬きよとんとした顔を見せる拓人だったが、すぐに私の言わんとすることを理解したようだ。

「ああ、あれね。だってあのとき俺、他に好きな子がいたんだもん」

「私はちゃんと拓人に投票したのに」

「それ、たまたまじゃん」拓人は笑った。

「ラジオでもさ。地味な奴に投票したとか言ってる、俺吹きだしそうになっちゃった」

開票のときのことを思いだす。自分に謎の一票が投じられたのを受けた小学五年生の拓人が、喜ぶでも戸惑うでもなく、無表情で窓の外を眺めていたのをおぼろげに覚えている。

「きつとあのときから、心の奥底では拓人と結ばれるような気がしてたんだろっな」
「嘘っけ」

ええ。言わずもがな、まったくの嘘ですとも。

五年生のとき、初めて一緒のクラスになった拓人とは、小学生時代一度も会話すらしていないような気がする。先述のとおり地味な男子で、私に突っかかることもなかったため、その印象は極端に薄かった。あのままの関係だったら、現在ではとっくに疎遠だったであろう。

で、あのままの関係で終わらなかったのだから、運命とはことごとく不思議なものである。「心の奥底で拓人と結ばれるような気がしていた」というのも、あながち嘘っただけじゃ片づけられないかもしれない。

「でも、やっぱり今の秋実が一番だわ」

「ふーん」

「昔は昔で可愛かったけどね」

「……………」

「昔の秋実がお人形さんなら、今の秋実はお姫さまかな」

「無理に、褒めなくてもいいし」

「本当に。彼氏として鼻高々って感じ」

「そう……………」

「……………秋実？」

なんだか急激に眠気が増してしまった。

ああ、だけどまだ眠るわけにはいかない。拓人に、二人の話をラ

ジオでする件を話しておかねば。いや、そんなことは明日でもいいのだけれど、ちゃんとパジャマに着替えなければ。いやいや、それよりも、メイクを落とさなければ。

拓人が起き上がり、再び明かりを消した。それから、包み込むように私を抱いた。もう私には声を発する気力も残っていなかった。

ああ、暖かい。気持ちいい。ホツとする。こんなに快適な空間なら、誰だって睡魔に勝てやしないさ。神さまも、メイクを落とさずに眠ることをよしとしてくれそんな気がする。

ふむふむ、仕方がない。今日だけはお肌の老化に 待った をかけておいてやろう。

うーん、ありがとうございます。神さま。

第一章 グッドタイミング 完

第二章 新藤くん (1)

【アッキーの恋の軌跡】

「2010年、明けましておめでとございます」と先に挨拶しておこう。

正月三日はここ数年恒例となっているように、私と拓人の実家を持ち回りで挨拶にいった。私の父から拓人が酒を勧められ、「どうするかな」と私は見ていたが、結局飲んでいた。この時期に禁酒は無理があったか。

そんなこんなで、新年一発目のラジオ放送を、お正月ムードが消滅した九日に迎えた。

もはや説明するまでもなろうが、ここで私が語っている恋愛体験は、人名などをぼかしつつ、ラジオでもちゃんと語っている。ラジオどおりの口調で語ってもよいのだが、「あのう」とか「ええと」とかが多過ぎて話の腰を折られてしまうこと必至である。

ではさっさと参ろう。今回はちと長いのだ。

私は地元の中学に進級した。ほぼ全員が小学生時代からの顔馴染みだったが、人生初経験の制服というものが私にそれなりの新鮮味を与えてくれた。

私の学校は学ラン、セーラー服を採用していた。セーラー服は夏が白、冬が紺で、スカートはグリーンの子供チック柄だった。なかなか可愛いデザインで私も気に入って、春休みに二十人以上の親戚の

前でファッションショーをしてみせた。あの集まりはお父さんの叔父に当たる人のお通夜だったわけで、お父さんにナツクルアローを食らわされたのを覚えている。

中学進級にあたり、私は意気込んでいた。「いよいよ私も、恋という魅惑の世界に足を踏み入れてやるぞ」と。

小学生時代に恋人関係を公にしていたのは長山くん・小波ちゃん組ぐらいのもので、他に誰々がつき合っているという話はまったく聞かなかった。ただ、私の周りの子はみんな恋をしていた。好きな男子の一挙手一投足に注目し、その結果泣いたり笑ったりしていたのである。もう、なんていうか楽しくて仕方がなさそうに見えた。

で、私はとことん男子を意識して生活した。

するとどうだろう。小学生のときとは打って変わって、男子との会話が減ってしまったのではないか。一学期に初潮を迎えてからは、もう病気のように男子を避けるようになってしまった。まるで、クラスの男子全員に恋をしているみたいだった。

違う。何かが違う。

おまけに、女子の中でもなんとなく孤立してしまう。男子を意識すると同時に男子の目も意識していたから、嫌われてしまったのだろうか。スカートの丈を短くしたのも私が最初だったし、夏服のセーラー服の胸もとをはだけて着ていたのも私が最初だった。っていうか、私だけだった。当時はブラデビューもまだだったので、今思えば死にたくなる。

結局空回りしたまま一年が過ぎ、二年になった。クラスの面子が

変わったのをきっかけに、私もいい加減にしようと思った。とりあえず、一人ぼつちは寂しいので友達を作ることにした。

一年のときに転校してきた、真奈美ちゃんという女の子だ。飾りつきのないショートカットは校則違反で罰せられた証、やはり少し不良っぽい子だった。

なんと彼女は、今までに五人もの男子とつき合ってきたのだという。現在の彼女はサッカー部のエースで、これまた男子における校則違反の証である坊主頭をした先輩だった。

真奈美ちゃんはカリスマだった。彼女に憧れる女子たちが集まり、新たに十人ほどのグループが形成された。もちろん、私もその中の一人である。グループの端っこのほうにぴたっと張りついていた。

私と特に仲よくしてくれたのが、小学校時代でもお馴染みの小波ちゃんである。長山さんと交際していたという経歴から、彼女も相応な権力を持ち、グループ内のナンバーツーといえた。わたしはナンバーセブンぐらいだろうか。うん、縁起がよい。

「斉藤くん、明日は学校にきてくれるかな」休み時間に、小波ちゃんがひそひそ声で話しかけてきた。

「もう三日も会ってないよー。早く斉藤くんの顔が見たい」

緩くパーマを当てた髪の毛や、薄くなった眉のせいで、顔つきが変わってしまったが、けれどもあの小波ちゃんである。私はかつての彼女とは別人だと思って接していたが、もしかするとあちらもそうしていたかもしれない。

「本当だよねー」私は話を合わせた。

「彼女いるのかなー。あんなにカッコいいんだから、いないわけないよね」

「駄目だよ。私が先に告るんだから」

「えー。ずるいー」

私は口を尖らせて、くねくねと腰を振った。

真奈美ちゃんのカリスマ性は、思わぬ部分にまで影響を及ぼした。

小学生の頃は絶対悪、中学一年の頃は絶対正義だった私の中の男子という存在を、そのステータスに基づいて、きつちりと二分してくれたのだ。すなわち、カッコいい子や面白い子、スポーツができる子や不良っぽい子のみが正義なのである。中でも、不良っぽい子は英雄だった。その男子が悪ければ悪いほど、私たちは心をときめかせた。一番人気なのが、暴走族の兄を持ち、集会に参加するために学校をサボっていた斉藤くんだったのだから恐ろしい話である。

逆に、不細工な子、暗い子、運動神経が悪い子なんかは悪と認識していた。

「うわ、見て」小波ちゃんがそう言いながら、一人の男子を指差した。

「あいつ、真奈美のこと見てない？ うわ、きも！ 真奈美、可哀想」

うちのクラスにおける悪の典型ともいえる存在で、多数の女子に敵視されている新藤くんだった。やたらと湿気を含んだ天然パーマや細長い垂れ目、鼻の下に生えた産毛など、容姿の迫力に加え、いつも独りぼっちだし、スポーツもまるで駄目。拳句の果てには、今小波ちゃんが言ったように、不気味な視線を色んな女子に向けてい

るのである。なんとという凶悪さだ。

「ねえ、あきちゃん。もし、あいつに告られたらどうする?」

「うわー。そんなの、死んだほうがまし!」

それほどの強大悪ならば、かつての私ならジャンプキック一撃で沈めていただろう。ところが、今回の敵はその身体に触れただけで大きなダメージを負ってしまうため、打つ手なしであった。

よって、遊びに利用することにした。

真奈美ちゃんの考案した 新藤菌ゲーム は当時の昼休みの定番であった。まず、じゃんけんをして負けた子が新藤くんにタッチする。今度は新藤菌のついたその子から、他の子が「わあきゃあ」と教室内を逃げ回るのだ。昼休みが終わった時点で、まだ新藤菌がいたままの子が負けとなる。まあ、単なる派生版鬼ごっこだ。

で、初めてじゃんけんで負けてしまったとき、私はものすごく狼狽した。なぜなら、はつきりいつて新藤くんが可哀想に思え始めていたからである。しかし、ゲームから下りるわけにも、狼狽を他の子たちに見透かされるわけにもいかない。また独りぼっちになってしまいそうだからである。

私は恐る恐る新藤くんに近づいていった。かなり足音を忍ばせたにも関わらず、彼はすぐに私に気がついた。

彼は横目でじっと私を睨みつけていた。やはり彼も馬鹿でないのだから、自分がどう扱われているかを知っているのである。私は手を差しだしたまま、固まって動けなくなってしまった。

幸いにも真奈美ちゃんたちは、私が新藤くんを本気で嫌っての躊躇だと勘違いしてくれているらしく、何やら冷やかすような声を背中に投げかけていた。

新藤くんは、やがてそっぽ向いた。それを機とばかりに、私は新藤くんにちゃんと触れて、無事その日はゲームを開始させることができたのだった。

そして、ぼちぼち 新藤菌ゲーム にみんなが飽き始めていたある日、真奈美ちゃんが恐ろしい提案をしたのだった。

「じゃあさ。今日負けた人は、放課後新藤に告白するってことにしない？」

残酷だと思った。もちろん負けた女の子がではなく、新藤くんがである。今までだって残酷だったのには変わりないが、もし彼が本当にその子のことが好きなのだとしたら、目も当たられない。だって、その子は新藤くんとき合う気なんてさらさらないのであるから。真奈美ちゃんに限っては、彼氏もいるのだ。

「ちょっと、さすがにそれはまずくない？ だって
このときばかりは私も、ナンバーセブンの分際で偉そうにも意見してしまった。だがそれに対する真奈美ちゃんの反論は、ある意味非常に的を射ていた。」

「大丈夫、大丈夫」ふははと無邪気に彼女は笑う。
「つーか、あいつが私たちとき合いたがるわけないじゃん」

それもそうである。むしろ、罰ゲームであることを見抜いてしま
うはずだ。

そんなわけで、残酷なゲームの幕は半ば強引に上がった。じゃんけんで負けた小波ちゃんは、まるで叩くように新藤くんタッチしていたが、新藤くんは一切無関心のようなだった。新藤菌が女子たちのあいだを次々と移動し、時間は瞬く間に過ぎていく。昼休み終了のチャイムがなるまで残り三分という状況で、ついに新藤菌が私に移ってしまった。

これはまずい。もしあんな罰ゲームをやらされるはめになったら、いよいよ新藤くんに一生呪われてしまう。さっさと誰かに押しつけてしまわなければ。

追う私も必死なら、逃げる女子たちも必死である。一番足が速かったはずの私が、まったく追いつけない。机のあいだを縫い走り、みんな巧に私の手を逃れていく。

そんなとき、目の前で真奈美ちゃんがすってん転んだ。それを見た私はトペ・スイーダのように飛びかかって彼女を捕まえようとしたが、その手が触れるより一瞬早く、無情にもチャイムが鳴り響いたのだった。

「やったー！ 秋実の負けー！」

「あきちゃん。放課後絶対に逃げちゃ駄目だからねー」

本気で逃げだしたかった。

第二章 新藤くん (2)

基本的に部活動は強制参加だったため、放課後というのは部活動終わりの六時頃からのことを差す。私たちは十五分前に部活動をきり上げ、昇降口の脇でこっそりと新藤くんを待っていた。十人もいるので、まったくもってこっそりしてはいないが。

「新藤って囲碁部だっけ？」

「美術部だつて聞いたような気がする。なつきと一緒にだ」

「ねえ、やっぱりまずいんじゃない？」この期に及んで、私はまた真奈美ちゃんに泣きついていた。

「先生に言いつけられたらどうする？ 私たち、親呼ばれちゃうんじゃないの？」

「げっ」小波ちゃんが眉をひそめた。

「あきちゃんつてば、私たちの名前だすつもりなんだ。ひどーい」

「ださないけど……」

私はしゅんとした。

「安心しなつてば」真奈美ちゃんが私の肩をぽんぽんと叩いた。

「新藤つて、変なプライド持ってそうじゃん。だからさ、自分が女子にひどい仕打ちを受けたなんて、絶対誰にも言わないと思うよ」

「そうかもしれないけど……」

やはり、もう逃げられないようである。覚悟を決めるしかない。

「きた」

誰かが囁き声で言った。一斉にそちらに目を向けると、本当に新藤くんが、かばんとサブバッグを持って廊下を歩いてきていた。新藤くんも私たちに気がつき、一瞬だけうんざりとした顔をすることも、すぐに視線をそらして下駄箱へ歩を進めたのであった。

「ほら、あきちゃん」小波ちゃんが耳もとで囁く。

「今なら誰も見てないから、チャンスだよ」

「わ、分かってる」

そう答えながらも、身体が動いてくれない。緊張で足が震えっぱなしである。もう何度深呼吸をしたことか。

何が私をそんなに緊張させるのかと問われれば、それは恐怖だと答える以外にない。新藤くんを拒絶する恐怖。新藤くんを拒絶される恐怖。相手はいくら凶悪な新藤くんだとはいえ、他人から拒絶されるのを望む人間なんていない。

そう意識してしまうと、なんだかやりきれなくなる。他人を思いやっているようで、結局私は自分さえよければそれで満足な奴なのだ。

同時に少し気が楽になった。こんな最低な女。もっと最低になっちまえ！

「新藤くん！」

新藤くんは上履きを下駄箱にしまい、外履きを手に、たたきへ向かっているところであった。私の声に反応し、彼は歩みをとめて後

るを振り返る。

「何？」

その目は相変わらず冷えきっていた。

「ちょっと、話があるんだけど……」

「何？」

次の言葉が口から出てこず、私は助けを求めるように真奈美ちゃんたちを見た。彼女たちは明らかに楽しんでるようすで、身を寄せ合ってくすくすと笑っていた。

「いや……その」私は赤面し、うつむいた。そして、上目づかいで新藤くんを見た。

「ちょっと新藤くんに話があつてね」

「それは聞いた。だから、何？」

新藤くんは苛立ちを隠せないようすで、頭をぼりぼりとかきむしった。

「私、新藤くんのがね……」私は身体をもじもじさせながら、勇気を振り絞って言った。

「す、す、す、好き……なの」

言ってしまった！ ついに言ってしまった！ 頬を紅潮させて、上目づかいで身体をもじもじさせて、図らずも新藤くんのが好きな演技までする形となってしまった。

さあ、もう後戻りはできない。この日から私と新藤くんは、全日と新日のように、永遠にいがみ合う間柄となったのだ。それが私の

選んだ道なのだから、迷わずいくさ。涙混じりに聞いた猪木の引退スピーチを頭に思い浮かべながら、私は新藤くんの返答を待った。

「で？」

「え……？」

むむ、そうか。「好きだ」と言っただけでは、まだ告白を成し遂げたことにはならないのか。

「まあ、だから」私は先人たちが作り上げてきた告白の教科書をぱらぱらとめくり、続きの台詞を構築していった。

「あの、その……私とつき合ってください！」

そう書いてあった。

そして、新藤くんは臆することもなく、あっさりとこう答えたのだ。

「うん、いいよ」

「え？」私は新藤くんを凝視した。

「いいって……どういう意味？」

「つき合ってもいいよ」

二人のあいだを流れる時間が、数秒間停止した。それとは裏腹に、私の思考回路は高速で運転し始めた。ただし、速いだけで何一つ成果を上げてはくれず、意識は無情にも現実へ押し戻されていく。

何を言いだすの、この人？

私は訝しげに新藤くんを見つめた。彼は先ほどと変わらず、冷めた目つきで私を睨みつけている。

また、真奈美ちゃんたちに助けを求める。こっそりとはしていないが位置は離れているので、こちらで何が起こったか分からずに不思議そうにしている。やがて真奈美ちゃんに命を受けたく、小波ちゃんがすり足でこちらへ走り寄ってきた。

「あきちゃん、どうしたの？」

襟もとをばたばたしながら、彼女は尋ねてきた。

「いや」私は小波ちゃんと新藤くんの顔を順に見比べた。

「つき合ってもいいんだって、新藤くん」

それを聞いた途端、小波ちゃんはぷつと吹きだし、手で口もとを覆った。

「うそ！ マジ受ける！」まるでこの世のものじゃない珍獣を見るような目つきで、彼女は新藤くんを見た。

「あんた、マジで言ってるの！？ つーか、あきちゃんが本気であんたに告白なんかするわけないじゃん！」

新藤くんは小波ちゃんを無視していた。その空ろなまなざしは、いまだに私だけをとらえ続けていた。

かなり楽しそうな小波ちゃんだが、私はちつとも楽しくなくなってきた。これは小学五年生のときの長山くんと同じパターンだと思っただ。

あのときは長山くんから告白してきたわけだが、今回も本質は似

通っている。なぜなら、新藤くんにしてみても、私の告白など嘘っぱちだということが分かりきっているからだ。その上で交際を承諾するのだから、それはつまり彼から告白してきたのと同じ。

いやいや、違うだろう。その考え方は矛盾している。だって、あのとき私は本当に長山くんにときめいてしまったわけで、今回は正直いって。

困ったものだ。私は自分に告白してきた相手にときめいてしまう習性を持っているらしい。そのべたついた髪の毛は、なんだか最先端のヘアースタイルに見えてきた。その細長い垂れ目は、いつもにここしているようで可愛らしいと思えてきた。少し色黒な肌は、健康的な海の男を連想させられるようになってきた。なんで彼を凶悪だと思っていたのか、すっかり忘れてしまった。

要するに長山くんのとときと同じように、私は結局新藤くんにときめいてしまったわけである。

「何？ どうしたの？」

「ああ、真奈美ちゃん。こいつさあ……」

真奈美ちゃんに続いて他の女子たちも次々と寄ってくる。それどころか、下校時間のピークになり、多くの生徒が私たちの横を通り過ぎていく。そんな環境など一切考慮せず、私と新藤くんはじっと睨み合っていた。

あの屈辱、決して忘れてはならない。ここで私が譲歩してしまった途端、おそらく新藤くんは手の平を返したように私を蔑む言葉を連発するのだろう。

ならば、私はどうするべきかといよいよ考えがまとまり始めていたとき、誰かがやかましい声を上げた。

「ありえない、ありえない！」大笑いしながら、真奈美ちゃんは手を叩いていた。

「ちよつと、秋実！？ あんた、なんで黙ってんのよ！ さつさと本当のこと言っただけあげないと、新藤が本気にしちゃうでしょ！」

「あきちゃんって、けっこう意地悪なんだなー」

私は彼女たちに頷いてみせた。新藤くんにときめってしまった反面、怒りを覚えているのも確かなのだ。またしても、私の純粋な乙女心を踏みにじろうとする輩が現れるとは。

そう、やはり彼は凶悪なのだ。勸・善・懲・悪！ 悪は正義が懲らしめてやらねばなるまい！

私はすうつと大きく息を吸い、新藤くんを指差した。

「私があんたのことなんて好きになるわけないでしょ！ ただの罰ゲームだから！ 勘違いしないでくれる！？」

同時に真奈美ちゃんたちが爆笑する。私も達成感から笑いがこみ上げてき、一緒になって笑った。ついに私は悪を倒したのだ。なんて愉快なのだろう。あっはっは。

次の瞬間だ。私は右手に熱を覚え、ひっと息を呑んだ。ごとつと音を立てて床に転がったのは、我が校指定の外履きではないか。

おそろおそろ新藤くんを見る。すると、彼は私を睨みつけたまま、ぜえぜえと肩で息をしていたのであった。手に持っていた靴がなく、

彼が私に靴を投げつけたのだということが、すぐに分かった。

じんじんと痛む右手を宙に投げだし、私はきよとんと新藤くんを見つめていた。やがて彼は身を翻し、靴下のまま外へ出ていった。まいった。

「ふざけんな、てめえ！ 喧嘩売ってんのか！」

「うわー、最悪！ ちゃんとあきちやんに謝りなさいよー！」

真奈美ちゃんたちの怒号が、新藤くんの背中にぶつけられる。

「大丈夫、秋実ちゃん」

「怪我しなかった？」

他の子たちに囲まれ、案じられながらも、私は依然として遠ざかっていく新藤くんの背中を目で追っていた。

帰り道、真奈美ちゃんが新藤くんの外履きを川へ捨てた。小波ちやんたちと一緒に、笑いながらそのさまを見ていた私だったが、すでにそのときには、「あの靴を弁償するには、いくらぐらいかかるだろうか」と頭の中で計算を始めていた。

第二章 新藤くん (3)

食事がまったく喉をとおらず、両親に「ダイエットでもしているのか」とからかわれたその日の夜、私は自分の部屋をうろつくと徘徊していた。新藤くんの家に電話するべきかどうか迷っていたのだ。もちろん、彼に謝るためである。

時刻は午後八時を回っていた。電話番号なら、連絡網のプリントにきちんと記載されている。始めは親が出るだろうから、あまり遅くなるとまずい。決断するなら早くしなければならぬ。

いや、一応は電話する方向で決着はついている。学校で、真奈美ちゃんたちのいる前で謝ることなど絶対にできないのだから、やはり電話するしかない。

ただ、新藤くんが電話にちゃんと出てくれるのか。出てくれてちゃんと私が謝ったとしても、許してくれるかどうか。そういった問題が私を躊躇させる。

九時過ぎ頃まで悩んでいたが、ようやく私は意を決した。玄関に置かれている電話の前で数回深呼吸をしたあと、壁に貼られたプリントを参照し、新藤くんの家の番号をダイヤルしていった。

「もしもし？」

女性の声だ。

「あ、もしもし。夜分遅くすみません」あらかじめ用意しておいた台詞を、私はなぞった。

「ええっと、本山もこやまという者なんです、し、新藤くんに代わってい

ただけますでしょうか」

「新藤くん？ ああ、はい」

チンチロリンというオルゴールの音色を聞きながら、私は受話器を握りしめて待った。やがて、ぶすつとした口調で「はい」と新藤くんの声で応答された瞬間、まくし立てるように謝罪の句を述べた。

「ご、ご、ごめんね、新藤くん！ あれはただの罰ゲームで、別に新藤くんに嫌がらせするつもりじゃなくて！ 靴はちゃんと弁償するから！ だから……！！」
「いや、別にいいし」

がちやつと通話は途切れ、つーつーと寂しい電子音を受話器の向こうから聞こえてきた。

私はしばらくその場で立ち尽くしたあと、肩を落として受話器を置いた。

「あきちゃーん。あんまり遅い時間に電話したら駄目よー」

母の小言を聞き流し、私は自分の部屋へ戻った。そして、魂が抜けたようにベッドの上にくったりと仰向けになった。

といつても、本当のところはそれほど絶望してはいない。私が歩み寄ったのだから、新藤くんにもそうしてもらいたいなどというのは、あまりにも勝手な言い分である。目的はあくまで謝意を伝えることなのだから。

とそこまで考えたとき、意識の隅で電話のベルが鳴っているのを

聞いた。私は慌てて部屋を飛びだし、同じく電話機のもとへ向かう母を居間へ帰して、受話器をとった。

「ああ、新藤ですけど」

私の予感どおり、新藤くんからだった。

私はなぜかホツとしてしまったが、それも束の間で、今度はいったい何用で彼が電話してきたのかと不安になった。もしかしたらやつぱり許せなくて、許してほしければと何か無理な要求でも突きつけてくるのではないだろうか。

しかし、それも自業自得である。お金なら五千円ぐらいまで、身体なら太ももぐらいまで私は譲歩する覚悟があった。

「あのさ」とそこで一端の間を置き、新藤くんは言った。

「俺、本当に本山さんのことが好きなんだ」

「私が、好き？」

「そう……」

予想外であった。まさかそんな方法で、まさかそんな方法で。

仕返ししてくるとは！

これは巧みである。私は新藤くんにひどいことをしてしまったという負い目があるわけで、畏だと知りながらも、自らそれにかかっていたいかなばならないのだ。残酷なり、新藤くん。

だが、待てよとも思う。今回は人目がまったくないのだから、私は赤っ恥をかかなくて済むではないか。

ははは、なんて詰めの甘い。真奈美ちゃんたちの前で笑われるのならともかく、一対一の状況で笑われたって、私にはたいした痛手じゃないのである。そこを計算していないとは、新藤くんもまだまだ未熟だな。

唐突に話は変わるが。

ここらあたりで、そろそろ小細工をやめようと思う。もうみんな薄らと勘づいているだろうし、あまりぐだぐだと長引かせたところで、興ざめさせてしまうだけなのは充分に分かっている。新藤くんの呼び名を戻すことにしよう。

んでもって続きだが、私は余裕の笑みを浮かべつつ言った。

「私も、新藤くんのが好きです」

「……ほ、本当に？」

「え？」

「え？」

こうして私と新藤くん　新藤拓人の十一年に渡る交際がスタートしたのであった。

第二章 新藤くん (4)

【ON AIR】

はあ、いつ聴いてもいいねー。室川市のラジオネーム・たーくんからのリクエスト、尾崎豊で アイ・ラブ・ユー でしたー。

尾崎豊って私がある存在を知ったとき……中一ぐらいだったかな、すでに亡くなってたんだよねー。だからちよつと世代的には合わないんだけど、私の周りにもファンは多かったよ。男子に一人、ノートの尾崎の詞を片っ端から書き写してた子がいたなー。

亡くなっているにも関わらず、世代を超えて愛されるってすごいよね。もし私が死んじゃったら、一週間ぐらいしたらみんなに忘れられてそうじゃない？ あはは。

大丈夫。死にません。死にませんとも。さあ、気をとり直してメーイルを読んでいこうじゃないの。安達市のラジオネーム・チャウチヤウさん。

『こんばんは、アッキー』

こんばんはー。

『毎週欠かさずに聞いています。前までは なんでもランキングのコーナーが一番好きでしたが、今では アッキーの恋の軌跡のコーナーが一番好きです』

おお、嬉しい。

『ところで質問なんですけど、その中学時代からつき合っている彼氏は、このラジオで自分のことを話されているって知っているんでしょうか。もし言っていないなら、早めに了承をえたほうがいいと思いますよ』

あはは。もちろん、ちゃんと許可をとってあるよー。なんていうかあの人が、そういうの、まったく気にしない人なんだよね。おかしいよねー。あんまり自分の過去ってばらされたくないもんねー。

でも、そうゆう考え方がおかしいのかもって思うようになった。結局、過去は過去だしね。私も最初から今の私だったわけじゃないんだ。いや、本当。小学生の頃、私に蹴られた男子のみなさんに、心から謝罪します。あはは。

あ！ あと、ちよくちよく出てくる親友の子にも許可をとってあるよー。なんせ彼女の場合、いまだに親友だしね。今では私の彼とも仲よしなんでモーマンタイさ。

おっと、尺がやばい！ っていつも言ってるような気がするね。あはは。

コーナーに参ります。 今週のベストバウト。

第二章 新藤くん (5)

【アッキーの恋の軌跡】

やっぱり長過ぎたので、後日談は次週となってしまうた。ではでは、気をとり直して参る。

それでも真奈美ちゃんグループに居座り続けた私は、もちろん拓人と交際を始めたなど誰にも言わずに上手く立ち回っていた。あの日の翌日、拓人への報復作戦を企てようとしていた真奈美ちゃんには「もうあいつとは関わりたくないから」とかなんとか言っごまかし、それを阻止した。新藤菌ゲームについても、すでに飽き飽きしていたことも含め、あの日以来やらなくなった。

私と拓人は電話だけでの恋人関係だった。毎晩八時にどちらからか電話をかけ、学校でできなかった分、色々な話をするのだ。

私の話し口はいつも、「学校ではごめんね」だったのは言うまでもない。真奈美ちゃんたちの前では、どうしても拓人を貶す発言が飛びだしてしまう。だが彼は微塵も怒る気配を見せず、すぐに別の話題へ移ってくれるのであった。当時は「なんてまあ、優しい人なのだ」と感動していたが、あとに聞いた話では、はらわたが煮えくり返っていたそうだ。

そんな日々が一ヶ月ほど続き、確か期末試験が終わった直後だったと思う。時刻は朝のホームルーム前だ。もはや学校にくることのほうが少なくなっていた斉藤くんが、久々に登校してきて、私は彼の机の周りを真奈美ちゃんたちと一緒に囲んでいた。

とはいっても、私は斉藤くんとそれほど親しくはなく、彼の視界に入らない位置で、会話に相槌を打ったり、一緒に笑ったりしていただけであったが。

しかしまあ、不良というのはなぜかそれなりに容姿もかっこいい。斉藤くんも、彫の深い日本人離れた顔立ちをしており、がっちりとした体躯と相まってなかなかの男前に見えた。

「おお、本山じゃん。懐かしい」

いきなり斉藤くんが後ろを振り向いてそう言ったので、私は思わず身体を仰け反らせてしまった。

「こいつさ、昔はめっちゃくちな奴だったんだぜ」私を指差しながら、斉藤くんは真奈美ちゃんに言った。

「女のくせに喧嘩っ早くて、岩見とか田代とかはこいつに泣かされたこともあるし」

「へえー。秋実、カッコいいじゃん」

かつての私の勇姿を知らない真奈美ちゃんが、尊敬のまなざしを向けてきた。ふむふむ、なかなか悪い気はしない。補足するならば、斉藤くんを泣かしたこともあったはずだが、それを明かすのはなんとなく自重する。

「なあ、もう一回あのときのキック、見せてみるよ」

「ええ？」突拍子もないリクエストを受け、私は困惑する。

「無理だよー。あれはまだ小学生だったから、あんなやんちゃなことができただけで……」

ぎこちなく笑いながら、私は手を横に振った。

「いいじゃん。ほら、あいつのこめかみにでも」

斉藤くんが指差した先を見て、私はぎよっとした。そこには、一番前の席に座って読書をしている拓人の後ろ姿があったのだ。

「いや、それは……」

「いいねー」小波ちゃんが言った。

「あきちゃん、あいつにあんなことされたんだから、今こそ仕返しなきゃ」

「お？ 何されたんだ？」

「いや、別に……」

私がそうはぐらかしたとき、女子の誰かが秋実コールを始めた。それに真奈美ちゃんが、斉藤くんが、小波ちゃんが追従し、あつという間にシュプレヒコールと化してしまった。

「秋実！ 秋実！」

さすがに拓人も異常に気がついていたらしく、こちらに顔を向けていた。だが、すぐに前を向き直してしまう。彼は学校での私たちのやりとりにも、我関せずの態度を貫くのだ。

「ちよっと！ 無理だつてば！」私は叫んだ。

「もうすぐ先生もきちゃうからまずいよ！ それにもう、足だつて上がらないし……」

「ようし、分かった」

そう言って斉藤くんが立ち上がったのを機に、秋実コールがやんだ。

「本山の代わりに俺が見せてやる。伝説のライダーキックを」

「きゃあ！」真奈美ちゃんがかわいこぶって、胸の前で手を組み合わせる。

「見たい、見たい！ やって、やって！」

私は動転した。ライダーキックじゃなくて延髄斬りのつもりなのだと、訂正している余裕はない。なんとかかして斉藤くんをとめなければ、拓人が大変なことになってしまう。

斉藤くんがスタートのかまえを見せた。そして一歩足を踏みだした瞬間、私は彼の右腕にぴよんと飛びついたのだった。

「……なんだ？」

「いや……」さっぱり言い訳が思いつかなかったが、私は見きり発車で説得を開始した。

「ぼ、暴力はよくないと思う。それに斉藤くん、上履きはいたままだし……」

「お前がやってたことを再現するんだろっが」

「いや、上履きちゃんと脱いでたし……」

「知るか。そんなもん」

そう言い捨てて、斉藤くんは私を振り払った。それは肩をほんの

少し揺すっただけの動作であつたが、私は大きくバランスを崩してしまつた。両手を振り回しながら片足でけんけん跳ねて、やがてがたと音を立て、机に衝突した。女子たちが短い悲鳴を上げる。

「いったー……」

強く打つた腰を押さえながら、私は呻いた。

「何やってんだよ」齊藤くんが呆れ顔をしながら腕を組んだ。

「お前、随分とどん臭い女になつちまつたな」

そのとき、私は恐ろしい光景を見た。

なんと、拓人がこちらへ駆け寄ってくるではないか！

まさか私が心配になり、いても立つてもらえなくなったのか。

まだ、誰も拓人には気がついていないようだ。今ならまだきつと間に合うはず。

「あはは」と私は慌てて笑顔を作る。そして、ひりひり痛む腰を手でさすりながら、聞こえよがしに言った。

「ちよつと、びっくりしちやつただけ。ちつとも痛くなんてないよ」

そうだよ！ このとおり、私はぴんぴんしてるから大丈夫！ みんなの前で親しそうな姿を見せちゃ駄目！ おねがい拓人、私の熱いメッセージを読みとって！ さあ、席へお戻り！

しかし、その願いは届かなかつた。いや、もしくはより悪い影響を与えてしまつたのかもしれない。拓人は私をちらつと見て安堵したような表情を見せるも、またすぐに顔を引きつらせた。彼の

視線は真っ直ぐに斉藤くんの背中へ向いている。

「いやいやいや、ちょっと待った！ それはまずいって！ それだけは何弁して！」

だが拓人は無情にも、かつての私の勇姿を思わせるような華麗なジャンプキックを、斉藤くんの背中に繰りだしてしまった。「おっ！？」と鈍い反応だけ見せた斉藤くんは、私と同じようにバランスを崩して前のめったまま教室後方まで移動し、最終的には掃除用具入れに、頭からがんと激突してしまった。

「はあ？」

頭を押さえて斉藤くんは振り返った。あまり痛そうにはしていないが、その顔は憎悪に歪んでいる。彼とともに、クラスの全員が仁王立ちする拓人を注目していた。

「おい、背中汚れてねえ？」

小波ちゃんに訊ねる。彼女は斉藤くんの背中をしげしげと見つめ、首を傾げながらも、蹴られたであろう場所をぱっぱと手で払ってやっていた。

私はおろおろと斉藤くん、拓人を交互に見やっていた。

頭をかすめるのは、よくニュースで取り沙汰されている中学生の非行事件である。ある学校では、生徒が教師をナイフで刺殺したなどという、信じられない事件が起きたらしい。

もはや、私と拓人の関係が周りに知られることについては、腹をくくっていた。このままでは拓人が殺されてしまう。どうやって斉

藤くんの怒りを鎮めようかと、そればかり考えていた。

「今のうちによお」斉藤くんは抑揚のない口調で言った。それが逆に、迫力を助長させている。

「今のうちに謝ればよお、とりあえずは許してやってもいいぞ。ただし、土下座で謝れよな」

私は拓人を見つめた。頼むから謝ってくださいと、そう願いながら。

「謝らない」

拓人の一言に、私はがつくりとうな垂れた。

「あん？」

「悪いのはお前だ。俺が謝る必要はない」

そう強がりながらも、拓人の足は恐怖でかくかくと震えている。

そんな彼の姿に、いつしか私はぼうつと見惚れてしまっていた。

あ、あれ？ この人、本当にカッコいいんじゃないの？

いやいや、しっかりしなければ。この世の中、カッコだけで済まされないことが、おそらくたくさんあるのだ。きつとここは謝るのが正解なのである。だけど、そんなことを私から拓人に告げるわけにもいかない。でも、そうしなければ拓人は。

「やばい」と真奈美ちゃんが斉藤くんに囁きかけた。

「先生きちゃったよ。こいつのことはあと回しにしよう」

斉藤くんは恨めしげに廊下を見やってから、また一度拓人に睨み

を利かせた。そして、自らの怒りを抑えるように大きく息をつくと、そのまま自分の席へ戻ってしまった。

それを見た拓人も、無言で席へと帰っていく。私はというと、疲労感と安心感からその場に尻餅をつき、しくしくと涙していた。

「大丈夫？ あきちゃん」

私を気にかけてくれる小波ちゃんの声色に、以前には見られなかったよそよそしさが含まれている。私と拓人の関係に、薄らと勘づいてしまったのかもしれない。私は彼女に手を引かれ、なんとか立ち上がることができた。

「あのさあ。あなた、あんまり新藤に優しくしたら駄目だよ」そう言ったのは真奈美ちゃんだ。

「あなたが優しくするから、あいつ、つけ上がるんだよ。今から一緒に言いにいこう？ 『ウゼえんだよ！』、『勘違いしてんじゃねえよ！』って」

「ち、違うの。真奈美ちゃん……」

私はぐずぐずと鼻を吸いながら言った。

「違っつて何が？」

「つき合ってるの。私と新藤くん」

「え……？ ええ！？」

涙で視界が塞がれていたが、真奈美ちゃんが驚愕の表情を浮かべているのは想像に難くなかった。

というわけで、私と拓人は晴れて公認のカップルとなった。その代償として真奈美ちゃんとの友情は途ぎれたが、彼女が夏休みに髪の毛を金に染めたのをきっかけに、小波ちゃんも真奈美ちゃんグールプを脱し、彼女との友情は続くことになった。

ちなみに斉藤くんは、私と拓人がつき合っていると知るや否や、冷めてしまったようで、拓人に報復せぬまま二度と学校にこなくなつた。彼とはそれきりだが、極道を突き進んでいないのを祈るばかりである。

長くなつたが、中学時代で語るべき恋の軌跡は以上だ。中学三年のときにファーストキスも済ませているのだが、それは私が拓人の家に遊びにいったときに「キスしていい？」と訊ね、「いいよ」と答えたのでキスしたという、なんの面白味もないエピソードなので割愛対象である。

うっむ。思えばここまで、男性リスナーたちの待ち望むお色気エピソードがまったく登場していないではないか。初潮の話を詳しくしたほうがいいだろうか。あの日は小雨が降っていて……やっぱり、グロいのでやめておこう。

まあ、でも安心してほしい。今回は高校時代編なので、それなりにお色気エピソードもある。ただし、これからは恋愛の対象がずつと拓人なので、きつと飽きてしまうぞと予告しておこう。

第三章 悩める人 (1)

【OFF】

ガラス製のドアの前で、私は立ちどまった。左手に持ったお盆には、ジュースの入ったコップが五つも乗っかっているが、それをこぼさないようにドアをノックすることぐらい朝飯前なのだ。

「失礼しまーす」

ドアを開けた途端、大音量の音楽と歌声が廊下に漏れだした。私はすかさず部屋の中に滑り込み、ドアを閉める。お客さまに会釈しながら、ドリンクをテーブルに移していく。

お客さまは同年代か、私より少し若いぐらいの男女である。マイクを持っているのはチーマーふうの身なりをした男性で、素人には手をだしにくいヒップホップをそつなく歌っている。

「へい、店員さん」

聞き覚えのある曲なため、リズムに合わせて肩を揺らしていたら、その男性にマイクを向けられてしまった。

「いや、無理です、無理です」

私は逃げるように部屋をあとにした。そのまま厨房兼控え室に戻り、飲みかけのコーラを口に含んだ。

「あの部屋の客、たちが悪そうですね」

金庫の整理をしていた直くんが笑いかけてきた。私より一つ年下だが、髪が薄く腹が出て、初老の貫禄を携えている。

「次呼ばれたときは、みっちゃんだからね」

ギャルふう女子大生のみっちゃんは、テーブルにうつ伏せて眠りこけていた。

ラジオのない平日は、時折取材や営業といった別の仕事が入るものの基本的には暇である。よって生活費の補完も含めて、私は月に十日ほどカラオケボックスでバイトをしていた。

ラジオと同じく大学時代から続けているバイトで、現在同僚はみんな後輩でしかも年下である。店長の直くんですえ二年前に雇われ、その後昇進したため、恐ろしいことにそれが当てはまってしまったのだ。

時刻は午後九時。午後十一時までの準夜勤と午前五時までの深夜勤、二つの勤務シフトがあり、私は主に準夜勤である。勤務終了まで二時間というこの時間帯は非常にだれてしまうが、だらけるとかえって疲れるという法則を過去の経験から培っていた。

「とお！」と私はみっちゃんに延髄チヨップを食らわす。

「痛いです」みっちゃんはむくつと起き上がった。

「てんちよー。アッキーさんにまた暴力を振るわれました」

「いやあ、勤務中に眠るのはどうかと……」

頼りない態度の直くんを、私は無言で睨みつけた。そのとき、受

付から同じく女子大生ののんちゃんが顔を覗かせた。こちらは黒髪清純派だ。

「アッキーさん。なんか、知り合いの人がきてますけど」

「私の？」

私は自分を指差した。

カラオケボックスでの勤務中は、変装のため眼鏡をかけるようにしていた。ラジオパーソナリティという肩書きであるが、番組のホームページや情報誌に素顔を公開している他、昨年夏にはリポーターとしてテレビ出演もしてしまったためだ。やっぱり、自意識過剰などと拓人にかかわれるが、どっちにしる視力は悪いんだからそれぐらいいいじゃないかと思う。

で、拓人の指摘どおり、今までお客さんに正体がばれたことはなかったはずなので、訪ねてきたのは本当に知人である可能性が高い。ここで私が働いていると知っている者はだいぶ限られるが、いったい誰なのであろうか。

受付には団体さんがおつきだった。もう、人目見て濃い連中だというのが分かる。女の子ばかりなのだが、みんな派手な身なりをしているし、中には坊主頭な方や、数えきれないほどのピアスをつけている方もいる。

私にこんな知り合いはいなかったはずだと思い、その旨をのんちゃんに伝えにいきこうとしたとき、集団の中の一人が声を上げた。

「秋実！」

なぜかサングラスをかけた金髪の女性だ。広く開いた胸もとに、タトゥーまで覗いているじゃないか。私は涙が出そうになった。

「ど、どなたでしょうか」

私を秋実と呼び捨てにする人物は更に限られてくるのだが、彼女にはまったく見覚えがなかった。

「私だよ！ 真奈美！」

「ま、真奈美……？」しばし考えた末、私ははっと気がついた。

「真奈美ちゃんって、あの？」

「そう！ あんたがこないだラジオで話してた、不良娘！」

私は閉口した。まさか、真奈美ちゃんに聞かれていたとは。

「久しぶりじゃんよ！」そんな私に、真奈美ちゃんはハグを求めてきた。

「何ちゃっかり有名人になっちゃってんの！？ 小波に聞かされてさ、私も初めて知ったんだよ！ ちゃんと教えてとけて！」

「だって、中学以来会ってなかったから」ハグに応えようと、お酒の匂いがぶんぶん香った。やや強引に彼女から逃れる。

「少し、雰囲気変わったね。なんていうか、昔より……」

「私にも色々あってさー。いやー、それにしても秋実、美人になったねー」

それから真奈美ちゃんは、仲間たちに「私のモトカノ」と私を紹介

介した。

「え！？ え！？ モ、モトカノ！？」

可哀想なぐらいうるたえる私を見かねてか、ピアスの人が真奈美ちゃんをたしなめてくれた。

「真奈美ちゃん、駄目だったば。ノンケをからかったちゃ」

「……………」

私は辟易する。うう、頭が痛い。

「アッキーさんって、彼氏いるの？ じゃあ、真奈美ちゃんとき合っちゃえばいいじゃん」

別の化粧の濃い女性が、気安くそんなことを言った。

「い、います！ 彼氏、いますんで！」

「いやん、振られちゃった」真奈美ちゃんは額を押さえ、宙を仰いだ。それから、思いだしたようにこんなことを訊ねてきた。

「そつえばあいつは！？ 新藤！ 中学の頃、あいつとつき合ってたんじゃないかっけ」

彼女自身はラジオを聞いていないのかもしれない。

「いや、だから。まだつき合ってるってば」

「は？」真奈美ちゃんは口を丸く開けた。

「マジで！？ すっごーい！？ 何年！？ 十五年ぐらい経ってない！？ すごくくない！？」

他の子たちも追従する。

「すごい！ 浮気とかもまったくせず！？ マジ受ける！ なんて結婚しないの！？」

大騒ぎになってきたところで、続くお客さまがやってきた。「後ろが詰まっちゃうから」と言い残し、私はまた控え室へ逃げ帰る。また眠っているみいちゃんをチョップで起こしたあと、私は椅子に座って「ふう」と溜息をついた。

地元から一度も出ていないにも関わらず、中学以来の同級生と再会するのは初めての経験であった。慣れていないからだろうか、私はなんとも複雑な気持ちになった。久々に会って大人になった同級生を見ると、なぜ、こう胸がちくちくと痛むのだろう。彼らを目にして、あの時代はもう帰ってこないと改めて意識させられてしまうからだろうか。

そして、私が拓人といまだにつき合っていると聞いたときの真奈美ちゃんたちのリアクションを思いだして、ふと空しくなった。十九のみいちゃんは今の彼氏で四人目だと言っていたし、あの清純そうなのんちゃんも、三人目の彼氏と先日別れたそう。

私は損な人生を送ってはいないかと心配になってくる。恋をするのが嫌いとか苦手とかでもないはずなのに、拓人がいるので必然的に、恋に落ちるといふ行為から遠のいていかなばならない。ああ、その結果もう二十五歳になってしまった。なんかこれって、二十五年間彼氏がないよりも寂しいことのような気がする。

「んなわきゃないです」

直くんが、いつになく機嫌の悪そうな口調で言った。

「そつ?」

「彼女がいなくてどこか、二十四年間女の子に見向きもされない僕の身にもなってください」直くんはちらちらと受付のほうに目を向けながら、こつべを垂れた。

「せっかく彼氏と別れたっていうのに、逆に意識しちゃって目を合わせることもできないんですよ。もう、こんな苦しい思いはしたくない。でも、好きなんだから仕方がない」

「さつさとコクればいいじゃないですかー」呆れたようにみいちゃんと言った。

「勇気がないのなら、私が代わりに言っておいてあげましょうか。のんちゃん!」

「やめて! マジでやめて」

そんなやりとりを見つめながら私は思った。想いつきり楽しそうじゃないか。

仕事を終えた私は、自転車で二十分ほどかけて自宅マンションまで帰ってきた。車輪のちっちゃいオシャレな自転車で、通常の二倍ほど漕がなければならぬ。買ってから数日で普通のにしておけばよかった後悔した。

私は大学卒業を機に一人暮らしをしているが、実家までたった二駅しか離れていない。若い子がそんな意味不明なことをする最大の理由は男遊びであり、私の場合も一応はそれが発端であった。

浮気を前提としてではなく、拓人と別れるのを前提としていた。いや、もちろん別れるつもりはなかったのだが、ひよっとしたらそ

ろそろ別れるかもしれないなと思っていたわけだ。

で、別れていないので今に至っている。ただ最近ではちょっと考え方が変わってきて、この部屋に拓人を招きたいなと思っている。要するに同棲っていうか、結婚して一緒に暮らしたいなと思い始めている。

なんだかんだで開き直ってはいるのだ。私には拓人しかいないのだし、彼とどう幸せになるかがこれからの人生のテーマである。その第一歩として、そろそろよいお言葉を彼からいただきたいなと、それぐらい望んで何が悪い。。

リビングのソファに座り込み、私は数年ぶりに 今から会いたいというメールを拓人に送った。返信は五分後に、メールではなく電話できた。

「どうしたの、急に？ 今日は無理だよ。お酒入っちゃってるもん」
その言葉はまやかしてないらしく、上手く呂律が回っていない。

「お酒やめたんじゃなかったの？」

「失敗した。二月から再挑戦する」

「何それ」

私は口を尖らせた。お酒と結婚費用と、どっちが大事なんだ。私もある程度貯金はあるから資金はなんとか……って、そういう問題ではない。彼の気持ちの問題である。

「今日バイトだったんでしょ？」そう話す拓人の背後から、おつちやんの冷やかすような声が聞こえてくる。まだ飲んでいる最中らしい。

「バイトの日に会いたがるなんて珍しいじゃん。何か嫌なことでもあった？ 相談なら電話でも乗れるしね」

な、なんと！

私は怒って、ぶちっと通話をきった。

相談なら電話でも乗れる？ いくら酔っているにせよ、その禁句を口にしてしまうとは！ かの夏の夜の抗争を忘れてしまったのか！

ごめん、ごめん。明日、仕事終わったらすぐに会いに行くから

直後に届いたフォローメールを寝転がって黙読しながら、明日もバイトであることを告げようかどうか私は迷った。でも、罰として内緒にしておくことにした。

第三章 悩める人 (2)

【ON AIR】

もしもし？ 夜分遅くすみません。クローバーFMの（ホットとス
イーとタイム）、パーソナリティのアッキーです。ミサちゃんで
すかー？

「そ、そ、そうですね？」

起きててよかったー。今、何をしてるんですか？

「家でテレビを観ています」

ですよねー。土曜日の二十三時に早々と眠る女子大生はいません
よねー。

「はあ。あのう……、どなたでしょうか」

いや、だから ホツとスイーとタイム パーソナリティのアッキ
ーです。えーっと、ホツとスイーとタイム っていうラジオなん
ですけど、お聞きになったことはありませんかね。

「はあ、ちょっと、ないですね」

そうですね……はあ。いやいや、私が凹んでどうする！ あはは
！ あのですねえ。その番組の中で アッキーの当たって砕ける
というコーナーがありまして、リスナーの方が電話で直接愛の告白
をするといった主旨のものなんです。実は今回、ミサさんに告白
したいという男性とお電話が繋がっております……

「えー!? だ、誰ですか?」

心当たりはありますか。えへへ。

「えー、ひ、ひよつとしてスザキさんですか?」

ぶー。違います。

「じ、じゃあまさか、ツグタニさん?」

……違いますね。

「えー? 他に親しい男性とかいないと思うんですけど、あの人は彼女いるしなー」

ま、まあ。あんまりもったいぶるのもあれなんで、本人に登場していただきましょう。ミヤガワくん、思いの丈をぶつけちゃいなさい!

「あ、もしもし。ミサちゃん?」

「え? 誰ですか?」

「ミヤガワです。ダンスサークルで一度だけペアを組んだ」

「ああ……」

い、意外な相手だったかな? ミサちゃん、ミヤガワくん分かりますよね。

「はい。顔はちょっと出てこないんですけど、ちゃんと覚えていま

す

「ははは……」

ははは。とにかく、ミヤガワくん。ミサちゃんは覚えていてくれたんだから、今こそ君の熱い想いを彼女に届けるんだ。

「は、はい。あのう、ミサちゃん」

「はい」

「ダンスでペアを組んだとき、ステップでミスしてばかりの僕を、君は、『慌てないでいいよ』と優しく元気づけてくれましたね。あのときの君の優しい笑顔が忘れられず、自分でも気がつかないうちに恋に落ちてしまいました。あまり目立たない僕だけど、君を想う気持ちだけは誰にも負けないつもりです。どうか、僕とつき合ってください」

さあ！ ミサちゃんの返事やいかにー！

「ええ、そう言われても……ちょっと今は勉強に専念したいというか、あまり彼氏を作る気にはなれないっていうのが本音で」

「そうですか……」

まあでも、友達としてならいいじゃない！ その勉強もいつかは落ちつくんだし、このチャンスを逃して、あとあと後悔しちゃうかもしれないよー。

「うーん。じゃあ、まずは友達から……」

やったー！ カップル成立ですー！ よかったねー、ミヤガワく

ん！

「もう、マジで泣きそうです」

ミサちゃん。ミヤガワくんはちょっと奥手な男の子だから、ミサちゃんがぐいぐい引っ張ってあげてね。来月はバレンタインデーもあるし、チョコレートでもプレゼントしてあげたら？

「か、考えておきます」

それじゃあ、ハッピーな二人にこの曲をお届けしましょう！
ドリームズカムトゥルーの（うれしいたのしい大好き）！

第三章 悩める人 (3)

【アッキーの恋の軌跡】

ふむ。ついに男性の方々お待ちかね、お色気エピソードの回がきてしまったか。序盤で真鍋さんが話していた、高校時代に私が裸で拓人に迫ったというあの話である。アッキーって意外とエロい女なんだなと思われている方も多いだろうが、まあそれにはわけがある。パンツを下ろさずに聞いてほしい。

中学時代の私と拓人の成績は拮抗していた。そんな二人がぎりぎり合格できるんじゃないかというレベルの普通高校を二人とも志望校としていた。中学生のカップルが同じ高校に進みたいと思うのは必然である。

なのに、私だけ受かって、拓人は受からなかった。落ち込んでいた彼の手前、私はひたすら彼を励ましていたが、心の中では「何やってんだ、このクズ！」と罵倒していた。一緒の高校に進めなかったのが不満なので、愛のある美しい罵倒といえる。

私は自転車で二十分ほどのその高校に、拓人は自転車で一時間ほどの場所にある別の普通高校に進学した。

高校では制服がブレザータイプとなった。濃い赤のブレザーに中学時代のものと同様のチェックのスカート、冬に着込むグレイのベストもリボンつきでなかなか可愛い。お隣のおばちゃんにファッションショーしてみせるも、花粉症でそれどころじゃないようすだった。

十五歳になった私の容姿は、ちょっと嫌なふうに成長した。特に鼻が気に入らない。なんか横に広くなって、全体のバランスを損ねてしまっている。あと、ふくらはぎがちょっと太くなった。これはまあ、育ち盛りだと騙されて食べ過ぎてしまった私に負があるのかもしれない。少女時代から一貫して美人だという宮沢りえはやはり偉大である。もはや彼女に似ているなどといったは失礼にあたってしまうので、この頃から自重し始めた。

一応は進学校で、クラスに不良っぽい子が一人もいなかったせいか、高校はかなり平和な環境だった。ただ、私個人としては波乱の連続であった。

私は出席番号で並んでいる恵那ちゃんという子と仲よくなった。

中学時代、私はバトミントン部に所属していた。恵那ちゃんも同じだそうで、彼女と一緒に高校でもバトミントン部に入部した。休み時間はもちろん、部活でもいつも彼女と一緒に行動していた。

この恵那ちゃんという子は、たいへん素晴らしいのだ。整った顔立ちや身長百五十センチ未満のちっちゃな身体もさることながら、その仕草やキャラクターが、痛くても目に入れてしまいたいほど可愛い。

そんな彼女に好かれたい一心で、私はビッチになった。

というのも、中学時代、あの真奈美ちゃんが女子たちに羨望のまなざしを向けられていた最大の要因が、男子との無制限一本勝負をただ一人経験済みだったことなのである。

だから私も、週に三回は拓人と試合をしていると恵那ちゃんに話

し、ときにはその際の模様なんかをこと細やかに聞かせてやったりした。効果は靦面で、恵那ちゃんは私に「大人だねー」とか「尊敬するー」とか香ばしい言葉を次々とくれた。

ふむ。もちろん嘘である。私と拓人がそんなに進んでいるわけではない。いまだに互いの了解をえてからキスをする仲だ。ちなみに拓人がサッカー部出身で筋肉のついたたくましい身体をしているというのも嘘である。

いわゆるハツタリなわけだな。恵那ちゃんを騙すのは忍びないが、それによつて彼女が私に憧れてくれるのであれば、それもまた正義である。同じ高校に進学した中学時代の同級生も何人かいるが、あまり親しくはないので、きつとばれないだろうと思つた。

まあ、目論見どおり、ばれはしなかつたのだが。

高校入学から一ヶ月近くが経過したある日の部活終わり、いつものように下校ルートにあるファーストフード店の二人がけテーブルで、私たちは顔を向かい合せていた。「はい、あきちゃん。あーんして」と無邪気にフライドポテトを私の口に入れようとする恵那ちゃん。そんな彼女こそ、私は食べちゃいたかつた。

「ねえ、あきちゃん。私の悩み、聞いてほしいなー」

相変わらず屈託のない笑みを浮かべながら、恵那ちゃんが突然そんなことを言いだした。

「悩み？ いいよー」

「まず、あきちゃんに謝らなきゃ」上目づかいで私を見る。

「実はね。内緒にしてたけど、私、彼氏いるんだ」
「え!？」

私はどきつとした。今までそんな素ぶりなど、露とも見せなかったではないか。これは困った。私が話してきた拓人の試合模様は、雑誌なんかで仕入れただけの浅い知識に基づいて構成されている。もし恵那ちゃんが体験済みな子だったとしたら、どこかに綻びを見つけてしまったかもしれない。どうしよう。ばれていたらどうしよう。

「ひどいよー」私はぶくつと頬を膨らませてみせた。

「どうして内緒にしてたの？ 私にばかりエッチな話させて」

自分から話しておいてなんだが。

「ごめんよー。だって、恥ずかしかったんだもん」

「恥ずかしかった？」

ふふふ、そうゆうことか。いやはや、私が馬鹿であった。恵那ちゃんのようキョートな女の子がすでに体験済みだなんて、本当にどうかしている。きっと彼女とその彼氏も、私と拓人のような、うぶなカップルに違いない。

むむ。だとしたら、悩みというのはまさにそうだった類の話なのではないか。恋の先輩である私に、巧みな試合作りの術を教授してもらおうと。それはそれで困るな。私に答えられる質問ならよいのだが。

恵那ちゃんは言った。

「彼氏が普通のプレイに飽きちゃって、縄で私を縛りたいって言う

んだ」

「……………」
無邪気に話す恵那ちゃんの顔を、私は凝視した。彼女が不思議そうに首を傾げたため、慌てて視線をそらす。

「そ、それは別に、嫌なら断ればいいんじゃない？」
窓の外を眺めながら、私は精一杯平静を装った。

空はすっかり暗くなっている。店の前の大通りを走るたくさん車のライトが、ふと未知の世界へ自分を誘う秋波のように思えた。

「そうじゃないの」と恵那ちゃんがかぶりを振った。

「縛られること自体はちよつと興味があるんだー。私、ちよつぴりMだからね。あきちゃんは どう思う？ それとも、あきちゃんはSかなー？」

「え、えーつと。私もMかな、やっぱ」

目を白黒させながら答える。SとMの単語の意味ぐらい、すでに勉強済みさ。

「じゃあ、縛らせてあげればいいじゃん」私は気を取り直し、微笑を浮かべた。

「恵那ちゃん、彼氏のこと好きなんでしょ？ そういったプレイに興味があるなら、協力してあげるべきだよ」

「うーん」真後ろで結ったおさげ髪を口もとに持ってきて、恵那ちゃんはそのをいじった。

「恥ずかしいけど、あきちゃんには言っちゃおうかな。実はね……………」

「うん？」

「私、二股してるの」

私はがーんとショックを受けた。

開いた口の塞がらない私を、つぶらな瞳で恵那ちゃんは見つめる。その視線に気がつき、私は狼狽を隠すようにシェイクに手を伸ばした。

「二人とも変わらないぐらい好きなの。だから、そっちの彼氏の要望に答えてあげたいんだけど、縛ったら縄の跡がつくじゃん。同じ日に両方の彼氏と会うことも多いから、絶対にはれると思うんだよね」

それはつまり、一日のあいだに二試合以上行くという意味なのか。しかも、別の相手と？　なんてすさまじい。近年はベテランレスラーでさえ、一本勝負がやつとなのに。

「ば、ばれるだろうね」

ストローをくわえたまま、私は言った。

「だからさ、あきちゃんに相談したいの。彼氏に二股のことを打ち明けるべきかなって」

「いや、二股をやめればいいんじゃないの？」

「だって、どっちも好きなんだもん」恵那ちゃんは悪びれることなく言った。

「あきちゃんにも難しい？　じゃあ、残念だけどSMプレイは断るうかな」

できればプレイよりも二股をやめてもらいたかったが、ここでしつこくたしなめるようだと言いつちの名がすたつてしまいそうで、何も言えなかった。

私たちは揃ってファーストフード店を出た。

しばらく歩くと、心地よい春風が胸のもやもやを吹き飛ばしてくれた。ええじゃないか、ええじゃないか。SMでも二股でも、なんでもござれなのが女子高生だ。

スキップで歩く恵那ちゃんが、ふと口を開いた。

「でも、あきちゃんに打ち明けられて嬉しいな。今度からエッチな話、いっぱいしようね」

もやもやもやあつと、またもやもやが蘇ってくる。

どうしよう。相手は百戦錬磨の強者で、私は練習生レベルにも達していないど素人。ああ、彼女と対等にビッチなトークができる知識と経験がほしい。喉から手が出るほどにだ。

第三章 悩める人 (4)

恵那ちゃんから衝撃的な告白を聞かされたその週の日曜日、ようやく私は拓人と会う決意を固め、約束をとりつけた。というのも、私は、しばしば拓人に会おうと急かさねながら、何かしら理由をつけてそれを渋り続けていたのだ。恵那ちゃんにはビッチに見られない私だが、拓人には絶対にそうは見られなくなかったからである。

なんせ学校でビッチを演じ始めて以来、私の脳味噌の中は拓人と無制限一本勝負のことではいっぱいになっている。拓人を前にするとそれを変に意識し、彼に勘繰られてしまうのではと本気で心配していた。

それなのに突然会うことにした理由は他ならない。恵那ちゃんと対等に渡り合うため、拓人にいよいよ正式な試合を申し込もうと考えたのである。

待ち合わせ場所は、過去にもデートの際に利用した駅前の広場だ。張りきっていた私は、十分も前にそこへやってきた。背中のリュックサックの中には、なんとなく必要かなと思っつけて着替えが入っている。他にも、縄の代わりにビニール製の縄跳びを持ってきた。拓人が恵那ちゃんの彼氏と同じ趣味だったときのためである。

避妊具が必要なのも、もちろん分かっているさ。でもそれを買う勇気が沸いてこず、交渉成立後に拓人に買わせる気でした。あとはラブホテルという場所を利用するのに、財布に入った三千円で足りるのかということだけが気にかかっていた。

五分後に拓人が自転車に乗って現れた。なんと手ぶらであったが、

それよりも驚いたのは彼の容姿で、私はぼつと突っ立って、数秒間彼を見つめてしまった。

厳密にいうなら、拓人は髪をきっただけだった。あのじめじめとした髪の毛をさっぱり除去し、坊主頭にイメチェンしていたのだ。彼の近況については電話でよく聞かされていたが、頭を刈ったことは聞いていなかった。

それにしても。

カツコいい……拓人ってこんなにカツコよかったっけ？

中学時代に彼を日陰者たらしめていたのはきつと、結局はあの髪の毛だけだったのだ。今の拓人なら、誰に紹介しても「あきちゃんの彼氏、カツコいい」と羨ましがられるに違いない。

「すっげえ、驚いてる」自転車から降りながら、拓人は笑った。

「久しぶりだね。びっくりさせようと思って黙ってたんだ。やっぱりおかしい？」

「カ、カ……」私は頬を赤くしながら言った。

「カツコいい！ すっごくカツコいいよ！」

「そう？」照れたようにうつむき、拓人は自らの頭をぼりぼりとかいた。

「本山さんがそう言うってくれるなら、しばらくこのままでいようかな」

「うん！ 絶対そのほうがいい！」

その時点で、私は完全に怖気づいていた。拓人の容姿がレベルアップし、喜ばしいのと反面、誰か他に彼を好きになる女子が現れるのではなかるうかと不安も覚えた。よって、彼に嫌われたくないという気持ちが強まり、自分から無制限一本勝負を申し込むなど、そんなはしたないことはできなくなってしまうたのである。

「どうしたの？ そのでかいリュックサック」拓人は目を丸めた。「山にでもいくつもり？ それなら先に言っておいてくれなきゃ」

「いや、これは……」私は視線を右往左往させた。

「ほ、他にバッグがなかっただけ。気にしないで」

あははと私は乾いた笑い声を発した。

拓人もあまりお金を持っていないそうなので、結局どちらかの家へ赴くこととなった。お母さんに「遅くなるから」と宣言した手前、我が家は無理である。自転車を引き、私たちは拓人の家へ向かった。

拓人と肩を並べて歩きながら、やはり私は胸の高鳴りを自覚せずにはいられなかった。ああ、大丈夫だろうか。口にもできないほどのはしたない考えを私が持っているということ、彼が察してしまわないだろうか。

「新しい友達できた？」

突然話しかけられ、私はびくんと身体を痙攣させた。

「新しい友達？ あはは。うん。一人すごく気の合う子がいたよ」

「そう」拓人を前を向いたまま言った。

「さすが本山さんだな。俺、人づき合いが苦手だから、話しかけてくれる奴がいてもろくに返事もできやしない」

控え目な性格までは急に変わらないというわけか。拓人としては不本意だろうが、私は少し安心する。

「私と話するときみたいに、気楽に接すればいいと思う。私からすれば新藤くん、特に人づき合いが苦手なようには感じないし」

通りすがりの太ったおばちゃんが、私たちをじろりとねめつけるように見ていた。彼女の目には、私たちがどのくらい深い仲だと映っただろう。

「正直言うと、本山さんも怖い」

「え？」

拓人に顔を向けると、彼もこちらに視線を移していた。恥ずかしくなって視線をそらす。

わ、私が怖い？ 何それ？

「うちのクラスに大山っていう、見るからにヤンキーって奴がいるんだ」拓人は続ける。

「まあ特段危害は加えられないし、むしろそれなりに仲よくやってるかな」

「その人がどうしたの？」

私の頭の中のクエスチョンマークが、どんどん膨れ上がっていくのだった。

拓人が返答をためらっているあいだに、目的地に到着した。

拓人の家はやや古ぼけた平屋である。ここにくるのはもう五度目ぐらいになるのに、なんだかやたらと他人行儀に私を迎えているような気がした。やっぱり、もっと早く拓人に会っておけばよかったと思う。

「お邪魔しまーす」私は玄関を上がり、それから、居間でくつろぐ拓人のおばさんに挨拶をした。

「どうも、ご無沙汰しております」

「あら、本山さん。久しぶりー」

「母さん、お茶とかはいらないからね」

拓人が照れ臭そうに言った。

「はい。分かった、分かった」

おばさんの冷やかすような視線から逃れ、私たちは拓人の部屋に入っていった。

部屋には勉強机が二つ並んでおり、一つはおじさんのものであるらしい。私が拓人の机の椅子、拓人がおじさんの机の椅子に座るのが慣例となっていた。

「ほんと、久しぶりだな」椅子に座りながら、私は部屋を見回した。
「わ、また本が増えたね。谷崎潤一郎？ 難しそう」

拓人は中学三年頃から読書に目覚めていたのだった。

「本を読んで教養をつけたいんだけどね、なかなか読み進まない」
拓人は、私があずけたリュックサックの置き場所を模索していた。
「これ、随分と思いいね。本当に山へいくつもりだったんじゃないの？」

「それはもう気にしなくていいから！ あ、そうそう。さっきの話の続き聞かせてよ。ヤンキーな子がどうしたって？」

「ああ、その大山つて奴がね……」部屋の隅に畳んで置かれた布団に、寄りかからせるようにリュックサックを置いた。それから、ぜんまいがきれたように拓人は無言で立ち尽くす。

「やっぱ、この話いいや」

「ええー」私は眉をひそめた。

「気になるじゃん。そこまで言ったなら、話してもらわなきゃ困る」

「そ、そうだね」拓人も所定の位置に座った。

「ただし、この話を聞いても、俺を嫌わないでね」

「え？ うん」

私のクエスチョンマークは、天井を突き破って宇宙まで届いてしまっただった。嫌うだった？ いったい、拓人はどんな突拍子もない話を始めるつもりなんだ？

「その大山つて奴が……写メって分かるかな、それを俺に見せてくれたの」

「ああ、ケータイの……？」ケータイが浸透し始めたばかりの頃だ

った。

「ふーん。で、どんな写メ？」

「なんていうか」坊主頭をかきむしり、拓人は言いにくそうに言葉を並べていった。

「あいつの彼女が素っ裸で、こう、足を広げているような」

「素っ裸で？」その姿を想像してしまい、私は赤面してうつむいた。「なんかすごく大胆だけど、それがなんなの？」

「直接関係はないんだけど」拓人は慌てたようすで、首を横に振った。

「まあ、つまりさ。その写真を見てから、なんとなく『本山さんが浮気してたらどうしよう』って心配するようになったわけだね」

「う、わ、き？」

私の目は点となってしまうた。

「いやさ。写真を見せられて、俺はすごい劣等感みたいなものを覚えたの。次に、なんで本山さんは俺みたいなのが彼氏で我慢できているんだろって考えるようになって。そしたら、本山さんに何度も会つのを断られたのとシンクロして、最終的には、ひよっとしたら我慢できていないんじゃないかって……」

私はまぶたを閉じて考え込んだ。

分からん！ 男心がさっぱり分からん！

「まず、その素っ裸の写真を見たことが、どこがどう劣等感に繋が

るわけ？」

「うん、だからまあその……」拓人は言いよどんだ。

「ってというか本山さん、怒ってる？」

「……………」

うむ、とても怒っている。煮えきらない態度の拓人に対してもそうなのだが、そんなハレンチ写真を拓人に見せた大山とかいうヤンキーに対してもだ。つまり拓人は、私のより先にそのわけの分からんビッチの股間を目撃してしまったわけである。おまけに、拓人はその無関係な股間にかなり感化されてしまっているようだ。これは怒らずにはいられない。

「分かった！ もう正直に言う」拓人は姿勢をぴんと正した。だが、顔は下を向いている。

「そうやって、彼女を平気で裸にできる大山が羨ましかったんだ！俺も本山さんの裸が見てみたい！」

私は唾然とした。それから反射的に、両腕で自分の胸もとを包み込んだ。

そ、そういうことだったのか。

拓人は拓人で、私に無制限一本勝負を挑みたがっていたのだ。交際を始めてからもうすぐ二年。そりゃあ男だって、次のステップを意識してしまうのは当然である。

私はちらっとリュックサックを、それから、おばさんのいる居間のほうを見やった。

心音が爆発してしまいそんなほど暴れ回っている。下半身がじんじんと微熱を帯びているのが分かる。脇の下には汗が滲み、喉がからからに渴いている。だから口を開こうとしたとき、ごぼっと一度咳き込んでしまった。

それでも言葉にしくちやならない。深呼吸をしてから私はなんとかこう言ったのだ。

「す、す、好きにしていよ」

第三章 悩める人 (5)

【OFF】

雑誌やテレビでも紹介されていた店だったが、昼どきなのにたいして人が並んでおらず、ほんの数分で二人分の席が空いた。その原因は明らかで、店から漏れるとんこつスープの香りが、異臭というレベルを超越していたからに他ならなかった。

「ほんまにここで食べるん？」真鍋さんは顔をしかめたままだ。

「今ならまだ間に合うって。さっきの洋食屋さんにしようや」

「駄目です！」私はびしつと言ってやった。

「この店を目当てに一時間も電車で揺られてきたんですよ！ 食べとかないと絶対後悔します！ そもそも、真鍋さんから誘ってきたんですよ！」

「だって、臭いんやもん」

時刻は午後一時。私と真鍋さんは、ときどきこうして、一緒に有名ラーメン店に足を運ぶ仲であった。お互い、夜とは違ってメイクやファッションに気合いが入っている。その他にも、相手の新しい一面を垣間見られる機会なので、私はこのひとときを気に入っていた。

「とんこつラーメンなんだから、仕方ないんじゃないですか。匂いが強烈でも、味は保障つきですよ。ザ・ラーメン道で三ツ星もらってましたもん」

わざわざ私が説明せずとも、店内の至るところに、その名誉を誇示する貼り紙がしてあった。

「前に食べるにいったとんこうラーメンの店は、これほどやなかったけどなー」

「換気に使うお金を材料費に回しているんですよ。ますます期待が膨らみますね。あ、すみませーん！ チャーシューメンを二つお願いしまーす！」

私はそう告げると同時に席を立った。給水器で二人分の水を入れ、コップを持って帰ってくる。

「あんがと」「コップを受けとりながら、真鍋さんは言った。

「ねえ、あきちゃん。例の高校時代の同級生の子に連絡ついた？」

「あ！ つきました、つきました。今、名古屋に住んでいるようで、私びっくりしちゃいましたよー」

先述のとおり、私は気をつかってしまう人間である。スタッフたちは「名前もだしてないんだし、大丈夫じゃない？」と言ってくれるのだが、あの恵那ちゃんにだけは、どうしても私の思い出話に登場させるという許可をえておきたかった。他の子はともかく、彼女の役どころは少々過激なのである。

ところが、いまだに彼女と連絡がついていなかった。連絡がつかないまま、こないだ先走ってラジオに登場させてしまったので、今頃かんかん怒っていやしないかとひやひやしていたのだ。

しかし一昨日、なんとか恵那ちゃんの実家の住所を調べ上げ、彼女のお父さんに恵那ちゃんのケータイ番号を聞きだすことに成功し

た。

「うそー!? あきちゃん!? 超久しぶりー! 元気してたー!」

電話口から、高校時代とちつとも変わらない恵那ちゃんの明るい声が聞こえてきた。容姿も服装も、あの頃のままなんじゃないだろうかと思った。

「久しぶりだねー。ねえ、恵那ちゃん、今どこにいるの?」

就職先から名古屋支店への配属を言い渡され、その会社を退職しながらも、依然として名古屋にとどまっているという回答だった。現在はアルバイトで生計を立てつつ彼氏と同棲しているという話を聞き、なかなか本題を口にしにくかった。

だが、逃げるわけにはいかない。

「すっごーい! あきちゃん、ラジオのパーソナリティなんてやってたんだ! あははは! 私のことなんていくらでも話していいよ。今は彼氏一筋だけど、どっちも好きなら二股だってオーケーっていう信条は変えてないもん」

なんて明快な性格だろう。是非、私の代わりにパーソナリティをやっていたきたい。

「でも、夏休みにナンパされたときのこととかもあるじゃん。ああいうのも話していい?」

「ゼーんぜん！ エッチまでは浮気じゃないから！ 心さえ奪われなきゃね！」

二股理論と矛盾しているような気がしたが、黙っておいた。

「分かった、ありがとう。こっち帰ってきたら連絡してね」

「あ、ちょっと待った」何かを思いだしたように、恵那ちゃんと言った。

「あきちゃん、ケータイ替える予定ない？」

「ケータイ？ ううん」

「私さ。ソフトバンクの営業のバイトやってんだけど、今月ノルマ達成すれば社員昇格できるんだ。ねえ、ケータイ替えない？」

「……………」

このタイミングで断れるはずがないではないか。

「そ、そういえば」私は観念した。

「そろそろビジネス用に、もう一台ほしいなって思ってたんだ」

「わあ！ 奇遇だね！」

「……………」

次回の放送では覚悟しておいてもらおう。

「ふーん、その子おもしろいね」「ふうふうと麵に息を吹きかけながら、真鍋さんは言った。

「一度会ってみたいなー。めっちゃ可愛いんやろ?」

「可愛いですよー! 萌え萌えって感じですよ!」私もずるとラーメンを啜った。

「はむはむ。ねえ、けっこう美味しいでしょ? やっぱこの店にしてよかったでしょ?」

「はむはむ。うん、そうやね。美味しい」

「あはは! 真鍋さん、海苔がくっついてお齒黒になってますよ!」

「ほんまに? くわばらくわばら」

「真鍋さん?」私は眉間にしわを寄せ、真鍋さんの顔を覗き込んだ。「なんか、元気ありませんね。悩みでもあるんですか?」

真鍋さんの箸の動きがぴたととまった。しばらくそのまま視線を宙に漂わせ、やがて箸を置いてしまった。

「え? まだ、たくさん残ってるじゃないですか」

「あきちゃん、食べる?」

「いえ……」

私は引き続きラーメンを食しながら、真鍋さんを盗み見していた。

彼女は頬づえをつき、気の抜けたような顔で店内を眺め続けている。

「いったい、どうしたのだろう。」

真鍋さんといえば、焼肉を食べたあとにラーメンを食らい、帰宅してから更にもっとチップスを食べるといふ豪快な人なのだ。食欲もそうだが、先ほどのようにぼうつとしている場面を、今日はた

びたび目撃している。

これは絶対、何か悩みを抱えているはずである。五年來の仲の友人として、放っておくわけにはいかなかった。店を出たらどこかしんみりとした場所へ連れて行って、一つ残らずはかせなければ。

「今日な。ちょっと仕事の話をしようと思っと思って」

「ああ、今は大丈夫ですよ。あとで喫茶店にでも場所を移しましょう」

私は麺を食べ終え、スープをれんげですくっていた。

「うん、そうしょうか」そう言いながらも、真鍋さんはあと溜息をついた。

「野波さん、本当に汚いよな。言にくい話は、いつもうちに押しつけて」

「え？」私はれんげを置いて、神妙な顔つきで真鍋さんを見つめた。「なんなんですか？ やっぱり、今話してください。お願いします」

「うん」真鍋さんは力なく頷いた。

「残念やけど、ホッとスィーとタイム が三月で打ちきられることになってもうた」

「……………」

私は口をつむんだ。ほんの少しだけ予感めいたものはあったが、やはりシヨックだった。

「なんていうか」しゅんと肩を落とし、私はしぼりだすように言った。

「すみません。やっぱり、お色気エピソードが少な過ぎたのでしょうか」

「ううん。あきちゃんの話は概ね好評よ。スポンサーさまも満足しとるみたいやったし、今月の聴取率が上がったよ」

「え？」私は眉をひそめた。

「じゃあ、もうちょっと待っててくれても……」

「聞いた話では……」真鍋さんは顔を背けながら、コップに口をつけた。

「去年の時点ですでに打ちきりは決まっちゃったんやっ。テコ入れはスポンサーさまの意向で、いわゆる最後っ屁を狙ったんやろうな」

「そんな！」私は自分でもびつくりするぐらいの大声を上げてしまった。店内のお客さんたちの注目を浴び、慌てて自らの気を静めた。「ひどいですよ。嘘偽りなく自分のことを話すのって、すごく勇気がいるのに。そのために昔の同級生にも許可をえたのに。何もかも全部無駄だったんですか」

「ごめんな。野波さんも私も知らんかったん」

そしてまた、真鍋さんは深い溜息をついた。

そうだった。真鍋さんに文句を言っても始まらないのだ。もちろん、野波さんや他のスタッフも同じ。彼らも ホツとスイーとタイムの打ちきり通告にはショックを受けているだろうし、もとはといえば、打ちきりが決まるまでちっとも面白い話ができなかった私が悪いのだ。

「真鍋さん」ぶつけようのない怒りに頬を膨らませながら、私は言った。

「これから、ヤケ酒つき合ってくれませんか」

「無理よ。夕方から収録があるんや。あきちゃんかて、バイトやる？」

ホッとスイーとタイム 以外にも、真鍋さんは幾つかの番組を受け持っていた。

「……仕事がないときに言ってくればよかったのに」
私はつい毒づいてしまった。

「そっやね。ごめん」

自己嫌悪に陥る。真鍋さんを責めても何も始まらないのに。

電車に乗っているあいだ、私たちに会話はなく、駅についたところで手を振り合って別れた。ひゅうと木枯らしが吹き荒ぶ中、私はどうしようもない焦燥感を胸に抱きながら帰路についた。

第三章 悩める人 (6)

「もしもし？」眠たそうな声である。昨晚朝まで勤務していたはずなので、無理もないだろう。

「あれ？ 本山さん、どうしたんですか」

「ああ、直くん。起こしちゃってごめんね。えっと、本日のバイトは体調不良によりお休みさせていただきます」

「ええ！？ 急にそんなこと言われても……」

シフトに穴が空いてしまうのは痛手だろうが、まずは体調の心配をしてほしいものだ。

「大丈夫だよ。のんちゃんが代わりに出てくれるって」

「あ、そうなんですか。それなら」

なんとという変わり身の早さ！

挨拶もせず、私は通話をきった。それからケータイをテーブルの上に投げ置き、新しい缶ビールを手にした。五百ミリリットルの缶をもう三本も空けており、気分も悪くなってきたが、かまわずプルトップを引き剥ぐ。ヤケ酒とはそういうものなのだ。

家へ帰ってきたのは三時過ぎで、現在はすでに五時半となっていた。その間、小波ちゃんや大学時代の友人に愚痴メールを送りまくっていた。一見優しい返事はくれるが、文面から相当鬱陶しがっているのが読みとれる。みんなまだ仕事なのである。

小波ちゃんを含めた何人かは、仕事終わりにうちへ駆けつけてくれるそう。はたして本当だろうか。「どうせ言葉だけさ」と自分に言い聞かせつつも、やはり淡い期待を抱いてしまっている。

玄関のチャイムが鳴った。私はびたつと動作をとめ、ゆっくりと玄関に顔を向ける。本当に、誰かがきてくれたのだろうか。

「はい」

覗き穴から来客者を確認してみる。むむ、黒いコートを着て、白いマスクをつけた女性。これはまさしく口裂け女……ではなく、小波ちゃんだ。

私は嬉々としてドアを開けた。するとその瞬間、ぱんという破裂音が目前で響き、きゃつと短い叫び声を上げ退歩する。玄関の段差につまづき、私はそのまま尻餅をついてしまった。

「きゃはは、きゃは」小波ちゃんが私を指差して爆笑している。もう片方の手にクラッカーを持っていた。

「あきちゃんつてば最高！ そんなナイスリアクションしてくれると、こっちもいたずらする甲斐があるってもんだなあ！」

「小波ちゃん」

座ったまま、私は小波ちゃんを睨みつけた。しかしそれとは裏腹に、嬉しいような悔しいようなよく分からない気持ち湧いてきて立ち上がるとすぐに小波ちゃんに抱きついたのだった。

「うわ！ あきちゃん、お酒臭いよー」私の背中をさすりながら、小波ちゃんは言った。

「ちゃんと、私の分のお酒もとってくれてるんだろっね」

「うん、うん……」私は泣きじゃくりながら頷いた。そして、小波ちゃんを見上げる。

「もう、仕事終わったの？」

「派遣の特権、定時上がりを発動させちゃった」

小波ちゃんは現在、近所の雑貨卸売会社のオフィスで働いている。派遣社員であったはずだが、もう二年以上勤務地は同じなので、そうは呼べなくなってきた。

彼女を部屋に招き入れ、きんきんに冷えた缶ビールで乾杯した。

「ひどいよねー」小波ちゃんが言った。

「せっかくあきちゃんが思い出を洗いざらい話してやったっていうのに、始めから打ちきりが決まってたなんてねー」

小波ちゃんはよく髪型を変えるが、今回もまたふわふわショートから黒のストレートに変わってた。中学の頃の彼女に戻ったようで懐かしかった。コートの下には胸もとの広く開いたシャツを着ていた。お酒に弱いので、一口飲んだだけでその辺りが赤くなってきた。

「本当！ 小波ちゃんたちにも失礼だよね！」

「それもこれもゼーんぶ、 ホツとスイーとタイム の存続のためだったのにな」

「ねー。もう、今週の アッキーの恋の軌跡 はストライキしてやるもん！ 前回いいところできっちゃったけど、そんなの関係ない

し！」

「それ、いいじゃん！ やっちゃん、やっちゃん！」

私ばかりが酒をあおり、小波ちゃんは持参してきたポテトチップスをつまんでいた。

「自由の身になったんだし、一緒に海外旅行にでもいこうよ！」
「いいね！ 私、香港いきたい！」

はつきりいつて私は体質的にあまり酔いを感じないのだが、それでも気分はすっかり高揚していた。嫌なことがあったときの、親友の力は偉大である。

「っていつか、明日から出発しちゃうか？」

ラジオなんて、もうどうでもよくなっていた。そうなのだ。そのお仕事自体が降って湧いたような話なのだから、番組が打ちきられる程度で落ち込んでいてどうする。もともとは、私みたいな素人をパーソナリティとして使うと言いだした野波さんの責任である。

「ところでさ、あきちゃん」小波ちゃんは、不意に声のトーンを落としたりした。

「ラジオが終わること、新藤くんには言った？」

「え？ いや、言ってない」

晴れていた心が少しだけ曇る。

「やっぱりね」小波ちゃんは自身の服のえりをつまみ、ぱたぱたと仰いだ。

「さっさと引っ越しなさいよ。どうせラジオでも発表しなきゃなん

ないんでしょ」

「でもさ」私ははあと溜息をついた。

「それを知っても、拓人が平然としてたらどうしよう。私、いよいよ逆プロポーズするしかなくなっちゃうかも」

そう。拓人に番組打ちきりのことを話せないのは、どうしても彼に次のステップを意識させてしまうからだ。週にたった一度の仕事とはいえど、ホツとスイーとタイム は私の城である。城が崩壊し荒野へ一人投げだされた私に、拓人には手を差し伸べる義務がある。その義務を拓人が放棄してしまわなかが不安なのである。

高校時代の彼の台詞を借りるなら、私は拓人が怖かった。

「すればいいじゃん。逆プロポーズ」

「え？」私は目を見開いて、小波ちゃんを見つめた。

「本気で言ってるの？」

「本気、本気」小波ちゃんは平然と頷いた。

「それで、新藤さんの気持ちもはっきりと分かるじゃん。あいつにその気があるのなら断ったりしないだろうし、もし断られたら、きっぱり別れを突きつけてやりなよ」

「別れを……」

もちろんプロポーズがなくとも、私たちの交際はつつがなく続いていくだろう。でも、私が彼に疑問を抱いてしまうのは避けられない。ひょっとして彼は、私と一生このままの関係でいようとしているのではないかと。

だとしたら、私の人生プランとは相違がある。いつか、拓人と別れなければならない。

「嫌だよー」私はまたじわりと目を涙で滲ませてしまった。

「拓人と別れたくないよー。怖いよー」

「よしよし」小波ちゃんは私を胸で受けとめた。

「冗談だつてば。新藤くん、きつとプロポーズしてくれるって」

「ほんと？ 本当にプロポーズしてくれる？」

「うん、うん」

小波ちゃんがそう言うてくれるなら、信じてみようと思った。

いつの間にか小波ちゃんは帰っていて、私は寢室のベッドに仰向けに寝かされていた。

星のない夜空を眺めながら、私は涙を拭った。

拓人にだつて準備は必要だと思う。結局禁酒も失敗していたし、資金面で心もとないのかもしれない。私に手を差し伸べる義務なんて、本当に彼にあるのだろうか。

結婚するにはお金がかかるというが、世間体を気にしななければその限りでもない。結婚式に憧れているわけでもないし、結婚指輪もないならなかまわれない。ああ、でも結婚指輪くらいもらわないと、拓人の愛を疑ってしまうかもしれない。

そんな私が、すごく嫌だ。本当は拓人を怖がっているんじゃないかと、自分自身を怖がっているんじゃないかと。そう考えだすと、

頭が痛くなる。具合が悪くなる。

こんなときは、拓人と添い寝をするのが一番である。私は彼にメルしようとしたが、ケータイをとりたげき上がる気力もなく、そのまま眠りに落ちてしまった。

第三章 悩める人 完

第四章 抗争 (1)

【アッキーの恋の軌跡】

ストライキなんてできるはずもないので、高校時代編の続きを語ることにする。

「好きにしていよいよ」という私の台詞は、今まで生きてきた中でこれ以上ないほどに色気がこもっていたはずである。しかしながら、拓人は私を好きにしようとせず、

「キスしていい？」

「どうぞ」

「んー、チユ」

という、いつもどおりの健全なキスしか求めてこなかった。もっとも、拓人の家には家族がいたし、そのときとなってはラブホテルに誘う勇気も萎えていたので、私としても異存はなかった。

ところが困ったことに、それ以来三ヶ月近く、私たちは電話のみの仲となる。そのメカニズムを解説しよう。

「好きにしていよいよ」と私が宣言してしまった手前、次会うときはすなわち、拓人が私を好きにするときなわけだ。私は私で、もう二度と自分から誘うというふしだらな真似はしたくないし、拓人は拓人で、今の関係を壊したくないという、愛溢れた停滞である。

恵那ちゃんとのつき合いは続いている。彼女は相変わらず私をビッチだと信じてくれているが、二股を告白されて以来、話題が過激

になってきたのは言うまでもないだろう。

「あきちゃんって、おっぱい大きいよねー」

いつものファーストフード店である。恵那ちゃんがハンバーガーでもつまむように私のおっぱいをつまんできたので、私は「きゃん」と子犬のような声を上げてしまった。

「私さ、彼氏からよく『おっぱい小さい』ってからかわれるの。あきちゃんが羨ましいなー」

どちらの彼氏だろうと疑問に思ったが、わざわざ訊ねやしない。ちなみに恵那ちゃんの彼氏は二人とも年上で、一人はなんと二十七歳のサラリーマンだという。愛があれば、犯罪なんかじゃないのだ。

「そんなことないって。私は恵那ちゃんに憧れるなー」

今まで内緒にしていたが、高校に進学したのを機に、おっぱいも急成長を始めていた。だが、当時はそれが悩みでもあった。おっぱいが成長する分、体重まで上昇してしまうのである。このまま体重が五十キロを超えてしまうようなら、おっぱいなんてないほうがマシだ。

「でも、おっぱい大きいほうが彼氏も喜ぶでしょ？」

「そ、そうかなー。そうでもないけどなー」

拓人とおっぱい談義を交わしたことなどないが、とりあえずそう答えておいた。

「そうに決まってるじゃん！ あきちゃんの彼氏、おっぱいばっか

り責めてこない？」

「い、言われてみればそうかも……」

その日の夜の電話で、私は思いきって拓人に訊いてみた。

「拓人ってさ。おっぱいが大きい女の子と小さい女の子、どっちが好き？」

「え？　なんで急にそんなこと……」

「参考までに」

「うーん」拓人はひとしきり悩むようすを見せたあと、

「あきちゃん、大きいから、大きいほうが好きかな」

うぎゃー！　やっぱり私のおっぱいの大きさを熟知していた！

おっぱいの急成長は高校に進学してからのことなので、たった一度しか会っていないはずなのに、うぎゃー！

おっと、取り乱している場合ではない。試合への拓人の意思が、再確認できたのは収穫である。

「そ、そう」

衝撃を抑えつつ、私は意図的に沈黙を作った。彼が「会いたい」と言いだすのを待ったためだ。あの日以来、電話で話すとき、たびたびこれを行っているのだが、一向に彼のお誘いはない。まるで猪木を追い回す前田の心境だ。

世の女性諸君、拓人はあまりにも卑怯ではなからうか。告白した

ときもファーストキスのときも私からなのだから、そろそろ拓人の番なはずである。

「学校はどう？ 楽しい」

違う違う！ そんな話題はどうでもいい！

「学校ねえ」

本当は楽しくやらせてもらっているのだが。

「最近、ちよつと」私はわざとらしい溜息をついた。

「嫌なことがあってさ。直接会って、相談に乗ってもらいたいな」

「相談？ 俺に？」

「他に誰がいるの」

またしても、永遠のような沈黙。拓人の返事を、私はひたすら待ち続けた。さすがにここまで言えば、彼も宣戦布告を受け入れてくれると思った。

しかし。

「今ここで話したほうがいいよ」

「えっ？」私は狼狽した。

「いや、会って直接話したいんだけど」

「大丈夫。相談なら電話で乗れる」

私がかちんときた。この瞬間、一度拓人を見限ったのである。

「もういい！ またね」

私は乱暴に受話器を置いた。

なんたる不躰な！ 百歩譲って、無制限一本勝負に挑む勇気が湧かないのであれば許してやってもいい。だが彼は、恋人の「ただ会いたい」という願いさえも無気に踏みにじってきたのだ。

今考えると、私のこの言い分は矛盾している気がしないでもないが、そのときは本気で拓人が憎らしく思えた。なぜなら、重大な疑惑が私の胸の中をどす黒く染め上げていたからだ。

拓人のほうこそ、私を見限っているのでは。

だって、拓人はもう中学時代の根暗な拓人ではない。その姿を目見れば、誰もが魅了されてしまう、ナイスガイに生まれ変わっているのである。

一方の私は過去の栄光もむなしく、横にばっかり成長してしまった発情期女。拓人が私に執着する意味など、どこにもないではないか。意味があるとすればおっぱいだけで、彼はおっぱいのためだけに私をキープしているに違いない。私はキープちゃんなのだー！

それなら、なぜ誘いを拒むのかという疑問は湧かなかった。もう、思考回路が拓人を一方的に敵視してしまっている。

私と拓人の抗争が始まった。

第四章 抗争 (2)

それからも、恒例の夜の電話は続けた。ただし、こちらこそ拓人を拒んでいるんだぞという姿勢を示すために、例の沈黙は二度と作らなかった。

「ところでさ。夏休みの花火大会だけど……」

「あ！ 私、これから友達に電話かけなきゃいけないかったんだった。ばいばい」

「ば、ばいばい」

こんな調子である。

そんな冷戦が続く中、いよいよ高校初の夏休みを迎えた。その頃には恵那ちゃん以外にも何人か仲のよい子ができて、恵那ちゃんを含めた五人の小グループを形成していた。清純派な子が多かったので、男性経験の多い私と恵那ちゃんがボスである。えっへん！

拓人が私と一緒にいきたがっていた地元の花火大会も、彼女たちと一緒に出かけた。少し拓人が可哀想かなと思ったけれど、騙されてはいけない。彼は彼で、別の女と楽しくやっっているはずさ。

幸い雨は降らなかったが、曇り空で蒸し暑い夏の夜だった。県内有数のビッグイベントなだけあって、会場は多くの人で込み合っていた。醤油の焦げたよい香りが漂う中、私たちは人のあいだを縫い歩き、出店を巡った。

「うわ」恵那ちゃんが私の腕に飛びついてきた。

「今、誰かにお尻触られたよ！ 痴漢がいる、痴漢が！」

「恵那ちゃんのお尻セクシーなんだから仕方ないよ。我慢しなさい」
他の子があははと笑い、恵那ちゃんは「もう！」と膨れた。私も
だいぶボスの貫禄がついてきたものだ。

水風船釣りのお店と出会った。子供のようにはしゃぐ恵那ちゃん
を、他の四人が見守る恰好となった。

私たちはみんな浴衣を着ていた。恵那ちゃんに限っては小慣れた
化粧までしており、目立ち方が半端ない。通りすぎる男性たちも、
みんな彼女に見惚れているように思える。

「ねえねえ」

「ん？」

女の子の一人がとんとんと肘うちしてきた。

「あそこの男の子たち、ずっとあきちゃんを見てるよ」
「え!?!」

なんと、輝いていたのは私も同じだったのか。私はそっと、女の
子が指し示す方向を見やった。

そこに中学時代の同級生の一団がいたため、私は脱力するのであ
った。

一応手を振って応えてみると、彼らはわらわらとこちらへ寄って
きた。

同時に不安を覚える。彼らは私が拓人とつき合っているのを知っ

ているし、拓人がサッカー部出身のイケメンじゃないのも知っている。っていうか、私がビッチじゃないのを知っている。

「本山、元気？」

「みんな、いくよ」

私は恵那ちゃんを引つ張り起こし、その店を逃げだした。古きよき友よ、すまない。私はもう、君たちが知っているあきちゃんではないのだ。

百メートルほど離れてから、私たちはようやく足をとめた。

「いいの？ 知り合いじゃないの？」

「うん、ちよつと思いだしたくない男なんだ」

「きゃー！ あきちゃんって悪い女ー！」

茶番である。

そのとき、またしても男に話しかけられた。

「ねえ、ちよつといい？」

早くも追っ手がきたかと私は身構えたが、話しかけてきたのは見知らぬ顔の男性二人組であった。顔つきや体軀を見る限り、私たちよりも年上、大学生ぐらいに感じられた。

ホツとする私とは裏腹に、他の子は怯えた表情を見せる。原因はすぐに分かった。男のうちの一人がタンクトップを着ており、腕に龍の墨を入れていたのである。おまけに、頭はごちごちのスキンヘッドだ。ただ、私はタトゥーやスキンヘッドを生で見慣れているせいか、それほど怖くはない。

「女の子だけじゃ、つまんなくない？」

タトゥーじゃないほうの男性が続ける。こちらは浴衣姿で、顔立ちも好青年ふうだ。粗を探すとするなら、ぎんぎらぎんの銀髪がとても眩しい。

「うん、つまんない。お兄さんたち、一緒に遊ぶ？」

恵那ちゃんである。彼女も臆することなく、二人と接している。

「おお、ノリいいじゃん」男性たちは奇妙な目配せをした。

「うんうん、遊ぼう遊ぼう。君たち、女子高生？俺たち、夢見るフリーターね」

というわけで、彼らと合流することとなった。二人ともすごく明るい性格で、他の子たちの緊張もすぐに解けたようだった。わあきやあとはしゃいでいたので、周りの方々にはたいへん迷惑だったかもしれない。

「わー、綺麗だなー」

花火を並んで見上げたときには、私は銀髪さんと気の合う仲間になっていた。

「ここにいたって、俺たちはいつまで経ってもビッグにはなれねえ」銀髪さんは夢を語っていた。

「やっぱりよ、東京にいつて初めてスタートラインに立てるってもんだ。いつかは上京してやるぜ！東京にもきつと、俺たちみたいなアウトローを受け入れてくれる場所があるはずさ！」

今聞くと陳腐な言葉に思えてしまいが、そのときの私は目をきらきら輝かせて彼の話に聞き入っていた。もしそのタイミングで一緒に東京までついてきてくれ！」と懇願されたら、拓人のことも忘れ、ほいほいとついていってしまったかもしれない。彼らが東京で何をしたがっていたかは、残念ながら覚えていない。

花火が終わると、他の三人の子たちが門限を理由にそそくさと帰っていった。私にも一応門限はあるのだが、彼女たちの手前、そんな軟弱なことは言いだせなかった。

だが、腕時計の針は十時を差そうとしている。やはり、私もぼちぼち帰り始めなきゃならない。私は必死に、然るべき理由を探した。

そのとき、恵那ちゃんがちょこちょこ寄ってきたのだった。

「あつきちゃん！」私のおっぱいをつんつんとつつく。

「私ね。今からあの人とホテルいくことになったから、ここで別行動にしよう」

「え！？」私は仰天して恵那ちゃんを、それからタトウーさんを凝視した。

「ホ、ホ、ホテル！？ だって恵那ちゃん、か、か、彼氏いるじゃん！」

「彼氏たちとは、今夜だけ別れることにしたの」満面の笑みで恵那ちゃんは言う。

「だってあの人、面白いんだもん！ 好きになっちゃったんだもん！」

タトウーさんが、にやりと不気味に笑った。確かに彼と恵那ちゃん

んは、私と銀髪さんのように、ずっとツーショットを形成していた。

「ねえ」と恵那ちゃんが耳打ちしてきた。

「あの銀髪の人、ものすごいテクニシャンなんだって。あきちゃんも頑張ってたね」

「え!？」

どくと私の心臓が跳ね上がった。

「だって、あきちゃん」恵那ちゃんは不思議そうに目を丸める。

「彼氏と別れて寂しいんでしょ?」

そう。拓人とはすでに別れたと、説明してあった。それはつまり、いずれは本当に拓人と別れようと考えていたからなのだが。

「寂しさを紛らわしてもらいなよ。あの人カッコいいし、あきちゃんタイプなんじゃない?」

「そ、そうだね」私は曖昧に笑ってみせた。

「そろそろ身体が男を欲しがっている頃だろうし、ちよっくらお相手してあげようかな」

「さっすが、あきちゃん! そんなじゃ、また明日ね」

恵那ちゃんとタトゥーさんは、あっさりと夜の闇に消えていった。その途端、銀髪さんが「それじゃあ、いこうか」と私の肩に手を回してきた。

私はその手を反射的に払いのけるのだった。

「ど、どうしたの？」

「あ、すみません」私はうつむき、それから上目づかいに銀髪さんを見た。

「あのう、実は私も、あまり遅くなるわけにはいなくて」

「え？」銀髪さんは心外そうに眉をひそめた。しかし、すぐに表情を和ませる。

「そんなー。これからってときにそれはないっしょ。帰りはちゃんと送ってあげるから、ね？ もうちょっと遊ぼうよ」

そして、彼は再度、私の肩に手を回した。今度は私も抵抗しなかったが、決して彼の誘いに乗ったわけではない。そうしながら、どうやって逃げだそうか、策を練り続けていた。そんなとき、脳裏にふと拓人の顔がちらついたのだった。

今頃、一人で寂しがつてるんだろうな。

はっと私は気がついた。

本当は分かっていたのだ。拓人は私を裏ぎったりなんかしない。彼を疑ったのは、彼を信じる勇気が私になかっただけなんじゃないか。

二人は歩く。霧が立ち込めてきて、辺りは異様な雰囲気に包まれていた。途中までは、帰路につく人の流れに沿って駅のほうへ向かっていたが、やがて暗がりの一本道に銀髪さんが折れようとした。

「自転車とってこないと……」

「あきちゃん、おっぱい大きいね」
銀髪さんは私の言葉を無視した。

「え？」

次の瞬間だった。彼は挨拶代わりにの冗談のつもりだったのかもしれないが、私は全身に稲妻を浴びたようなショックに見舞われた。銀髪さんが、恵那ちゃんがやるように私のおっぱいをぼよんとつついたのだ。

「え？」

数秒前と寸分狂わぬ反応をする私。だが、そこから違った。傷口から血が滲みだしたかの如く、私は瞳を涙で濡らした。

「あ、あきちゃん？ どうしたの？」

「すみません、すみません」

困惑する銀髪さんの顔はもはや見えない。いくら手で拭っても無駄だ。次から次へと涙が溢れだしてくる。

どうしてこんなに悲しいのだろう。たかがおっぱいをつつかれただけ、いつも恵那ちゃんにされているのに。拓人にだって、いつかは触らせてやるつもりだったのに。

そうだ、拓人だ。彼を差し置いて、銀髪さんが私のおっぱいを触った男性第一号になったのがとても悲しい。銀髪さんはいいい人だけど、一番は拓人じゃないと駄目なのだ。

「ごめん、あはは」銀髪さんはぎこちなく笑いながら、私の肩に手

を置いた。

「つい調子に乗っちゃったわ。まさか、泣きだすとは思ってなかったからさ。ほら、注目浴びちゃってるって」

銀髪さんは本当に優しい人で、自転車置き場まで私を送ってくれた。彼に礼を言って自転車を発車させた私は、きこきこことペダルを漕ぎながら、喪失感に胸を痛めていた。

拓人に謝ろうと私は思った。疑っていたこと、素っ気ない態度をとったこと、おっぱいを触られてしまったこと。いまだにケータイを持ってなかったため、すぐには実行に移せないのが歯がゆい。でも、家に帰ってからきつと謝ってみせるさ。

そんな矢先に、ぽつんとたたずむ電話ボックスを見つけた。むむ。家まで帰るのにあと二十分はかかる。すでに十時半を回っているの、下手したら禁断の十一時になってしまう。十一時以降に電話をすると、拓人のおじさんおばさんの心証を損ねてしまうのだ。そんなルールが、当時の私にはあった。

「よし！」と意気込んで、私は電話ボックスに飛び込んだ。十円を入れて、拓人の家のダイヤルを回す。わずか二度のコールで電話が繋がった。

「あ、あのう……」

「もしもし？ 本山さん？」

「あ……」

拓人が応答してきたのは、はつきりいって想定外だった。私はあまりの動揺から、すぐさま受話器を下ろしてしまった。

し、し、しまった。

もう一度かけ直すか？ いや、これ以上電話すると、おじさんたちの心証が。

うん、明日だ。今日はもうあきらめて、明日の朝一番に謝るのだ。

まだ謝っていないにも関わらず、拓人に謝ろうという決心は私の心を軽くした。「ごーめんねー、ごーめんねー」と意味不明な鼻歌でも歌いながら、残りの帰路をすいすいと進んだ。おかげで、予定よりも五分ほど早く家に帰りついたのだった。

「ただいまー」

玄関のドアを開けた途端、奥からお母さんがすっ飛んできた。

「ちょっと、心配したんだから！ あんまり遅くなっちゃ駄目だつてあれほど言ったでしょう!？」

「だって……」

言い訳を口にしようとしたそのとき、私はかちんと固まってしまった。

お母さんの後ろに、背後霊のように拓人が突っ立っているではないか。

第四章 抗争 (3)

「ど、ど、ど、どうしたの？」

三ヶ月ぶりの対面を懐かしむ余裕もなく、私はうるたえて拓人に指をつきつけた。

「いや、本山さんのようすがおかしかったから……」

「さっき、私が新藤くんのおうちに電話したのよ」「お母さんが割って入ってきた。」

「あんたがいつまでも帰ってこないから、新藤くんと一緒なのかもしれないと思って」

私は押し黙ってしまった。数秒間の気まずい沈黙が流れる。それを打ち破ってくれたのは拓人だった。

「本山さんが無事でよかったです」彼は母に会釈しながら、こちらへ歩いてきた。

「もう遅いので今日は帰ります。お休みなさい」

それから、私にも「じゃあね」と別れの挨拶をする。靴をはき、たたきの上でつま先をとんとんとする彼の姿を見つめながら、私はなんだかやりきれない思いに駆られた。

その因果は不明であるが、ここで拓人を帰してしまったら、もう二度と彼と通じ合えないような、そんな気がしていた。

「ちょっと」

「ん？」

拓人は振り向く。

大きく深呼吸をしてから、私は続けた。

「泊まっていきなよ。もう遅いから」

「え？」

拓人の細長い目が、くわっと見開かれた。

「こら、こら」お母さんが笑いながら言った。でも、目は笑っていない。

「何、おかしいこと言ってるの。あんたたち、まだ高校生でしょうが」

その言い分に、私はむっとする。年齢がどうか、そういう問題ではないのだ。

「泊まらなくてもいいから、私の部屋で少し話をしよう？」

「こら！」お母さんが寄ってきて、私の側頭部をぺしんと軽く叩いた。今度は笑っていない。

「新藤くんだって、あんまり遅くなるわけにはいかないんだから」

「いえ」拓人がやっと口を開いた。

「僕は大丈夫です。少しだけでいいから、二人で話をさせてくださいませんか？」

私は緊張した。一瞬だけ私に向いた拓人の視線が、やけに冷たく感じられたからだ。

お母さんは戸惑いの表情を浮かべる。お父さんがいるリビングをちらっと見やり、それから私たちの顔を順に見比べる。私たちは申し合わせたように、二人とも真剣な目つきをしていた。

「あんまり遅くなっちゃ駄目だからね」

拓人の手を引っ張って自分の部屋に入った私は、まず扇風機をドアの前に置いた。ドアに鍵はついていないが、内開きなため、これ外からは開けられない。ここで私たちが殺されたなら、謎が謎呼ぶ密室殺人である。

「本山さん、何やってんの？」

苦笑しながら話す拓人を、ベッドに着席させる。その隣に私も座った。

しんとした部屋にまた、なんとも微妙な空気が流れる。

拓人はTEEシャツにハーフパンツという出で立ちだった。髪が伸びた気配はなく、あれからも何度か床屋へいったのかもしれない。

一方の私は浴衣姿のまま。浴衣さえ脱ぎ捨てれば、あつという間に下着姿になれる。そう意識すると、顔を赤らめずにはいられなかった。

「本山さん？」

「ん？」

私たちは顔を見合わせたが、しかし、どちらからともなくさっさ

と目をそらした。

なんとなく気まずさだろう。前に会ったときも気まずさは感じたが、そのときは少し種類が違うような気がする。今回はその成分に、何か不穏なものが混じっている。

「一つ訊きたいんだけど、いい？」

「いいけど」

「本山さんってさ」少し間を置き、拓人は言った。

「ひょっとして、俺と別れたがってる？」

私はどきっとした。電話ではそのような気配は見られなかったが、やはり拓人も不審に思っていたのか。

それも無理はない。実際、私は拓人と別れるのを前提に、この三ヶ月を過ごしてきたのだろう。だが、言うまでもなく、今はそうじゃない。

「ううん」と私はかぶりを振った。

「そんなことないよ」

「じゃあ、なんで俺の誘いを断るんだよ」

私は押し黙っていた。「誘うのが遅過ぎなんだよ！」と反論してもよかったが、いかんせんこちらには彼への罪悪感があった。おっぱいの罪悪感が。

「正直に言ってほしいな。俺、ここ最近まともに眠ることだってできないんだ。どんだけ俺を悩ませれば気が済むんだよ」

だんだんと腹が立ってくる。私だって拓人にどれだけ悩まされたか。

「なあ、なんで黙ってるんだ？」

もう謝るのはやめた。おっぱいの罪悪感は、別の方法で晴らしてやる。

私は無言で立ち上がり、部屋の明かりを消した。拓人が「へ？」と素っ頓狂な声を上げる。

「ねえ、ベッドで横になってて」

「え？ だって……」

「早く！ 時間ないんだから」

拓人は渋々とベッドに上がった。落ちつきなく私に目配せをしながら、ゆっくりと身体を横たわらせる。

「あっち向いててね」

私は拓人に背を向け、増幅する呼吸を一旦整えてから、一気に浴衣を脱いだ。それから流れのような動作でブラジャーを外し、パンティも下ろす。これで、一糸まとわぬ姿である。

だいぶ汗をかいていたようだ。空気に晒された身体がひんやりとする。そして、なんだか不思議な感覚も覚える。熱いような、かゆいような。お風呂に入るときは何も感じないのに。

男の子の前で裸になるというのは、やっぱり特別なことなのだろう

う。もし拓人が私の言いつけを破ってこつちを向いていたらと考えると、顔から火をふいてしまいそうになる。

「ね、ねえ。本山さん、まさか、脱いでるの？」

「まただだよ」

「いや、俺、心の準備が……」

振り返って拓人を見た。彼は言いつけを守っていた。それどころか身体を丸めるようにして目をふさいでくれている。それでも私が何をやっているのかは、想像がつからしい。「泊まっていきなよ」なんて言ったのだから、当然か。

ただ、彼は少し誤解している。いくら私だって、今ここで無制限一本勝負を申し込む度胸なんてない。今日はあくまで練習試合なのだ。

窓の外から、断続的なノイズが聞こえてくるのに気がついた。いつの間にか、小雨が降りだしている。その雨音が妙に艶かしく感じられ、私は引き寄せられるように窓辺へ歩いた。庭に立つ木を雨が揺らすのを見て、雨が降るたびに今夜のことを思いだすのだろうなと思った。

そのとき、とんとんとドアがノックされる。私はびくつとその場で飛び上がった。

「もうすぐ十二時よ。早く帰しなさい」

「分かってるよ！　すぐ終わるから！」

私は素っ裸のまま、ベッドの上でぐしゃぐしゃになった夏用のかけ布団を手にとった。そしてそれをマントのように背中からかぶっ

て、拓人の隣に横になった。布団が私と拓人を、すっぽり覆い隠した。

拓人との距離は、わずか一センチ。もう、後戻りはできない距離だ。

「いいよ。こっち向いて」

「は、裸なの？」

「早く！」

拓人はようやく、こちらに身体を向き直した。彼は強張った表情で私をじっと見つめていた。口もとには、はにかむような笑みが浮かんでいる。恥ずかしいのはこっちである。

「いや、急にそんな……」

私は精一杯色っぽい表情をし、「好きにしていよいよ」と言っただけだった。

拓人は閉口し、一転して真剣な顔つきとなった。息づかいも荒くなっている。それに呼応するように、私の心拍数も上がる。二人の鼓動が、少し強くなった雨音に溶けた。

「じゃあ、抱きしめてもいい？」

おっぱいを触らせる気でいた私にしてみれば、拍子抜けするほどお安い御用だ。私は目をつむり、ずりつとベッドの上を前に移動した。拓人の身体と、ほとんど密着してしまっている。

「どうぞ」と口にしかけたが、私は躊躇する。だし抜けに気づいて

しまったからだ。

あれ、もしかして私って汗臭いんじゃないの？

くんくんと首筋あたりをかいてみる。やはり、少々すっぱい香りが。

「あ、やっぱり……」

拒もうとした矢先、拓人の右腕が背中に戻った。私は「うっ」と声をもらし、拓人の身体に吸い寄せられた。

「どうしたの？」

「いや……」

……な、なんだこれ。

すごく気持ちいい。拓人の口、ちょっと臭いけど。私も臭いかもしないけど。ひどく暑苦しいけど。おっぱいがぐにゅって潰れちゃってるけど。自分だけ裸で恥ずかしいけど。なんかもう、そんなのどうでもよくなってくる。

私は拓人にキスをした。拓人もキスを返してくれた。それから頬を寄せ合って、私たちは微笑んだ。途端に猛烈な睡魔が私を襲った。

ああ、気持ちいい。このまま眠ってしまいたい。

だがしかし、眠ってしまったらたいへんなことになるので、私は慌てて飛び起きた。再び拓人に目隠しを命じ、大急ぎで服を着る。ぱちんと明かりを点けると同時に、ドアがまたノックされた。

今度は私とともに、拓人も跳ねていた。

「秋実！ いい加減にしなさい！」

あわわ。お父さんである。

「はい、もう帰すよー」それから私は拓人に顔を向けた。

「続きはまた今度ね」

「うん」

拓人はぼりぼりと頭をかいた。

私たちはその後も、互いの家を持ち回って練習試合を重ねた。家族と同居していても、意外となんとかなるものである。

親が留守なときなど、真剣勝負に移行するチャンスは幾度かあったが、練習試合でもそれなりに満足していたので、多くは望まないでよい。ラブホテルは勝手が分からないので、利用する気になれなかったのだ。

一度、拓人のお母さんに見つかってしまったが、そのときのこととは三者とも蒸し返さないのが暗黙の了解なので、私も話さない。思いだすだけで記憶が暴れ回る。

結局、真剣勝負は高校卒業まで持ち越しであった。

真剣勝負の感想はまあ、えへへとだけ述べておこう。

第四章 抗争 (4)

【ON AIR】

はい。今、流れておりますのは、ジャニス・イアンの「十七歳の頃」だそうです。

ああ、寂しいなー。もうエンディングかー。

えー。バレンタイン企画の当選は、永川市のラジオネーム・てこたんくんでーす。私の手作りチョコレート送るから、楽しみにしててねー。14日当日に届くかどうか、分からないけどね。あはは。

あ、そうだそうだ。3日は節分でしたねー。日本人ならバレンタインより節分をとり上げなきゃ。みなさん、節分をエンジョイしましたかー。私もバイト先の店長に豆さんをごんがんぶつけてやりましたよー。ラジオが終わる腹いせだー！ えい！ えい！ って。あはは。

あのう、恵方巻って知ってますか？ ある方角に向かい太巻きを丸がじりして、そのまま食べけると今年一年ハッピーになるのだそうです。私も挑戦しましたよー。でもさー。今年は西南西に向かつて食べなきゃなんないんですけど、西南西っていったいどっちなのよ！ 風水も気にしたことないから分からんよ！ もう、適当にくるくる回りながら食べました。

……さて。

確認したところ、 ホツとスイーとタイム の放送はあと四回だ

そうです。なんか、切ないですねー。私がアシスタントやってた前身番組は十年も続いた長寿番組なんですけど、私がパーソナリティになった途端、終了してしまうとは。なんてお詫びすればいいか分かりません。

ええ、でも前向きにとらえましょう。これを転機にしくちやね。この番組とはお別れですが、リスナーのみなさんとは何かまた別な形でお会いしたいです。リスナーさんの中には夢を追っている人も多いでしょうし、お互いその夢を叶えてから再会したいですね。

夢？ 私の夢ってなんだろう。

高校時代は一瞬だけ教師に憧れたかな。でも、そのために何かしたっていうわけじゃないし。ADを始めた頃は先輩の真鍋さんみたいにぱりぱり仕事ができる人になりたいなって思った。ただ、それもまた然り。気がついたら出演者側になってたし。

アシスタント時代は私も一人立ちして、自分の番組持ったりしなくなってるってな。あれ？ じゃあ、叶ってるじゃん。あはは。

でも、叶ったのかな、これって。夢って空しいな。叶っちゃったら、そこで終わるか。

はいはいはい！ テンション上げていきましょう！ 私だっつーの！

最後に、お便りも読んじやおうかな。青鹿市、ラジオネーム・スーちゃん。

『 ホツとスイーとタイム の突然の終了、はっきりにってシヨッ

クです。特に アッキーの恋の軌跡 のコーナーは毎週楽しみにしていたので、とても残念です』

そうかー。ありがとうねー。

『私も今は高校二年生で、二年間つき合っている彼氏がいます。私はその子のことが大好きなのですが、お姉ちゃんは（高校生の恋なんて、ままごとみたいなもの。運命の人と出会うのは二十五を過ぎるから）だなんて言うんです。お姉ちゃんに（アッキーと彼氏さんのような関係の人たちだっている）って反論すると、（それは二人とも精神年齢が低いだけ）だなんて鼻で笑うのです。ひどいと思いませんか』

うっ、ひど過ぎる。

『私はアッキーたちをお手本に、絶対に幸せになってみせます！だからラジオが終わっても、引き続き彼氏さんと仲よくやってくださいね』

うーん、嬉しいねー。幸せになってほしいねー。

まあ二十五まで生きて、お姉ちゃんの言わんとすることも分からんでもないですよ。私も今まで何度も、「この人でよかつたのかな」って頭を悩ませてきましたもん。実は最近もそう。漠然とした不安というか、ラジオが終わるって聞かされてからは余計にそんな感情を抱くことが多くなってきました。

だけど、スーちゃんに励まされた。スーちゃんたちのためにも、彼と幸せにならなきゃいけませんね。よし、頑張ろう。

さて。

ラジオも残すところ、あと四回です。まあ、カウントダウンは始
まっちゃったけど、今までどおり楽しくやっていけたらいいね。

おっと、時間がない！ おやーすみー。さよーならー。

第四章 抗争 (5)

【OFF】

頬に冷たいものが当たっている。手を伸ばそうとした矢先、それは離れた。けれども、また触れる……離れた。そしてまた、ぴとつと。

いったい、なんなのだろう。勘弁してほしいものである。せつかく人が気持ちよく眠っているのだというのに。

「んん……んん？」

呻き声を上げながら、ゆっくりとまぶたを開いた。すると、間近に顔のドアップがあり、私は手足をばたばたと動かしながら飛び起きた。

「あはは、あはは！」

呆然とする私を指差して、馬鹿笑いする男。それは紛れもなく、十一年も私がおつき合いさせていただいている、拓人だった。冷たいものの正体は、彼の右手に握られたコーラの五百ミリペットボトルらしい。

冬の朝ならではの、凍えそうな寒さはない。暖房がつけられており、すでに部屋全体の空気が暖められているようだ。いったいどのぐらいのあいだ、拓人は私の寝顔を眺めていたのだろうか。

改めてベッドに腰かけ、仏頂面で私は訊ねる。

「どうしたの？ 今日はやけに早いじゃん」

「早い？ そうでもないけど？」

化粧台の脇に置いたデジタル時計をちらつと見る。午後一時前。ほ、本当だ。ラジオ終わりの日曜日とはいえ、大抵は午前中に目が覚めるのに。

「お疲れなんじゃないの？」

そう言いながら、拓人はペットボトルを枕もとの台に置いた。

「あ、ちょっと……あは」

拓人が私の後ろに回り込んで、肩をもみもみし始めた。つい一、二年前までは肩もみなんて痛いだけだと思っていただけ、最近はそのありがたみが分かるようになってきた。私も年をとったなあ。

「ああん、気持ちいい。うふふ」

「そついえば」拓人は奉仕を続けながら言った。

「俺がきたとき、着信鳴ってたみたいけど」

「え？」

部屋の隅の小さなデスクに、ケータイを置いていた。私はそちらを眺め、しばし逡巡する。

「どうせバイト先からでしょ。シフト交代してほしいとか。悪いけど、今日はパスだな。拓人もいるし」

私は立ち上がり、今度は拓人をベッドに座らせた。

「ありがとう。生き返ったよ。次は、私がマツサージする番」

「おお、それじゃあよろしく」

拓人が今の仕事を始めてから、本当に彼の身体はごつくなった。肩はかちんこちんで、私の握力じゃ手に余ってしまう。それでも一所懸命、私は肩をもんだ。

「俺ね。やっぱり、お酒やめることにした」

「そう。今、何日目」

「昨日宴会やったから、一日目かな」

「ふーん。上手くいくといいね」

抑揚の欠いた声でそれだけ言ったとき、不意にケータイの着信が鳴った。バイトのシフトの相談だと高をくくっているため、立ち上がる気にはなれない。

「けっこう粘るな」拓人が後ろを振り向いた。

「出るだけ出てみれば？」

「……………うん」

よいこらしよと腰を上げ、私はデスクのもとまで歩いた。発信相手を確認してみると、予想外にも野波さんであった。彼が電話をかけてくるのは珍しく、日曜日なら尚更だった。いったい、どうしたのだろう。

私は通話ボタンを押した。

「もしもし?」

「おお、やっと出たかあ。ひょっとして、昨日は朝まで彼氏と無制限一本勝負?」

なんとという……! なんとという……!

「ど、どうしたんですか?」

「いやねえ」野波さんの声は、心なしか弾んでいるようだった。

「今日は朗報をお伝えしようと思ってるねえ。実はあきちゃん、あきちゃんの新しいレギュラー番組が決まるかもしれないんだあ」

「え!?!」私は驚きの声を上げた。

「どういうことですか? 詳しく聞かせてください」

「平日帯でやってる 柿沼いさおのスーパー slowdown って知ってるかなあ。僕のやってる番組じゃないんだけど、あれが春からリニューアルすることになってねえ。若い女性アシスタントを一人入れるそうなの。それで、経験も豊富なあきちゃんを、僕が推しておいてやるのかなあと」

知っている。平日の午後に毎日三時間も生放送してはや二十年、うちの局の中でも看板といえるような番組だ。

「私なんか……大丈夫なんですかね」

「うん。パーソナリティの柿沼かきぬまさんは、アシスタント時代のあきちゃんを気に入ってるらしくて、『彼女さえ承諾してくれば、僕がかまわない』って言うってくれてるよお。あとはもう、あきちゃん次第かなあ。どう? 柿沼さんは上手くりードしてくれるだろうしい、

プロレス好きだから、あきちゃんとも話が合うと思うよお」

むむ。エレガントな私のイメージを保つために今まで内緒にしていたが、私は子供の頃から大のプロレスファンなのである。プロレスの話題が通じるのはお父さんだけしかいないので、それは非常にありがたい。

いや、そんな問題じゃない！ アシスタントに逆戻りとはいえ、帯番組のレギュラーなんて、たいへんありがたいお話ではないか。

「返事はすぐにもらいたいなあ。ディレクターさんも、候補を探し回ってるそうだから」

「あ、はい。もちろん……」

「引き受けます」と口にしかけて、私はとどまった。

本当にいいのだろうか。

三時間の帯番組となると、今までと違って拘束時間も半端ないだろう。それに、私にとっては新しい職場なのだから、プライベートなことにつつつを抜かしてはられない。だとしたら、結婚の話がまた先送りになってしまうのでは。

仕事は引き受けておいて、結婚は仕事が決まってからでも……

だが、落ちつくまでにいったい、どのぐらいの期間が必要となるのか。たとえ落ちついたとしても、スムーズに結婚の話へと移行するのだろうか。ああ、じれったい。結局、拓人がはっきりしてくれないのが悪いのだ。

拓人を盗み見ると、彼は煙草を片手に、ベッドに寝そべって漫画を読んでいた。

ようし。

今日こそ、はっきりさせよう。そう私は決心する。

「あのう」私は再び口を開いた。

「返事は、三十分後じゃ駄目でしょうか。はっきりさせたいことがあつて」

「三十分後？ うーん。まあ、そんならいなら」

通話をきくと、私は真剣な表情で、ベッドに歩み寄っていった。

さあ、馬場VS猪木に匹敵する、世紀の一戦が幕を上げるのだ。

第四章 抗争 (6)

「ん？」電話が済んだのに気がついたらしく、拓人は漫画を置いて上半身を起こした。

「どうしたの？ 新しい仕事が決まったんじゃないの？ その割にはやけに……不機嫌そうだね」

私は返事をせず、拓人の隣に腰を下ろした。

「秋実？」

「仕事、決まるかもしれない」私は素っ気なく言った。

「柿沼いさおのスーパースロウライフ。けっこう有名な番組で、その番組のアシスタントとして私を推薦してくれるんだって」

「おお！ 知ってる、知ってる！」拓人はぼんと手を叩いた。

「職場で、部長がよく聞いてるよ。へー、あれに秋実が出るのか！。すごいじゃん」

「うん、まあそれは光栄なんだけどね」

「ん？」

私は真っ直ぐに拓人を見つめた。拓人も不思議そうに私を見つめている。そのまま、しばしのときが流れる。

私の言わんとすることを読みとってほしい。私から言わせないでほしい。いつだってそうじゃないか。いつも私ばかり。確かに、昔は男勝りな性格だったけど、本当は誰よりも女々しい奴なんだ、私は。

優しい拓人は好きだけど、罰ゲームでの私の告白を受けたときみたいに、堂々とした拓人をもう一度見てみたい。

先に目をそらしたのは、やはり拓人だった。彼は茶化すように笑いながらこう言った。

「引き受ければいいじゃん。別に問題はないでしょ」

「引き受けるよ。引き受けるけど……」私は溜息をつきかけるが、そこをぐつとこらえて続けた。

「新しい仕事のオファーが、もしこなかったとしたらどうするの。私、ただのフリーターに逆戻りだよ」

「なかつたらって……あるんだし」

拓人は頭をぽりぽりとかきながら、言葉を濁した。その態度に、いよいよ私はしびれをきらす。

「拓人。私たちの将来について、どう考えてるの？」

「将来について？」

拓人はごくりとつばを呑み込んだ。彼しか使わない灰皿に、ちよんちよんと煙草の灰を落とす。かと思いきや、そのまま火を揉み消すのだった。

「そう」と頷くはいいが、私は早くも前言撤回したくなっていた。

言ってしまった。ついに口にだしてしまった。もう二度と今までの関係には戻れないかもしれないのに。

あまりの恐怖に、泣きだしそうになってしまう。自分で訊ねておいて、拓人の返答を聞くのが怖くて仕方がない。

もう、最後まで言ってしまうのか。プロポーズまでしてしまったほうが、あれこれと悩まなくて済むような気がするし、恐怖心も紛れるような気がする。

「えーい、やけくそだ！」

「ねえ、拓人。私と……」

「ちよつと待った！」

私はびたつと言葉をとめた。目を丸めて拓人を見ると、彼は私に手の平を向けていた。

「は、はい？」

「一つだけ言っておく」体勢を変えずに、拓人は続ける。

「新しい仕事、引き受けてくれ。俺たちの将来については、そのあとでゆつくり話そう」

「は？」私は眉をひそめた。

「あ、あとでって……帯番組の仕事が始まっちゃったら、ゆつくりできないし」

「でも、待って」有無を言わさぬ拓人の口調。顔も真剣そのものだ。「そういう話は、まだできない。ちよつと事情があつてさ」

私は、ウエスタナリアットをもろに食らったかのような、重く深いショックを覚えた。

事情！？ 事情って何よ！

嘘だ。そんなの嘘に決まってる。拓人は、私たちのこれからについて、これっぽっちも考えていない。今までと同じなんだ。ああだこうだとはぐらかして、問題を先送りにしただけなんだ。

「秋実？」

不安げな拓人の呼びかけを無視し、私はケータイの画面を開いた。

「ああ、あきちゃん。意外と早かったねえ」

「お手数かけました。あのう、お仕事、是非やらせてください」

「うん、分かったあ。ところで……」野波さんは少しだけ言いよどんだ。

「なんかあきちゃん、えらく鼻声になってるけど、風邪でも引いた？」

ああ、またしても泣いてしまっている。

第四章 抗争 完

第五章 最終回 (1)

【アッキーの恋の軌跡】

花火大会の日の、甘い夜の件まで話し終えて、私は重大な事実に気がついた。

もう、特に話すことがないのだ。

なんとという薄っぺらさだろう。小学校時代は拓人との絡みがまったくないので、話す価値のあるエピソードは中高時代のせいぜい三年間に集約されている。十一分の三である。

その話すべきエピソードとやらも、私としてはそれなりにドラマチックではあるが、聞いている人にとってはどうなのだろう。普通の恋人同士なら普通に経験する普通のエピソードを、面白可笑しく語っているだけである。

こうなったら、エロに頼るしかない。たとえ普通の話でも、それがエロいなら話は別だ。男の子も女の子も、みんなみんなエロを欲しているのだ。よし、私と拓人の熱い夜ベスト5をやろう。そうしよう。

なんて考えていた矢先に、野波さんが突拍子もない要求をしてきたのだった。

これからはエロを控えて、最終回までプラトニックなエピソードのみを話してくれ

いやいやいや！ ラジオはあと四回もあるのに、話すほどのエピソードはもうございませぬ！

それでも、野波さんは折れない。短くてもいいから、かいつまんでもいいからと、妙に切羽詰った態度で押してくる。

「短くてもいいなら」と、私は野波さんの要求を飲むことにした。

実は少しホツとしている。エッチなエピソードを公共の電波に垂れ流すのは、正直言って恥ずかしくもあったのだ。だってお父さんとお母さんもきつと毎週聞いているだろうし……聞くなどは言っているんだけども。

というわけで、アッキーの恋の軌跡のコーナーの残り四回は、プラトニックな単発エピソードでお茶を濁すこととなった。ただ、なんとなく思いついたことを話すのも芸がないので、リスナーの質問に答える形にした。

リスナーから寄せられた質問は多種多様であったが、その中で、これはプラトニックだし話しておいたほうがいいかなというものを見つけた。思いつ話に登場する私たちは、いつまで名前を名字で呼び合うのかというもの。

ふむふむ。リスナーは知らないが、現在はそれぞれ 拓人、秋実 と名前を、しかも呼び捨てで呼んでいる。そうなった経緯といえるエピソードが、高校二年の冬にあった。

その日は繁華街でデートを楽しんでいた。とあるケーキ屋さんに

入り、窓際の席をゲットした私たちは、あたり一面を真っ白に染めた雪景色を眺め、各々綺麗ごとを並べ立てていた。雪なんて見慣れているが、恋人同士で味わう雪は普段とは違う顔を見せるのだ。

「はー、雪っていいよね」

頬づえをつきながら、私はうつとりと目をすぼめた。

「そう？ 俺はうつとうしいから嫌だな。本山さんだって、さっきは寒いだの冷たいだの言ってたじゃん」

「あれは外だったから……」

訂正しよう。恋人同士で且つ、屋内で見るのが条件である。

「でも、冬って好きだな」私はくじけない。

「冬って恋人の季節だと思わない？ だってクリスマスとかバレンタインとか、そういうイベントが冬に集中してるじゃん」

「夏はくつつくと暑苦しいもんね」

「また、ロマンのないことを言う」

しばしの沈黙のあと、拓人がコーヒーを一口飲んでから口を開いた。

「冬がくると、なんとなくーく寂しくならない？」

「ん？ まあ」

「秋が終わっちゃったなーって思う。俺たちにとっての恋人の季節は、秋みたいなもんだから」

「秋？」

そうだったか。私たちがつき合い始めたのは夏、ファーストキス

は冬、練習試合は夏、真剣勝負は春……秋がさっぱり見当たらない。何か見落としているのだろうか。

拓人はぼりぼりと頭をかいていた。見ていてとても寒そうな坊主頭を、彼は冬でも帽子などで隠したりはしない。私が坊主を褒めてあげたのを、今も覚えてくれていたのかもしれない。

やがて、拓人は口を開いた。

「だって、本山さんの名前、秋実でしょ？ 本山さんとつき合い始めてから、秋がなんとなく特別な季節に思えてきたんだ」

「ああ、なるほど」

意外な見解である。私自身、秋に特別な想いを馳せていたのはせいぜい小学校低学年までで、それからはほとんど意識したこともなかった。ご想像どおり誕生日が秋なので、誕生日プレゼントに対するわくわく感を抱いたりはするのだが。

「新藤くんの名前って、なんて言うんだっけ？」

「拓人」

もちろん知っているのだが、私にはある考えがあった。

「拓人……拓人か」私はうんうんと何度も頷いた。

「また忘れちゃわないように、今度からは名前で呼ぼうかな」

「名前です？ 別にいいけど」拓人は、呼称などあまり興味がなさそうなようすである。しかし、いざ名前で呼んでみると。

「拓人」

「……あはは」

彼は照れくさそうに、また頭をかくのであった。

「たーくっひと」

「あはは」

「えへへ」

作戦成功！ 実を言うと、恵那ちゃんや周りの友達が彼氏を名前で呼んでいるのに、ものすごく憧れていたのだ。彼女たちの前では、私も拓人を名前で呼んでいたのは言うまでもない。

「じゃあ、俺も」と拓人はいたずらっぽいな笑みを浮かべた。

「秋実」

「え？ ……えへへ」

「あーきーみ」

「えへ、えへへへへ」

こうして私たちは、名前で呼び合う仲となった。

むむ、終わってしまったではないか。いざ話してみると、なんて普通なお話なのだろう。

ああ、薄っぺらい、薄っぺらい。こんな薄っぺらい恋人同士なら、破局のときも何気なく訪れてしまうのだろう。

と、そんなふうには達観しつつも、この話をしている途中、私は何

度も涙ぐんでしまい、ヘッドフォン越しに野波さんから注意されてしまった。ああ、こんなに仲がよかった時代もあったなああって考えると、どうしようもなく泣けてくる。

なぜなら、その何気ない破局の危機に、実際に直面してしまっているからである。

新レギュラー番組が決まったあの日、野波さんとの電話を終えてから、私はすぐに拓人を帰らせた。彼は何かを言いたげにしていたが、結局は私の言葉に従った。

驚きなのは、それ以来、拓人が何もアクションを起こさないということだ。言い訳なりなんなりをメールや電話でまくし立ててくるほうが、よっぽどオツズが高かったので、私は狼狽を通り越して激しく焦燥した。

どうしよう。このままでは、本気で別れることになってしまふ。別れるぐらいなら、結婚なんてできなくてもかまわないのに。

こうなったら、こちらから謝るか。いや、それだと結局いつものパターンだ。何も進展しない。いやいや！ もう進展しなくてもいいからもとの鞘に納まりたい。ああ、でも。

なんて状況なのだから、残り三回の生放送中も、野波さんに再三に渡って注意されてしまうだろう。番組終了前に破局が訪れてしまう可能性も、ないとはいえない。

最後に、世の女性たちに忠告しておこう。

逆プロポーズだけは、絶対にしちゃ駄目だ。

第五章 最終回 (2)

【OFF】

二月も下旬となった。その日は、四日ぶりのカラオケボックスのバイトだった。

金曜日だったので、少々憂鬱である。土曜と並んで最も忙しい曜日なのだ。

「あれ？」

開店前に出勤してきたとき、店長の直くんが不在だったので、私のははてと首を傾げた。

直くんは、基本的に毎週月曜日に休みをとっている。少なくとも金、土に休んだことは、今までに一度もなかった。

「直くん、休み？」

「伯父さんの通夜だそうです」のんちゃんが答えた。

「もうちよっと日を選んでくれないかなー。ただでなくとも人手が足りないのに」

「まあ、そりゃ、仕方ないね。暇な日に亡くなってくださいとは言えないし」

「うー」

のんちゃんはバックルームのパソコンを操作していた。肩口から覗き込むと、モニターにはアルバイトのシフト表が表示してあった。

「のんちゃん、パスワード教えてもらったの？」

パソコンを扱えるのは、直くと私だけだった。それはパスワードを知っているのは、とほぼ同義である。直くんが休みの日は、私が代わりに店長業務を行うわけだ。

「パスワードだけじゃありませんよ」のんちゃんはぶすつとふて腐れた表情を浮かべる。

「金庫の暗証番号も教えてもらいました。これ、見てください」

彼女がかかげて見せたのは、直くんがいつも首からさげている鍵束だった。これまた、直くんがいないときは私がさげている。

「あ、あはは」私は苦笑した。

「なんかごめんね。私がいなくなるばかりに」

「いや、アッキーさんを恨んでいるわけではなくて、なんで私なのかなど。他にもしつかりしてそうな子はたくさんいるのに」

私が三月いっぱい退職するという話は、すでに通知済みだった。今までは私が担っていた直くん不在時の管理業務を、これからはのんちゃんが引き継ぐこととなったらしい。たくさんいるアルバイトの中からなぜ自分が選ばれたのか、というのんちゃんの疑問の答えについては、説明するに及ばないだろう。

「ありゃー。のんちゃんつてば、テンチョーでも目指してんの？」
茶化すように言ったのは、みっちゃんだ。相変わらず化粧がきつい。

「やだよ」のんちゃんは吐き捨てた。

「雇われ店長になるなんて、人生捨てたようなもんじゃ。店長の給料知ってる？ あんなに働いてるのに、手どり二十万ももらえないんだって」

「のんちゃん、怒ってるー」みつちゃんはコンパクトを開きながら、無邪気に笑った。

「冗談に決まってんじゃない！ テンチヨーみたいになるぐらいなら、どっかで野垂れ死んだほうがマシじゃない？」

うら若き少女たちの会話を、私はぼうつと立ち尽くして聞いていた。

直くん、尊敬されていないな……。のんちゃんの言葉聞かせたら、ショックで寝込んだじゃうだろうな！。

そんな私はというと、直くんの働きぶりにいつも感服している。一日十時間以上、週六日も働けなど言われても、私には到底無理である。おまけに、雇われ店長だけに上からも下からも圧力をかけられるので、心労も計り知れないものがあるはずだ。

直くんを尊敬の対象として見られる私と、そうでないのんちゃんたちとの違いはなんなのか。

のんちゃんたちの言い分も、分からないではない。むしろ、のんちゃんたちのほうが大人のような気がする。うーん、なぜ？ 私のほうが五つも年上なのに。

まさか、恋愛経験の差？

だとすると、恋愛というものも、あまりよいものじゃないのかもしれない。

開店から一時間ほどが経過し、すでに部屋が埋まってしまった。

夕食どきなので、料理の注文も多い。私たちは冷凍食品をレンジでチンしては、部屋へ運び入れる作業に追われた。バイト全員、フル稼働である。同時に四部屋から注文があったときは、もう駄目だと本気でくじけかけたが、それでもなんとか耐えてしまっるのが人間の神秘だ。

午後九時を超える頃には、一旦ピークが過ぎる。部屋は今までどおり満席だが、注文がぐつと少なくなるので助かる。私はのんちゃん二人で三十分の休憩をもらった。

「ねえ、暑くない？ 冷房つけようかな」

「アッキーさん、すごく動いてましたもんね」

「ブラジャー外しちゃおうかな」

「あはは……」

私は団扇で顔を扇ぎ続けていた。冬だというのに汗だくだ。

「はあ……」のんちゃんがパソコンのマウスを操り、モニターのスクリーンセーバーを解除した。

「今のうちに、続きやっところ」

さっきはああ言っていたものの、のんちゃんがパソコンを操る姿はさまになっている。というより、休憩中に管理業務を行うとは感心である。むむ、やっぱり大人だ。

「のんちゃん、のんちゃん」

私はのんちゃんの前顔に話しかけた。

「はい？」

直くんへの苛立ちが再燃したか、のんちゃんは不機嫌そうな反応を見せる。先輩に対してその態度はなんだー！ とモンゴリアンチヨップを繰りだそうとした矢先、のんちゃんは「あわわ」と首を横に振った。

「し、失礼しました。どうしたんですか？ アッキーさん」

「んーとねー」私は意味もなく眼鏡のブリッジを人差し指でつついた。

「のんちゃん、たまには ホツとスイーとタイム 聞いてくれる？」

「ああ」のんちゃんはにんまりと笑った。

「もちろんです。毎週楽しみに聞いていますよ。終わっちゃうの、残念ですよねー」

「あ、ありがとう」彼女を抱きしめたいという衝動を抑えつつ、私は続けた。

「でさ。ラジオでいつも話してる私の彼氏についてなんだけどね」

「はいはい」

のんちゃんは目を輝かせているようだ。他人の恋愛沙汰に興味を覚えるのは、みな同じである。

「もしかすると、その彼氏と別れるかもしれないんだよね」

「え？」のんちゃんはぎょっと目を見開いた。

「マ、マジですか。あんなに仲よさそうなのに……原因はなんなのでしょう」

「結婚について……」

のんちゃんの顔つきが、より一層生き生きとするのだった。

拓人と連絡をとり合わなくなって、二週間以上が経過している。もう私はほとんど破局したものだとして受けとめてしまっている。

もちろん、今でも拓人のことが好きだ。だけど、彼が連絡を寄越してこないのは、彼のほうは私に愛想を尽かしているからだと考えて間違いないだろう。それならば、私は彼に何も言えない。何も与えられないのだ。

今になって疑問に思うが、拓人はなぜ私のことが好きなのだろうか。その理由については、今まで一度も聞かされていないような気がする。私と十一年間もつき合い続けることに、なんのメリットがあった？ 私がたいした奴じゃないというのは、私が一番よく分かっている。

………

また悩める材料を増やしてしまった。ああ、頭が痛い。

「うーん」話を聞き終えたのんちゃんは、悩ましげに眉間のあたりを指で押さえ、唸った。

「ラジオが原因なのでしょいか」

「それもあるかも……」

そう答えつつも、それだけじゃないだろうという見解であった。

「どっちにしてもひどいですよ」のんちゃんは口を尖らせた。

「別れたいなら別れたいって、直接アッキーさんに言わなきゃ。逃げ回って自然消滅を狙うなんて、男として最低です」

「でも、私も連絡をとろうとはしてないから」

「それは当然です！」のんちゃんは飲みかけのオレンジジュースを、ぐびっと仰いだ。

「女の子にそんなことができるわけじゃないですか！ もう、信じられません！ アッキーさん、その人とはもう、こっちから別れてやるべきですよ！」

拓人を悪く言われるのは正直気持ちのよいものではないが、相談に乗ってもらっている手前、文句は言えない。

「そ、そうだよね」

「さあ、今ここでメールしてやりましょうー！」

「え！？」

私は目を見開いてのんちゃんを見た。彼女の表情は真剣そのものだ。

「メールって……もう別れようって?」

「はい!」

のんちゃんは大きく頷いた。

「……………」

どうしよう。まさかそんな展開になるとは。

「さあ、早く清算して新しい恋に向けて走りだしましょうよ」

新しい恋。

素敵な響きだ。普通の女の子だったら誰でも、新しい恋に向けて走りだしたことがあるのだろうな。

この一瞬だけ、恐怖とか悲哀よりも、新しい恋への憧れのほうが先行してしまった。

そして、私はケータイを手にとった。

このままじゃ、お互い前に進めないから、別れるならちゃんと別れよう

文字を打ち込み終え、あとは送信するだけとなった。隣では、のんちゃんが私の一挙手一投足を、固唾を吞んで見守っていた。

新しい恋……さあ！ 新しい恋に走りだすんだ！

「……………」

「あの……」のんちゃんは心配そうに眉を寄せ、私の顔を覗き込んだ。

「大丈夫ですか。アッキーさん？」

「う、うん」

えぐえぐと嗚咽を漏らしながら、私はなんとか頷いた。

ああ、可愛い後輩の前で、また泣いてしまった。指が震えて、どうしても送信ボタンを押すことができないのだ。

逃げ回っているのは、私なのだろうか。

第五章 最終回 (3)

【アッキーの恋の軌跡】

拓人と別れてしまいそうだという話を、いよいよ野波さんたちスタッフに打ち明けてみた。みんなうるたえていたが、それでもリスターには内緒にしておこうと口々に言った。

投げやり過ぎると思う。 ホツとスイーとタイム が終わっても、私には春からの新レギュラー番組がある。さすがにそのときには明かさねばならないだろうに。

それでも、私は了承した。 ことを荒げて、スポンサーさまの怒りを買うわけにもいかない。

三月に突入し、放送も残り二回となった。今夜もまるで現実逃避するかのように、ラブラブだった頃の、拓人とのプラトニックエピソードを語るぞー！ おー！

今回のテーマはプレゼントである。

うん。 恋人関係の潤滑には、やはりプレゼントがつき物だ。 私たちも高校卒業以来、誕生日プレゼントのみは毎年交換している。お互い財政難なので、一万円以内を相場にしようとり決めているが、拓人は守ったためしがない。

なんてたちの悪さだ。 拓人が守らないなら、こっちまで守っちゃいけないんじゃないか！ よって、結局二人とも、一万円以上の品を贈っている。

拓人のプレゼントは、実用的なものばかりである。自転車とか、財布とか、食べものとか。たまには、お洒落なガラス細工でももらってみたい。それをドラマの主人公みたいにうっとり眺めて、「拓人……」と名を呟くのだ。

去年は、私が数年前から欲しがっていたニンテンドーDSをもらった。つまようじみたいな棒で画面をつんつんしながら、「拓人……」と呟いたりはしない。まあ、楽しいからよいのだが。

私のほうは、主に衣服をあげている。拓人の誕生日は十一月なので、どうしても冬ものばかりとなってしまうのが気に入らぬも、彼は毎年私の贈った服を律儀に着てくれるため、贈り甲斐はある。

そんな誕生日プレゼントにまつわるエピソードを一つ。

当時私は大学生で、ADのバイトを始めて間もない頃だった。一方の拓人は、高卒で今の会社に就職したため、私からするとちょっとした金持ちだった。

九月の、私の誕生日の日。その日は二人とも予定を空けており、拓人は朝から私のマンションに押しかけてきた。

「ハッピーバースデー」

「ありがとう」

ぽっと頬を赤らめそう答えながら、私はおや？ と首を傾げた。拓人がまったくの手ぶらだったからだ。

しかし、「プレゼントはどうしたの？」などと訊けるはずもなく、とりあえずは言及せずに拓人を部屋へ通した。

「一人暮らしっていいなー。俺もやってみたいなー」

「拓人もやればいいじゃん」

「職場が近過ぎるからなー。実家暮らしは楽だからなー」

「じゃあ、やらなきゃいいじゃん」

ソファに座って内容のない会話をしながら、私は考えていた。

なぜ手ぶらなのだろう。プレゼントを忘れていたのだろうか。それとも今年はプレゼントを買うお金がなく、その旨を私に伝えかねているのだろうか。どちらにしても気になるので、さっさと真相を語ってほしい。

は、まさか！

麗しき光り物の類ではなかるうか。それならポケットにでも忍ばせておける。

私は自分の指先を見つめた。二千円で購入したファッションリングが鈍く光り輝いている。

どきどきと胸を高鳴らせる。九月の誕生石はサファイアである。そんなもの、見たことも触ったこともないぞ。

だが、サファイアに対する期待は、それを軽く凌駕する恐怖にかき消されてしまう。

サファイアとはいっただい、いくらぐらいするのだろう。そんなものをもらって、本当に大丈夫なのだろうか。

「ん？ どうしたの？ 顔色が悪いよ、秋実」

「え？」私ははっと我に帰った。それから、ぶるぶるとかぶりを振る。

「な、なんでもない。ちょっと昨日の心霊番組を思いだしちゃって」

「なんで今、そんなの思いだすの？」

拓人は無邪気に笑った。そんな彼に、私は怪訝なまなざしをぶつけた。

うーむ。なんだというのだ。見たところ、お金がなくてプレゼントを買えなかったという線は薄そうである。表情に陰りがなさ過ぎる。やはりプレゼントはサファイアで、それをだし惜しみしているのか。

テレビをつけ、私たちは偶然やっていたドラマの再放送に見入っていた。

誕生日だからといって、特別な話題があるわけでもない。実は二日前にデートしたばかりでもあるのだ。思えば、そのときもプレゼントの話題をだしてこなかったので、おかしいなとは感じていた。

「拓人……」

私は身体をすり寄せて、拓人に甘えてみた。ひよっとしたら、私が催促するのを待っているのかもしれないと思ったからだ。プレゼ

ントを催促しているというよりは、早く真実を突きとめてすつきりしたかった。

「どうしたの？」

「ん？ 別に……」

そう答えながらも、上目づかいで拓人を見つめてみる。くーんくーんと物欲しげな鳴き声まで発していたかもしれない。

「秋実つてば、仕方ないなー」

拓人は私の目尻にキスをした。

「いやん……いやいやいや！ そうじゃなくて！」

これ以上の催促は私の美学に反するため、あきらめてテレビに目を向けた。

私が小学生の頃にやっていた例愛もののドラマだ。トレンディドラマって奴か。今も活躍している俳優の若い頃の姿にあれこれといちゃもんをつけているうちに、プレゼントのことも忘れてしまった。

十時を回った頃から、拓人がちらちらと時計を気にするようになった。どうしたのだろうとそちらに気をとられ始めた矢先、玄関のチャイムが鳴った。

「はい」

拓人に断りを入れて、来客を出迎えにいった。そして玄関のドアを開けた瞬間、私は予想外な光景に目を丸くした。

玄関先には作業着らしき服を着た男性が三人おり、彼らは大きなダンボールの箱を囲んでいた。

「どうもー、山上急便です。本山秋実さまでしょうか」

「は、はい……」

「ビックリ電気さまより、お届けものでーす。受領印をいただいてもよろしいでしょうか」

私はようやく、この事態の意味に気がついた。同時に後ろを振り向いてみる。

そこに、得意気な顔をした拓人が立っていた。

「な、なんなの？ これ」

「プレゼントだよ」拓人は言った。

「前に秋実、言ってたじゃん。ずっと使ってたラジカセが壊れたって」

「ラジカセ……」

私はダンボール箱をまじまじと眺めてみた。それは大型のブラウン管テレビでも入っていきそうな大きさであった。

「せっかくだから、コンポにしたんだよ」

拓人のその言葉に、私は改めて彼とダンボール箱とを見比べるのであった。

リビングにコンポを運び入れてから、宅配業者の方々は引き払っていった。ダンボールを開ける気にもなれず、私はその前にじつと

立ち尽くしていた。

コンポはかなり高性能なもので、ラジオも聞ければ、CD、カセット、MD、おまけにレコードまで再生可能であり、おまけに音質も素晴らしいのだという。

「これ、いくらぐらいしたの？」

私はつい気になっていたことを訊ねてしまった。これが拓人のプレゼントだと直感したときから、実はそのことばかり考えている。

「ちょっとばかり、奮発したよ。んーとね……八万ぐらい」

「八万!?」私は両手で頭を抱えんばかりの衝撃を受けた。

「い、いらぬいよ! 絶対にもらえない! 八万なんて私、そんなお金持ってないもん!」

「いや、別に俺の誕生日に返してくれって言っているわけじゃないし……」

「無理! 絶対無理!」

ここは素直に受けとっておくべきなのは分かっている。実際、コンポをもらえるのはすごく嬉しい。だが、私はどうしても譲れなかった。もしかしたら、少しだけサファイアへの未練があつたのかもしれない。こんなもの買うお金があるのなら、サファイアをくれよと。

あまりに私が拒絶するので、いつしか拓人も機嫌が悪くなり、最終的には彼がコンポを引きとると言いだした。

拓人の会社のトラックがあつたので運ぶのは楽だったし、数日後には、あまりに気に入ったのか彼の機嫌も直つたので、一応はことなきをえた。

ただ、私はけっこう長いあいだ塞ぎ込んでしまった。毎日のように、例の頭痛に襲われていた。そうならないためには、やっぱりあのとき受けとっておかなくてはならなかったのである。そして必死に貯金して、相応のものを拓人の誕生日に返す他なかったのだ。

男女関係とは、なんて不条理なのだろう。他の恋人たちはどうやって乗りきっているのか。

今ではそのときのことを思いだしても、あまり胸が痛まなくなつた。なぜなら、拓人はあのコンポでこの番組を聞いているそうだからだ。

拓人が私にプレゼントしようとしてくれたコンポから、私の生の声をプレゼント。うーん、こじつけ臭いが素敵な話じゃないか。

ただし、今夜も拓人があのコンポでこの番組を聞いてくれているのかどうかは、定かでないが。

第五章 最終回 (4)

【ON AIR】

いよいよ最終回でございます。このオープニングテーマも今夜が聞き収めというわけですね。

いやー。いざそのときがくると、やっぱり寂しいねー。私は春からお昼の番組へ移るので、これでお別れってわけじゃないけど、お昼と深夜じゃちょっと違うよね。

まあでも、しみりした空気じゃやっていけないから、最後のホツとスイーとタイム、元気に張りきって参りましょう。

オープニングコーナーでは、リスナーからのお便りを紹介していきます。先日募集しておいたホツとスイーとタイムへの思い、たくさん届いていますよー。

まずは葉丘市のラジオネーム、ばるたんさん。おお、すごい！五十四歳男性のお方です。

「ホツとスイーとタイム、毎週楽しみに拝聴させていただきました。このたびは活躍しく放送終了が決定してしまい、まことに残念で致し方ありません。

アッキーさんの明るい声には、いつも励まされました。あと少しでその声が聞けなくなるのかと落ち込んでいましたが、なんと柿沼いさおのスーパーサロウライフにアシスタントとして出演することになったそうで。それは私にとっても、たいへん喜ばしいニコ

ースであります』

はい、ありがとうございますー。

『 ホツとスイーとタイム の思い出については、特に アッキーの恋の軌跡 のコーナーが印象深かったです。多感な時期のアッキーさんの心情がまざまざと伝わってきて、若かりし日の自分と重ね合わせて聞いておりました』

そ、そうなんですか。世代も性別も違いますけど、伝わってくれたようで嬉しいですー。

『 かの男性とは、今もおつき合っているのだとか。アッキーさんと彼が幸せになれますように、私も祈っております。長くなりましたが、一年間お疲れさまでした』

ありがとうございます。

ばるたんさんは 柿沼いさおのスーパー slowdown のリスナーさんでもあるみたいですよ。さようなら、そしてこれからもよろしくお願いします。

続いて前の番組からずっと聞いてくれているという、石鯛市のジヨナサンさん。『 志望大学受かりましたー！』と書いてあります。おめでとーうございませー。

『 アッキー、一年間お疲れさまー！』

ありがとねー。

『最初はうちのクラスで ホツとスイーとタイム を聞いている子が全然いなくて寂しかったけど、必死に宣伝したから今ではクラスの女子のほとんどの子が聞いているよ』

おー。それはそれは。なんてお礼を言えばいいか分からないねー。

『部活の後輩の男の子でショウくんっているんだけど、実は今、その子といい感じになってるんだ。仲よくなったきっかけは、その子がプロレス好きだったこと。始めは私も興味なかったけど、アッキーのおかげでプロレスに詳しくなったんだよー。』

だから好きなコーナーは 今週のベストバウト 。もちろん、アッキーの恋の軌跡 も大好き！ 私もその子と仲よくなるから、アッキーも彼氏さんとずっと仲よくなね！』

ありがとうございますー。またね、ジョナサン。

はあ。

いやー、お便りを読んでいると、どうしてもしんみりしちゃうよねー。寂しいのはたしかだもんねー。でも、テンション上げなきゃ駄目だよ！ 番組はまだ始まったばかりだー。

お便り紹介の続きは、エンディングでやります。そのときは泣いちゃうかもしれないけど、許してね。では曲を挟みまして、まずは最後の 今週のベストバウト 試してみましょー。

アッキーの恋の軌跡 ！

はい。時刻は深夜零時半になるうとしております。いやー、このエロいタイトルコールも、もう聞けないんだなー。

さて、ホツとスイーとタイムのトリを飾るコーナーは、やっぱりこのコーナーです。

CM前にお伝えしたように、今回は最終回ということで、特別企画を用意してあります。いよいよその全貌を明かしちゃいましょう。ふっふっふ、みんなびっくりするぞー。

な、な、なんと！今までこのコーナーで私が話した恋愛体験を、プロの声優さんがラジオドラマで再現して。

……はい？

え？ どういうことですか？ 違う？ 何が？

企画を変更して……電話が繋がっている？ え！？ ちょっとどういうことですか、野波さん？

あ、すみません。私はプロの声優さんが、私の恋愛体験をラジオドラマで再現してくれるって聞いていたんですけど、なんか手違いがあったみたいです。電話？ 電話が繋がっているそうです。

……これってさあ、ドッキリかなんかですよ。そういうの、先に言っておいてほしいなー。言っちゃったら、ドッキリにならないんだろっけどぞ。

電話？ 誰だろう。もちろん、私に関係ある人だよ。まさか…

…それはないか。

と、とりあえず、相手を呼んでみましょう。

えーっと、もしもし？

「もしもし？」

……………

「もしもし？ 秋実？」

な、何やってんの？

ち、ちよつと野波さん！？ なんなんですか、これ！ ちよつと、笑ってないで教えてくださいよ！ どうすればいいか、分かんないですよ！

「まあまあ、秋実。ちよつと落ちついて」

落ちつけるわけないじゃん！

「最終回に電話で出演してほしいっていう話をね、あらかじめ野波さんからいただいていたんだ。 ホツとスイーとタイム の放送終了が決定した頃かな。俺も少し悩んだけど、いい機会だから了承することにした」

さっぱり意味が分からない。

「秋実は俺に対して怒っているだろうけど、まあ、とりあえず理由

を聞いてほしいな。あのとき俺が話をはぐらかしたのは、要するに今日のためなんだよ。野波さんにも相談したけど、やっぱり今日までは我慢しようって話になって」

.....

「詳しくは話さないけど、察してくれよ。俺の言ってること、分かるよね」

.....そんなのさ、駄目じゃん。私、本気で別れたものだと思うってたよ。っていうか、たとえラジオのためだとしても、それで本当に関係がこじれちゃったらどうするの？ とり返しのつかないことになったら。。。

「野波さんと二人で、必死に秋実を説得するつもりだった。大丈夫、秋実は聞き分けのいい子だから」

私の何が分かるっての！

「分かるよ。十一年も一緒なんだから」

.....

ち、ちよつと。リスナーのみなさんは何が起きているのか分からないだろうから、先に説明しておきます。えーっと、電話の相手はお馴染みの私の彼氏であり、彼が何か私に言いたいことがあるのだそうです。

「先月喧嘩をして、別れる寸前でした」

黙ってて！

い、言いたいことってなんなんでしょうね。なんとなく想像はつくけど、それはまだちょっと分からないというか……現実味がないというか。

「いい？」

……うん。

「あはは。もう泣いてるじゃん」

別に！ 安心したってただだよ。いいから、さっさと言えば？

「えーつとね、まずは先に謝らなきゃ。長らくお待たせして、本当にごめん。しっかりと貯金して、十分に費用が整ってからって考えてたんだ。まあ、結局整ってないわけだけど」

費用なんて、必要ないと思う。

「でも、一応指輪だけは用意したよ。なかなか奮発した。サファイアだからね」

サ、サ、サファ……！

「禁酒した甲斐があった。式とか挙げるには、まだ不十分だけど、工面すればなんとかかなると思うし……」

い、いいよ。式なんて。

「秋実がよくても、俺はやりたいの。悪いけど、ここは従ってもら
う。じゃあ、本題だ。うーん、何か特別な言葉を用意しようと思っ
てずっと考えてたんだけど、何も思いつかなかったんだ。自分で言
うのもなんだけど、きざな台詞は俺に似合わないような気がするし」

うん、似合わない。

「俺と結婚してください」

……

本当にそれだけ？　あまりにも飾り気がなさすぎると思う。

「うん、これだけ」

ふーん、どうしようかなー。今は仕事を楽ししいし、生活も楽し
くないし、あまり気が進まないってというのが。

「俺と結婚してください」

……はい。

第五章 最終回 完

エピソード

【OFF】

放送終了後もブースに残り、私はリスナーから届いたメールを読み漁っていた。

拓人の公開プロポーズについての感想は、やはり私たちを祝福する声が大多数を占めていた。ただ、中には「ラジオを私物化するな」など厳しい意見もあり、たいへん勉強になった。最終回ということもあり、いつもの三倍近くのメールが届いていた。

「なんちゅう顔してん？」

隣りで同じくメールに目を通していた真鍋さんが、苦笑いを浮かべながら言った。

確かに、私は死人のような顔をしていただろう。番組開始時には予想だにしていなかった怒涛の展開に、心身ともども疲れ果てているのだ。

それが心地よい疲れとならない原因は、明確だ。リスナーさまの反感に加え、結婚資金の問題、そして、依然として不明瞭な拓人の私への気持ち。私の悩みは、一生尽きることがなさそうだ。

「そんじゃ、この分はもう読んだねえ？」野波さんがメールの束を持ち、スタジオ入り口のドアに手をかける。

「お先に失礼するよお。あきちゃん、一年間お疲れさまあ。新藤くんと仲よくやってねえ」

ばたんとドアが閉ざされた一瞬、スタジオ内がしんと静まり返った。その静寂を打ち破ったのは私である。

「真鍋さんは、結婚願望つてありますか？」

「ん？」真鍋さんはきよとんとした顔を見せた。

「なんなん？ ひよっとして、結婚に気が進まへん？ 早くもマリッジブルー？」

「いえ、そういうわけじゃないんですけど」

「結婚願望、もちろんあるよ」真鍋さんは不適に微笑んだ。

「女たるもの、誰か素敵な人にもらわれたいって思うん、当然やと思わへん？ うちの場合はそうやなー、結婚相手よりも結婚そのものに対する憧れが強いかなー」

「結婚そのものに……」

「そんなん、人それぞれやで。あきちゃんも同じように考えろとは言わへんよ。好きな人と、ずっと一緒にいたいからってだけでもいいし」

「そ、そうですね」

私の場合は。。

うーん、頭が痛い。

額を押さえながら玄関のドアを開けたとき、私は身体を強張らせ

た。薄々予見していたとおり、そこに拓人のスニーカーが脱ぎ捨てられていたからだ。

私は電気も点けずに、足音を忍ばせて寝室に向かった。まるで、敵のアジトに侵入したスパイのような心境だ。ここは私の家だったはずだが。

「拓人？」

寝室は消灯されていたが、なんだか明るかった。いつもは閉まっているカーテンが開け放たれ、窓から月明かりが漏れていた。

拓人はベッドの上につつ伏せて、夜空を眺めているようだった。

「おかえり」

布団に包まったまま、彼は言った。

「ただいま」胸のうちを悟られないよう、できるだけ平然とした口調で挨拶を返す。

「いつからいたの？」

「仕事終わってから、ずっと」

「ふーん」

私は部屋の中心に立ち尽くしていた。ぼつと窓の外に目を向けていた。

婚約を交わした直後の、二人にとってはハッピーなはずの時間である。それなのに、さまざまな悩みに頭を痛めてしまっているという事実が、私に後ろめたさを感じさせていた。

そんな私を見かねたか、拓人は布団をまくり上げて、私を手招きした。

「寒いでしょ？ おいで、おいで」

「うん」

私はそう答えるが早いか、上着を脱ぎ始めていた。少し恥ずかしかったので、拓人に背を向け、残りも全部脱いだ。その行動は、後ろめたさを隠すためのものでもあった。

「ん？ 脱いでんの？」

「そうだよ。悪い？」

私はさっと布団の中に潜り込んだ。同時に、拓人は私を抱きしめてくれた。

ああ。

とても、温かい。

意外と身体が冷えていたのだろう。いつにも増して温かく感じられる。

ふわっと頭痛が萎えていき、例によって睡魔に襲われる。

拓人は私の頭をそつと撫でた。

「だよ、秋実」

何か言っている。吐息が首筋に触れ、その部分がほんのりと熱を

帯びる。そして、その息はやはり酒臭い。もう、禁酒は終了なのか。

「好きだよ、秋実」

私のことが好きだって？ そんなことは、言われなくても分かっているさ。私が訊きたいのは、なぜ私のことが好きなのかであって……あと、それから結婚資金のこともね。

あ、まずはさっきの文句を言わなきゃ。ラジオで公開プロポーズなんて、全然似合わないこととして。そのせいで、リスナーに怒られちゃったんだぞって。

「ねえ、拓人」

うつらうつらしながら、私は口を開いた。

「ん、何？」

「あのさあ……」

「うん？」拓人は上体をわずかに起き上がらせ、不思議そうに私の顔を覗き込んだ。

「なんだよ、じれったいな。早く言ってくれ」

「……………」

私の場合は。

どっつてもいいぜ。

ホッとスィーとタイム 完

エピソード（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

大好きなほのぼのを追求してみたら、こんな感じになりました。
ある意味、自分のスタイルに最も合った作品だと思います。

来週から新連載始めます。

今度は一転して凝ったお話です。

お楽しみにー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9849j/>

ホッとスイーとタイム

2010年10月11日04時30分発行